

# 金大キャンパスの 国際化を考える

金沢大学留学生センター自己点検評価  
1995.4～2002.9



金沢大学留学生センター  
2003

# 教育研究活動

金沢大学留学生シンポジウム2001



日本語教師のための  
コンピュータ利用法  
ワークショップ



日本語初級クラス授業



日研生 教育改善研究会

金沢学講義を聴く留学生と金沢市民

居合道演武



JAPAN TENT での  
杖道体験



国立大学日韓PML課題検討会 2002



第一回 日本語能力追跡調査・同窓会出席者 1997

# 留学生の活動

ドラマ発表会



研究発表会



和菓子作りにチャレンジ



山中塗体験



加賀百万石祭り



日本語クラス試験



加賀友禅着物体验



地域の学校訪問



# **金大キャンパスの国際化を考える**

**金沢大学留学生センター自己点検評価**

**1995. 4 ~2002. 9**

**金沢大学 留学生センター**

**2003**

## まえがき

金沢大学留学生センターは、1995年(平成7年)4月、学内共同教育研究施設として設置された。発足当初は、前身の「留学生教育センター」の事業を引き継いで、全学の留学生向け日本語教育と修学・生活上の相談指導等を主要業務とし、その後、北陸地区大学の国費外国人留学生に対する大学院予備教育(集中日本語研修コース)の実施、日本語・日本文化研修プログラムの実施、金沢大学短期留学プログラム(K U S E P)のコーディネイトと実施、日韓共同理工系学部留学生に対する予備教育の実施等、順次事業を拡大してきた。また、金沢という地域の特性を生かしたカリキュラムの開発や遠隔相互教育システムの試行などのソフト面における質の改善・充実を図ってきている。その活動内容は、毎年、「留学生センターニュース」で報告しているところである。

1980年代後半から現在まで金沢大学における外国人留学生の数は飛躍的に増大してきており、また、日本人学生の国際化を図る必要性が唱えられる中で、金沢大学における国際化推進の一翼を担う留学生センターの果たすべき役割は、ますます重要となってきた。

固有の専用施設を持たない金沢大学留学生センターは、事業を遂行するにあたって、あらゆる面で困難と対峙しなければならない状況にありながら、忍耐と努力を惜しまず、ひたすら金沢大学の国際化推進の一翼を担ってきているところである。

ここに、設置以来7年の間、振り返ることなく邁進してきた自らの活動内容をあらためて総括し、今後の金大キャンパスの国際化の在り方を探っていくため、金沢大学留学生センターの創設から現在までを網羅した自己点検評価を実施し、公表することとした。

独立行政法人化を目前にして、学内外の関係者からの忌憚のないご意見に耳を傾けて、金沢大学の国際化を推進する上で果たし得る留学生センターの役割を自ら問い合わせるものとしていきたい。

平成15年1月

金沢大学留学生センター長

堀林巧

# 目 次

## 第Ⅰ編 留学生センターの現在

<b>1. センターのあり方と目標</b>	
1.1 沿革	1
1.2 留学生センターの理念と目的	1
<b>2. 留学生センター組織</b>	
2.1 組織図	3
2.1.1 教員組織	3
2.1.2 事務組織（センター事務）	4
2.2 教員のプロフィール	5
2.3 教官採用・昇任の選考方法	7
<b>3. 教育部門の活動</b>	
3.1 プログラム別カリキュラム等	8
3.1.1 大学院入学前予備教育（日本語研修コース）	8
3.1.2 日韓共同理工系学部留学生コース（日韓プログラム）	22
3.1.3 日本語・日本文化研修コース	30
3.1.4 短期留学プログラム（KUSEP）	60
3.1.5 総合日本語コース（一般日本語）	73
3.1.6 全学的貢献	98
3.2 専任教官・非常勤講師の時間数	103
3.3 教育部門の評価	104
<b>4. 相談指導部門の活動</b>	
4.1 留学生相談指導	105
4.2 学外との連携・協力	110
4.3 学外からのアプローチとその対応	111
4.4 日本人学生の海外派遣	111
4.5 相談指導部門の評価	112
<b>5. 研究活動</b>	
5.1 各人の研究	113
5.2 外部資金の導入状況	126
5.3 研究活動の評価	126

<b>6. 地域・社会貢献</b>	
6.1 金沢大学公開講座 .....	127
6.2 教育委員会主催講演会 .....	127
6.3 地域との交流 .....	127
6.4 招待講演 .....	130
6.5 JAPAN TENT .....	131
<b>7. 講演・討論会・その他の活動</b>	
7.1 講演・討論会 .....	132
7.2 遠隔教育 .....	136
7.3 日本人ボランティア学生チューター制度 .....	137
7.4 日本語能力追跡調査・同窓会 .....	138
7.5 日本語・日本文化研修プログラム合宿 .....	139
7.6 ホームビジット及び里親制度 .....	140
7.7 スキー講習会 .....	141
7.8 実地見学旅行 .....	143
7.9 広報活動 .....	146
<b>8. 施設と環境</b>	
8.1 施設の現状 .....	149
8.2 施設の将来計画 .....	149
<b>9. 管理運営</b>	
9.1 管理運営組織 .....	150
9.2 留学生委員会 .....	151
9.3 留学生センター長の選出方法 .....	151
9.4 学内管理運営への参加状況 .....	151
9.5 事務組織 .....	151
9.6 自己点検評価の実施状況 .....	151
<b>10. 財政</b>	
10.1 予算（当初配分） .....	152
10.2 概算要求 .....	153
<b>11. 刊行物</b>	
11.1 研究論文集（紀要） .....	155
11.2 学生文集 .....	157
11.3 日本語教材 .....	157
11.4 報告書（留学生センター刊行のもの） .....	161
11.5 留学生センター ニュース .....	162

## 第Ⅱ編 留学生センターの課題と将来構想

<b>1. 留学生センターの将来構想</b>	
1.1 留学生センターの課題	163
1.2 留学生センターの将来構想—中期的目標	163
<b>2. 教育・研究・指導に関する将来構想</b>	
2.1 教育に関する将来構想	165
2.2 研究に関する将来構想	166
2.3 相談・指導に関する将来構想	166

## 第Ⅲ編 資 料

<b>1. 規 程</b>	
1.1 留学生センター規程	169
1.2 留学生センター外国人留学生日本語・日本文化研修コース規程	173
1.3 留学生センター外国人留学生日本語研修コース規程	174
1.4 金沢大学短期留学プログラム規程	175
<b>2. 学生交流の推移</b>	
2.1 協定校との学生の相互交流の推移	178

## **第Ⅰ編 留学生センターの現在**

# 第Ⅰ編 留学生センターの現在

## 1. センターのあり方と目標

### 1.1 沿革

本学に、学内共同教育研究施設として留学生センター（以下、本センターという）が設置されたのは、1995年（平成7年）4月である。

21世紀初頭までに10万人の留学生を受け入れるという日本政府の政策に従い、本学においても1980年代後半から留学生が増加したことに伴い、留学生に対する日本語教育や修学・生活上の支援など全学的に対応する必要が生じたため、学内措置として1990年（平成2年）度に「留学生教育センター」が設置された。そして、この活動実績をふまえて、1994年（平成6年）度及び1995年（平成7年）度に本センター設置の概算要求を行った。その結果、定員要求が認められ、1995年（平成7年）4月に留学生教育センターの活動を引き継ぐかたちで、本センター設置の運びとなった。本センターの設置は、日本海側に位置する国立大学の中では初の留学生センターであった。

本センターは、留学生教育センターが担っていた全学の留学生向け日本語教育と修学・生活上の相談指導の業務を継承するとともに、設置年度の10月からは、従前、他の国立大学に依存していた国費留学生に対する大学院予備教育（6ヵ月の集中日本語学習コース＝日本語研修コース）についても、独自に実施するに至った。

本センターは、1998年（平成10年）度の金沢大学短期留学プログラム（KUSEP）発足に伴い、KUSEPをコーディネートする役割を担うようになり、また2000年（平成12年）度からは、日韓共同理工系学部留学生コース（本学理工系学部に修学予定の留学生に対する6ヵ月の学部予備教育）を実現するなど、本学の留学生に対する教育面における役割を拡大している。また、留学生に対する相談・指導面での役割に加えて、留学生と地域住民との交流を促進するとともに、他方では、本学日本人学生の海外留学のための助言などについても、学生部留学生課と連携しながら行っている。

### 1.2 留学生センターの理念と目的

本学は、世界に開かれた研究・教育理念を目指して、50を超える海外の大学と交流協定を締結し、国際教育研究交流に努めてきた。本センターは、その理念を実現するための組織の一つとしての重要な役割を担っている。

「金沢大学留学生センター規程」第2条は、本センター設置の目的として、「外国人留学生及び海外留学を希望する金沢大学の学生に、必要な教育及び指導助言等を行うことにより、本学における留学生交流の推進に寄与することを目的とする」と定めている。そして、同規程第3条において、本センターが果たすべき業務について、以下の7項目を列挙している。

- (1) 外国人留学生に対する日本語、日本文化及び日本事情に関する教育
- (2) 外国人留学生に対する修学上及び生活上の指導助言
- (3) 外国人留学生に対する予備教育
- (4) 海外留学を希望する学生に対する修学上及び生活上の指導助言
- (5) 留学生教育の調査研究
- (6) 短期留学プログラムの実施
- (7) その他センターに関する必要な業務

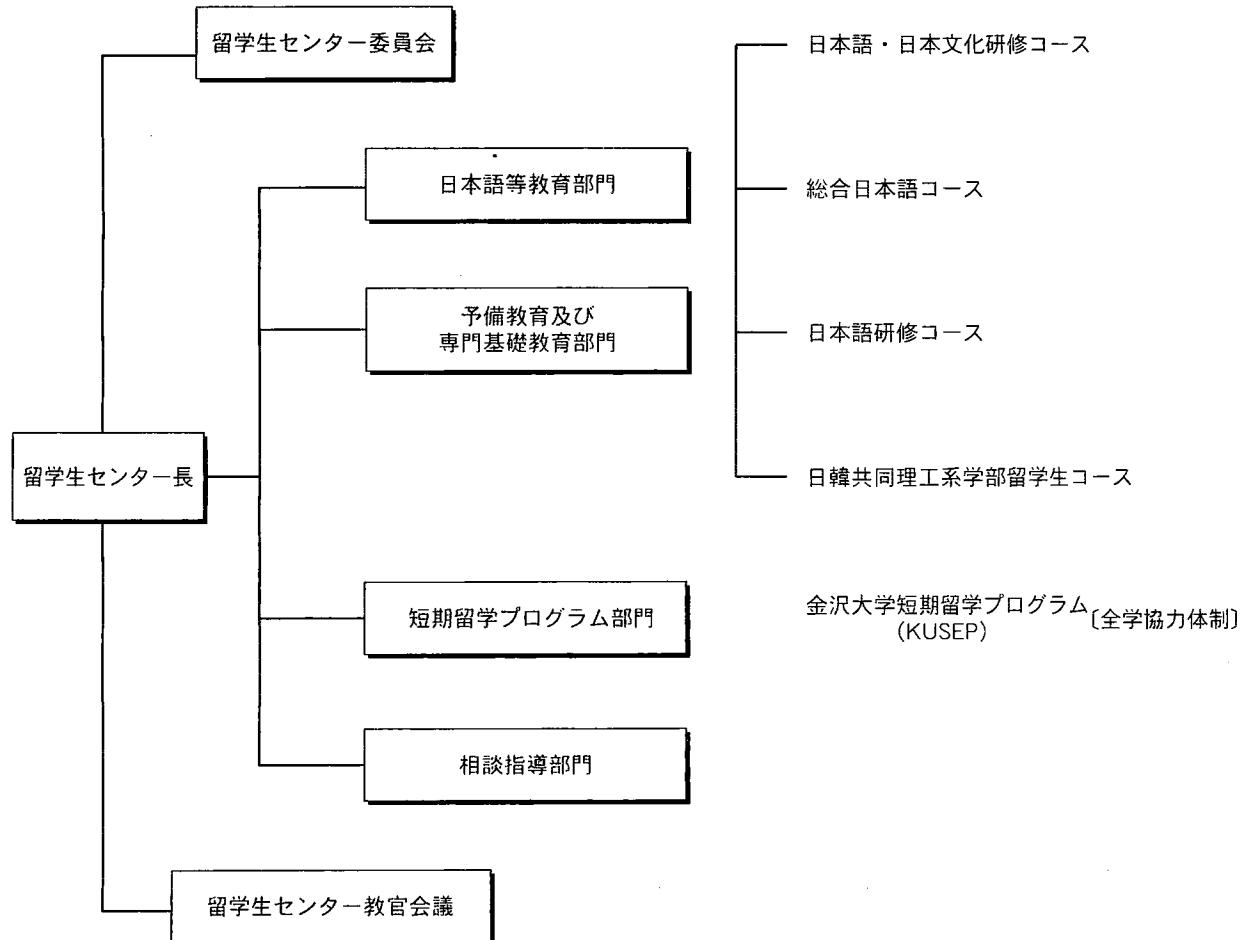
つまり、現行の規程における本センターの主な業務は、1) 外国人留学生に対する日本語・日本文化・日本事情教育及び予備教育、2) 短期留学プログラムの運営（教育を含む）、3) 留学生修学支援（指導助言）という役割と、4) 本学の学生の海外留学支援（修学上及び生活上の指導助言）の役割及び、5) 留学生教育の質を向上させるための不断の研究調査の5つにまとめることができる。

前述のように、本センターは、外国人留学生の増加に対応するための組織として創設された経緯があり、創設以来、留学生教育と相談助言を充実させてきた。他方で、国際的な学生交流促進を目的とするとともに、併せて、本学日本人学生の海外留学促進の役割も期待されている。

なお、後者の役割については、従来、派遣留学説明会・海外留学フェアの開催など、学生部留学生課と連携しながら本学日本人学生の海外留学推進のための活動を行ってきたが、海外留学へのモチベーションを高めるためにより一層の創意工夫が現在求められている。

## 2. 留学生センター組織

### 2.1 組織図



#### 2.1.1 教員組織

##### a. センター長

センター長は、「本学の専任の教授をもって充てる（留学生センター規程第5条第1項）」こととされ、任期は2年とし再任を妨げないこととなっている。歴代のセンター長は以下のとおりである。

センター長氏名	所 属・官 職	在 任 期 間
広瀬 幸雄	理学部(平成8年3月までは教育学部)・教授	平成 7 年 4 月～平成 10 年 3 月
大橋 信喜美	理学部・教授	平成 10 年 4 月～平成 13 年 3 月
堀林 巧	経済学部・教授	平成 13 年 4 月～現在

### b. 専任教官

留学生センターの教官定員は8名であり、2002年9月現在において定員どおり専任教官8名が配置されている。これに兼任の留学生センター長を含め、9名で成り立っている。

専任教官は平成7年のセンター発足時は5名であったが、平成10年度に短期留学プログラム部門に教授1・助教授1が配置され、平成12年度に日本語等教育部門に教授1の拡充があった。また、平成7年度末に教養部改組に伴い、助教授1が外国語教育研究センターからの借用定員として配置された。その後、平成14年4月30日付けで借用関係を解消するまでの間には、平成12年8月から平成13年8月までの1年間、協定校であるアメリカ合衆国バージニア州のウイリアム・アンド・メアリー大学からヒルマン小林恭子氏が助教授として就任し、金沢大学に留学生を送り出す立場から、本学内の留学生受け入れ業務に対して様々な助言及び改善案の提案を行った。

現在、留学生センターが実施している教育プログラム・コースは、「日本語研修コース」、「日韓共同理工系学部留学生コース」、「日本語・日本文化研修コース」、「総合日本語コース」及び「金沢大学短期留学生プログラム」である。このうち「金沢大学短期留学生プログラム」を除く4コースについては、5名の専任教官が担当責任者となっており、「金沢大学短期留学生プログラム」には2名が参加している。この他に1名の専任教官が相談・指導を担当している。

#### 留学生センター教官役割分担

役職・部門・コース	現員	専任／兼任	役職内訳
センター長	1	兼任	教授
日本語研修コース	1	専任	教授
金沢大学短期留学プログラム	2	専任	教授1名、助教授1名
日韓共同理工系学部留学生コース	1	専任	助教授
日本語・日本文化研修コース	1	専任	助教授
総合日本語コース	2	専任	助教授2名
相談指導部門	1	専任	教授

#### 2.1.2 事務組織

留学生センターの事務は、学生部留学生課が担当している。留学生課職員数は2002年9月現在で常勤8名、非常勤職員2名の計10名である。このうち留学生センターの事務を直接担当するのは、留学生教育企画係の常勤2名、非常勤職員1名である。

## 2.2 教員のプロフィール

---

岡 澤 孝 雄 OKAZAWA Takao

生 年：1946年

官職・学位：教 授・理学博士

学歴・職歴：北海道大学理学部動物学科卒業（1969.3），北海道大学大学院理学研究科動物学専攻修士過程修了（1973.3），北海道大学大学院理学研究科動物学専攻博士課程中退（1981.6），佐賀医科大学医学部助手（1981.7），金沢大学助手（1992.2），金沢大学講師（1994.7），金沢大学教授（1995.10）

専門分野：衛生動物学

担当部門：短期留学プログラム（KUSEP）部門

---

三 浦 香 苗 MIURA Kanae

生 年：1948年

官職・学位：教 授

学歴・職歴：九州大学文学部哲学科美学美術史卒業（1972.3），ソニー企業（株）ソニー・ランゲージ・ラボラトリー社員（1972.4），モービル石油（株）人事部語学訓練課日本語専任講師（1976.4），九州大学留学生教育センター助手（1991.5），金沢大学教授（1995.10）

専門分野：日本語教育

担当部門：予備教育及び専門等基礎教育部門（日本語研修コース）

---

八重澤(松下)美知子 YAEZAWA (MATSUSHITA) Michiko

生 年：1950年

官職・学位：教 授・教育学修士

学歴・職歴：東京学芸大学大学院教育学研究科学校教育専攻修士課程修了（1975.3），東京教育大学教育学部教育心理学講座青年心理学研究生修了（1976.3），財團法人田中教育研究所研究員（1976.4），金沢大学講師（1991.12），金沢大学教授（1995.10）

専門分野：教育・社会系心理学

担当部門：相談指導部門

---

長野 ゆり NAGANO Yuri

生年：1949年

官職・学位：助教授・文学修士

学歴・職歴：大阪大学大学院文学研究科日本学専攻博士前期課程修了（1992.3），大阪大学大学院文学研究科日本学専攻博士後期課程単位修得退学（1995.3），岡山大学留学生センター非常勤講師（1995.10），鳥取大学教育学部非常勤講師（1996.4），金沢大学助教授（1998.9）

専門分野：日本語学・日本語教育

担当部門：日本語等教育部門（総合日本語コース）

---

峯 正志 MINE Masashi

生年：1959年

官職・学位：助教授・文学修士

学歴・職歴：広島大学文学部文学科言語学専攻卒業（1983.3），広島大学大学院文学研究科言語学専攻博士課程前期修了（1985.3），広島大学大学院文学研究科言語学専攻博士課程後期単位修得退学（1989.7），広島大学教育学部教科教育学科国語教育学（日本語・日本事情）助手（1989.8），広島大学留学生センター助手（1990.6），金沢大学講師（1996.12），金沢大学助教授（1998.8）

専門分野：言語学・日本語教育

担当部門：日本語等教育部門（総合日本語コース）

---

太田 亨 OTA Akira

生年：1962年

官職・学位：助教授・文学修士

学歴・職歴：東京外国語大学外国語学部スペイン語学科卒業（1986.3），東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程日本語学専攻修了（1992.3），メキシコ国立自治大学外国語教育センター・アジア諸語並びに現代ギリシャ語学科日本語部門専任講師（1989.3），メキシコ大学院大学アジア・アフリカ研究センター非常勤講師（1989.10），国際交流基金派遣日本語教育専門家・サンパウロ日本語普及センター日本語教師養成講座主任（1992.12），国際交流基金サンパウロ日本語センター主任講師（1994.4），大東文化大学国際交流センター非常勤講師（1997.10），金沢大学講師（1998.4），金沢大学助教授（2000.6）

専門分野：（日・西・ポ）対照言語学、日本語教育

担当部門：予備教育及び専門等基礎教育部門（日韓共同理工系学部留学生コース）

---

パリハワダナ ルチラ PALIHAWADANA Ruchira

生 年：1963年

官職・学位：助教授・博士（学術）

学歴・職歴：東京外国语大学大学院地域文化研究科博士前期課程修了（1994.3），東京外国语大学大学院地域文化研究科博士後期課程修了（1997.9），大東文化大学国際交流センター非常勤講師（1997.10），金沢大学助教授（1998.5）

専門分野：日本語学・日本語教育

担当部門：日本語等教育部門（日本語・日本文化研修コース）

---

ビットマン ハイコ BITTMANN Heiko

生 年：1964年

官職・学位：助教授・Dr. phil.（文学博士）

学歴・職歴：ドイツ・チュービンゲン（Tübingen）大学大学院修了（1993.3），金沢大学博士課程満期退学（1999.3），ドイツ・チュービンゲン（Tübingen）大学文学博士（1999.5），金沢大学ドイツ語非常勤講師（1998.4～2001.3），金沢大学留学生センター助教授（2001.2）

専門分野：日本学・スポーツ科学

担当部門：短期留学プログラム（KUSEP）部門

### 2.3 教員採用・昇任の選考方法

留学生センター教官の選考については、「金沢大学留学生センター規程」及び「金沢大学留学生センターの教官選考内規」に定められている。留学生センターの教員の選考に関する事項を審議するのは、センター長、センター専任教員のうちの教授若干人に、金沢大学教育委員会（後述）から推薦された者若干人を加えた「センター教官会議」<sup>1</sup>である。

センター教官選考の必要が生じた場合、センター長は、センター長、センターの教授若干名、及び教官会議の構成員として金沢大学教育委員会から推薦された者若干人をもって組織される「審査委員会」を「センター教官会議」の議を経て設置する。次に委員の互選により審査委員長を選出し選考審査が行われる。その後、「センター教官会議」において審査結果に基づき、出席した構成員の3分の2以上の多数をもって教官候補者が選考される（「金沢大学留学生センターの教官選考内規」）。

以上が2000年（平成12年）4月1日から本学留学生センターで適用されている教員選考方法である。

---

1 「センター教官会議」という同じ表現が用いられているが、通常の「センター教官会議」と教員選考の際の「センター教官会議」はその構成員において異なっている。以下で用いる「センター教官会議」は、教員選考の際の「センター教官会議」である。（センター規程第6条第2項第1号及び第7条第2項、センターの教官選考内規第3条）

### 3. 教育部門の活動

#### 3.1 プログラム別カリキュラム等

##### 3.1.1 大学院入学前予備教育（日本語研修コース）

###### 3.1.1.1 コース概要

###### a. 対象

本コースは、修了後本学及び北陸地区の大学院に配属される国費外国人留学生を対象とし、大学生活を送る上で最低限必要な日本語能力を半年間（17週×30時間）で集中的に習得するためのコースである。

対象となる留学生は、研究留学生と教員研修留学生の二種類である。研究留学生は、自国で学部又は大学院を修了し、日本の大学院で大学院生又は研究生として研究活動を行なう予定の者である。教員研修留学生は自国においては初等、中等、高等教育の現役教員等であり、日本の大学で学校教育に関する研究を行う予定の者である。年齢は35歳未満である。非漢字圏の出身者が主である。学習者は、大半の者が初級の初步レベルで来日する。すでに中級以上のレベルに達していると認められた者は、留学生センター総合日本語コースでの日本語学習、あるいは進学予定研究科等への直接進学が認められる。

なお、コース生の種類は、前期は研究留学生のみで、後期は教員研修生を主とし、研究留学生も混ざっている。進学先の大学院は、石川県では金沢大学、北陸先端大学院大学、金沢美術工芸大学、富山県は富山大学（1998年度まで）、富山医科薬科大学（1999年度まで）、福井県は福井大学、福井医科大学である。その他に、第4期には新潟国際大学へ進学予定の者もあった。

###### b. クラス・定員・開講時期

本コースでは、毎年4月と10月に新たなコースが開講される。平成7（1995）年10月に第1期生を迎えた。コースの定員は30名であるが、平成13（2001）年前期の14期までの実績は5名から16名の間であったため、人数の少ない期は初級1クラス、多い期は初級2クラスとした。または初級、中級、（上級）を各1クラスの編成とした。

開講期間は、前期は4月から9月、後期は10月から3月の各6ヶ月（17週間×30時間）である。

###### 3.1.1.2 カリキュラム

###### a. 科目

授業は月曜日から金曜日まで週5日、午前8時50分から午後4時まで（90分×4コマ、1日6時間）週20コマ30時間である。1週間あたりの授業科目の内訳は、以下のとおりである。

表3.1.1-1 初級コースカリキュラム

授業科目名	コマ数／週	
初級日本語演習	15コマ（内1コマは試験）	22.5時間
コンピュータ演習	2コマ	3.0時間
プロジェクト（専門への橋渡し）	2コマ	3.0時間
日本人学生との共同活動	1コマ	1.5時間
計	20コマ	30.0時間

表3.1.1-2 中・上級コースカリキュラム

授業科目名	コマ数／週	
中級・上級日本語演習	1コマ～5コマ	1.5～7.5時間
コンピュータ演習	2コマ	3.0時間
プロジェクト（専門への橋渡し）	2コマ	3.0時間
日本人学生との共同活動	1コマ	1.5時間
計	20コマ	9.0～15.0時間

科目としては1期から14期まで同様であるが、毎期内容に改良を加えた。複数クラス編成の学期は、日本語演習以外は初級から上級までの合同クラスとする。中・上級クラスは、日本語演習科目が少ないが、学生は総合日本語コースの該当レベルの日本語授業を受ける。指導教官の許可があれば、学部の専門の授業にも参加できる。

#### b. 授業内容と達成目標

日本語研修コースにおける各科目の授業内容は以下のとおりである。

##### i) 初級日本語演習

目標：基礎的な聞く・話す・読む・書く力と同時に現実場面での運用力を養成する。

内容：文法解説、文型練習、会話練習、仮名・漢字、発音練習、視聴覚演習、読解演習、作文演習、インタビュー調査実習など。

##### ii) 中級日本語演習

目標：基礎日本語力を土台に、やや高度な文型、語彙・表現を使った聞く・話す・読む・書く力と同時に現実場面での運用力を養成する。

内容：文型練習、会話練習、視聴覚演習、読解演習、作文演習など。

##### iii) 上級日本語演習

目標：各自の専門分野での日本語力を増強する。

内容：各自の専門について話す、専門書の読解、レポート添削など。

iv) コンピュータ演習

目的：日本語の各種ソフトを使ったコンピュータ操作能力を養成する。

内容：Microsoft Word を使ったワープロ、Excel を使った表計算・グラフ作成、Statview を使った統計解析、インターネットなどからのデータ取り込み、Power Point を使った発表用スライド作成など。作文の授業やプロジェクトワークと連動している。

v) プロジェクト専門への橋渡し

目的：専門分野での活動の練習として、初級日本語を駆使した調査・研究を行い、発表する。

内容：1995年以来口頭研究発表プロジェクトを行ってきたが、2000年からは、前期に口頭研究発表プロジェクト、後期にはハイブリッド・ドラマプロジェクトを行っている。

口頭研究発表プロジェクト（前期）

各人の興味あるテーマを決め、日本人にアンケート調査をし、そのデータをパソコンを使って分析し、それを研究発表の形で対外的に発表できるようにまとめ、Power Point を使って個別に口頭発表を行う。本コースでは、このプロジェクトを第1期以来続け、内容に改善を加えてきた。

本プロジェクトは、単なる日本語による口頭発表プロジェクトとは異なる。狙いは、専門課程での研究に役立つ方法論を学生が身につけることである。国・専門による差はあるが、概して発展途上国の大学の研究のあり方は日本のそれと大きく異なる。そのため、敢えて初級の段階からこのようなプロジェクトを行い、テーマの決定・調査・分析・口頭発表の方法を、学生のレベルに合わせて丁寧に指導している。日本語力が初級段階であるため、学生も教師も苦労が多いが、指導方法が確立してくるに従って学生の発表のレベルもあがってきた。

ハイブリッド・ドラマプロジェクト（後期）

上記の口頭発表プロジェクトの実施により、コースの受講生が研究留学生のみの前期には、日本語能力のみならず、研究上の意欲と能力の向上に顕著な効果が認められたのに対し、研究発表に不慣れな教員研修生中心の後期には、口頭発表プロジェクトの実施に相当の困難が生じていた。

そこで、後期研修生のために、日本語と日本事情を楽しく学びながら、同時に専門への橋渡しとなる集団発表を考えた。すなわち、日本語力中級の者が上記の発表プロジェクトの要領で研究し発表するが、初級の者（主として教員研修留学生）はその発表の一部として発表を補完するかたちで寸劇を演じる。日本事情の研究と報告、そして動作や表情を含んだ日本語の表現が一体となって、ひとつの発表を構成することになる。その意味で、研究報告と舞

台表現とを有機的に統合したものである。舞台表現としては登場人物の生き生きとした表現力が求められる「喜劇」とするとともに、日本の家族像をメインテーマとすることから、研究の素材として『サザエさん』をはじめとした漫画の諸場面を用いることで興味を増すように配慮している。

プロジェクトの実施方法は、次のようなものである。週2コマ程度を使って、漫画読解、日本の家族研究を行う。中・上級のコース生が日本人に対するアンケート調査を実施し、そのデータ処理も経験する。そのうえで、発表用スライドを作成して研究発表を行う。また、この研究・調査と並行して、発表にあわせた寸劇を選び、初級のコース生が芝居の基礎練習、シナリオの読み練習、立ち稽古を経て、研究発表の中で演じることになる。

教育効果の見地からすると、学生は、狭義の言語としての日本語の学習に加えて、非言語行動を含む日本文化、生活事情をドラマという形式を通じて三次元的に学習するとともに、同時進行の形で行われる研究・調査方法、口頭発表技術との連携をも学ぶことになる。

これまでのテーマは、以下のとおりである。

第9期（2000年3月に発表）：「日本の家族像—夫として父としての男性像」

第11期（2001年3月に発表）：「『サザエさん』の言葉遣いからみた夫と妻の距離感」

第13期（2002年3月に発表）：「『サザエさん』の文末表現にみられる男言葉・女言葉」

#### vi) 日本人学生との共同活動：

目的：研修生と日本人学生が互いに世界に対する知識を広げ、深めることによる異文化理解を目的とする。それと同時に、交際の範囲の狭いコース生が一般日本人学生と会話することによる日本語力の向上も期待される。

内容：日本人学生が企画した「日本文化紹介」、コース生の「私の国」発表、「私の国の言葉」授業、両者で決めたテーマについての日本語と英語によるディスカッション。

#### c. 時間割

原則として、1・2・3限目は日本語の総合学習に、4限目はその他の活動にあてる。

1・2限目は、発音・語彙・文法項目の学習。主教科書を1日1課のペースで進む<sup>1</sup>。隔週水曜日の1限目に試験を、2限目に文法解説またはプロジェクトワークを行う。試験のない週は、コンサルテーション、プロジェクトワークにあてる。

<sup>1</sup> 教科書50課全部を終了するために、原則として1日1課としているが、3～4課ごとに復習日を入れる等、クラスの状況に合わせて工夫をしてきた。また、平成13(2001)年後期の13期生からは、思い切って学習項目を減らす工夫をした。コース生の同意を得て、コース後半の進度を3日で2課にして、緩やかにすることにした。(これによって最後の3課程度を終了できなくなる。) 平成14(2002)年後期からは、更に工夫をし、後半の各課の学習項目から重複度の低いものを削除することにし、学生の負担を減らした。

学習項目全部を詰め込むよりも、この方が、教師も学生も余裕をもって取り組むことができるよう思えた。

3限目は、文字学習（仮名・漢字）と、1・2限目に学習したことの応用、運用（コミュニケーション）練習を行う。

4限目は、曜日によって、次のような学習活動を行う。

　コンピュータ演習、視聴覚演習（ビデオを使った日本事情、聴解練習、歌など）、作文・読解演習、日本人学生との共同活動。

#### d. 使用教材

日本語研修コースにおける教材・機器の使い方には次の特徴がある。

「初級日本語演習」は主教科書に沿って行うが、主教科書は文法・文型に主眼がおかれていたため、副教材を使って運用（コミュニケーション）力を養う練習を補っている。漢字、作文、読解、視聴覚にもそれぞれふさわしい教材を選んで使用する。

主教科書を補うための副教材は、市販されている教科書や教材、大学等教育機関作成のもの、自作教材などを組み合わせて使用する。

「中級日本語演習」には学生のレベルと傾向と要望に応じた担当教師の手作り教材を、「上級日本語演習」には学生が希望する専門書を使用する。

「プロジェクトワーク」（口頭研究発表プロジェクト（前期）、ハイブリッド・ドラマプロジェクト（後期）、「コンピュータ演習」には、独自に編纂した教科書・教材を使用する。

以下は、使用した主教科書、漢字教科書、プロジェクト教科書である。

#### 初級主教科書

第1期 平成7（1995）年10月期

『日本語の基礎Ⅰ、Ⅱ』、海外技術者研修協会、スリーエーネットワーク

第2期 平成8（1996）年4月期～第7期 平成10（1998）年10月期

『新日本語の基礎Ⅰ、Ⅱ』、海外技術者研修協会、スリーエーネットワーク

第8期 平成11（1999）年4月期～第14期 平成14（2002）年4月期

『みんなの日本語』、海外技術者研修協会、スリーエーネットワーク

#### 初級漢字教科書

第1～14期 『基本漢字500』 加納千恵子他、凡人社、1989

#### プロジェクト教科書

第6～14期

『5ヶ月で口頭発表試作版』三浦ほか、金沢大学留学生センター、1998

第9、11、13期

『ハイブリッド・ドラマプロジェクト試作版1999』三浦他、金沢大学留学生センター

### e. 使用機器

1限目から4限目まで、ほぼ毎時間、テープレコーダー、ビデオ、OHP、OHC（実物投影機）、パソコン、プロジェクターなどを駆使した授業を行っている。また、コンピュータ演習、作文などの時間には教室からLANに接続して、インターネットからの情報や画像の取り込み、web上の辞書や添削ソフトの使用なども指導している。

コース生にはコース中、ノートパソコンを貸与する。

#### 3.1.1.3 教育活動実績

i) 第1期：平成7(1995)年10月～平成8(1996)年3月

開講期間：1995.10.25(水)～1996.3.12(火)

冬季休暇：12月25日(月)～1月12日(金)

授業時間：次表のとおり(授業時間は、14期まで同様)

表3.1.1-3 授業時間

1限目	8:50-10:20
2限目	10:30-12:00
3限目	12:50-14:20
4限目	14:30-16:00

表3.1.1-4 第1期 時間割<sup>2</sup>・担当

曜日	1限目	2限目	3限目	4限目
月	A 芳浦	B 深澤	C 上田	I 深澤
火	A 三浦*	B 上田	C 秦	D 王*
水	F 三浦*	G, I 三浦*	D 李*・岡沢*	K 芳浦
木	A 深澤	B 深澤	C 三浦*	H 岡沢*
金	A 林	I 三浦*	C 芳浦	E 上田

\* : 脚注参照<sup>3</sup>

<sup>2</sup> 時間割表中に用いた符号の表す内容：

A : 発音、書き取り、文型導入・練習(1限目)

B : 文型練習、会話、応用(2限目)

C : 表記(仮名・漢字)、コミュニケーションタスク(3限目)

D : 読解・作文 E : 視聴覚(ビデオ)・日本事情 F : 試験 G : 文法

H : コンピュータ演習

I : 口頭発表プロジェクト J : ドラマプロジェクト

K : 日本人学生との共同活動(4限目)

<sup>3</sup> \*は専任教官を表す

ii) 第 2 期：平成 8 (1996) 年 4 月～9 月

開講期間：1996. 4 .17(水)～1996. 9 .13(金)

夏季休暇：7 月22日(月)～8 月30日(金)

表 3.1.1-5 第 2 期 時間割・担当

曜日	1 限目	2 限目	3 限目	4 限目
月	A 古本	B 早川	C 古本	H 岡沢*
火	A 王*	B 古本	C 早川	D 李*
水	F 古本	G, I 三浦*	I 深澤	K 三浦*
木	A 早川	B 三浦*	C 李*	H 岡沢*
金	A 深澤	B 王*	E 深澤	I 三浦*

iii) 第 3 期：平成 8 (1996) 年 10 月～平成 9 (1997) 年 3 月

開講期間：1995.10.15(火)～1996. 3 . 7 (金)

冬季休暇：12月24日(月)～1月17日(金)

表 3.1.1-6 第 3 期 時間割・担当

曜日	1 限目	2 限目	3 限目	4 限目
月	A 島	B 古本	C 王*・古本	H 岡沢*
火	A 鎌田	B 早川	C 李*・島	D 王*
水	F 古本	G, I 浦*	I 王*・深澤	K 三浦*
木	A 早川	B 三浦*	C 李*・王*	H 岡沢*
金	A 深澤	B 鎌田	I 三浦*・深澤	E 王*

iv) 第 4 期：平成 9 (1997) 年 4 月～9 月

開講期間：1997. 4 .15(火)～1997. 9 .19(金)

夏季休暇：7 月22日(火)～8 月29日(金)

表 3.1.1-7 第4期 時間割・担当

曜日	1 限目	2 限目	3 限目	4 限目
月	A 李・島*	B 芳浦・早川	C 早川・峯*	H 岡沢*
火	A 鎌田・芳浦	B 李*・島	C 島・早川	C 峯*
水	F, I 古本・深澤	G, I 三浦*・岡沢*	D 深澤	K 三浦*
木	A 三浦*・上田	B 古本・李*	C 上田・古本	E 早川
金	A 古本・深澤	I 深澤・鎌田	C 鎌田	H 岡沢*

v) 第 5 期：平成9(1997)年10月～平成10(1998)年3月

開講期間：1997.10.14(火)～1998.3.6(金)

冬季休暇：12月22日(月)～1月16日(金)

表3.1.1-8 第5期 時間割・担当 (3限目のみ初級2クラス編成)

曜日	1限目	2限目	3限目	4限目
月	A 深澤	B 早川	C 早川・深澤	H 岡沢*
火	A 早川	B 島	C 島・峯*	G, E 峰*
水	F 岡沢	G, I 三浦*	D 古本・深澤	K 三浦*
木	A 芳浦	B 三浦*	C 古本・島	E 古本
金	A 鎌田	B 芳浦*	I 鎌田・三浦*	H 岡沢

vi) 第 6 期：平成10(1998)年4月～9月

開講期間：1998.4.13(月)～1998.9.18(金)

夏季休暇：7月20日(月)～8月31日(月)

表3.1.1-9 第6期 時間割・担当 (3限目のみ初級2クラス編成)

曜日	1限目	2限目	3限目	4限目
月	A 山口	B 島	C 島・山口	H 岡沢*
火	A 深澤	B 古本	C 太田*・島	G, E 峰*
水	F 古本	G, I 三浦*	I 三浦*・深澤	K 深澤
木	A 山口	B 三浦*	C 峰・太田*	E, D 芳浦
金	A 古本	B 太田	C 三浦*・芳浦	H 岡沢

vii) 第 7 期：平成10(1998)年10月～平成11(1999)年3月

開講期間：1998.10.12～1999.3.1

冬季休暇：12月21日(月)～1月8日(金)

表3.1.1-10 第7期 時間割・担当 (1・2限目は初級2クラス編成、3限目は初級・中級各1クラス編成)

曜日	1限目	2限目	3限目	4限目
月	A 島・芳浦	B 太田*・芳浦	C 山口・D パリハワダナ* (中 <sup>4</sup> )	G, E 峰*
火	A 島*・長野	B 芳浦*・長野	C 太田・深澤* (中)	H 岡沢*
水	F, I 三浦*・山口	B 三浦*・島	D 長野・B 山口 (中)	K 深澤
木	A パリハワダナ*・深澤	B 三浦*・早川	C 太田・B 三浦* (中)	E 長野
金	A 太田・深川	I 深川・笹原	C 笹原・B 早川 (中)	H 岡沢

<sup>4</sup> (中) =中級クラス

viii) 第8期：平成11(1999)年4月～9月

開講期間：1999.4.12(月)～1999.9.17(金)

夏季休暇：7月19日(月)～8月27日(金)

表3.1.1-11 第8期 時間割・担当(1・2限目と水・木・金の3限目は初級2クラス編成)

曜日	1限目	2限目	3限目	4限目
月	A 早川・パリハワダナ*	B パリハワダナ*・早川	C 鎌田	H 岡沢
火	A 笹原・島	B 三浦*・笹原	C 島	G, E 峰*
水	F, I 長野*・山口	G, I 三浦*・島	D 太田*・I 三浦*	K 三浦*
木	A 小西・長野*	B 山口*・木水	C 笹原・木水	D 長野*
金	A 鎌田・山口	B 太田*・鎌田	D パリハワダナ*・小西	H 岡沢*

ix) 第9期：平成11(1999)年10月～平成12(2000)年3月

開講期間：1999.10.18(月)～2000.3.3(金)

冬季休暇：12月20日(月)～1月7日(金)

表3.1.1-12 第9期 時間割・担当 (1・2限目は初級2クラス編成)

曜日	1限目	2限目	3限目	4限目
月	A 早川・長野*	B 野*・島	C 島	E 峰*
火	A 太田*・後藤	B 後藤・パリハワダナ*	C 木水	H 岡沢*
水	F, J 三浦* /峰*・山口	G, J 三浦*・島	D, E 早川	K 三浦*
木	A パリハワダナ*・敷田	B 敷田・太田*	C 小西・J 三浦* (中上 <sup>5</sup> )	D レアリー
金	A 笹原・山口	J 山口・小西	C 笹原	H 岡沢*

x) 第10期：平成12(2000)年4月～9月

開講期間：2000.4.12(水)～2000.9.18(月)

夏季休暇：8月4日(金)～9月1日(金)

表3.1.1-13 第10期 時間割・担当 (1・2限目は初級2クラス編成)

曜日	1限目	2限目	3限目	4限目
月	A 早川・太田*	B 太田*・早川	C 早川	H 峰*
火	A 長野*・山口	B 山口・木水	C 木水	H 岡沢*
水	F, I 長野*・岡沢*・山口	I 島・長野*	I 長野*	K 岡沢*
木	A 島・敷田	B 敷田・島	C 敷田	D 島
金	A 小西・パリハワダナ*	B パリハワダナ*・小西	C 笹原	E 笹原

<sup>5</sup> (中上) = 中上級者用プロジェクト

xi) 第 11 期：平成12(2000)年10月～平成13(2001)年 3月

開講期間：2000.10.11(水)～2001.3.5(月)

冬季休暇：12月21日(木)～1月10日(水)

表3.1.1-14 第11期 時間割・担当 (1・2限目は初級2クラス編成)

曜日	1限目	2限目	3限目	4限目
月	A パリハワダナ*・鎌田	B 鎌田・パリハワダナ*	C 山口	H 岡沢*
火	A 山口	B 島	C 島	E 島
水	F, J 三浦*・山口	G, J 三浦*・島	J 太田*・山口	K 小林
木	A 敷田	B 敷田	C 敷田	D 峯*
金	A 笹原・長野*	B 長野*・笹原	C 笹原	H 岡沢*

xii) 第 12 期：平成13(2001)年 4月～9月

開講期間：2001.4.11(水)～2001.9.17(月)

夏季休暇：8月6日(月)～8月31日(月)

表3.1.1-15 第12期 時間割・担当 (2限か3限に初級・中級2クラス編成、火曜4限は初級・上級2クラス編成)

曜日	1限目	2限目	3限目	4限目
月	A 敷田	B パリハワダナ*・D 敷田 (中 <sup>6</sup> )	C 敷田	H 岡沢*
火	A 小西	B 小西	I 三浦* (中)・C 古本	D 太田*・I 三浦* (上 <sup>7</sup> )
水	F, I 三浦*・山口	G, I 三浦*・島	I 山口	K 小林*
木	A 山口	B 笹原	C 島・笹原 (中)	E 島
金	A 太田*	B 太田*・D パリハワダナ* (中)	C 三浦*	H 岡沢*

xiii) 第 13 期：平成13(2001)年10月～平成14(2002)年 3月

開講期間：2001.10.11(木)～2002.3.6(水)

冬季休暇：12月18日(火)～1月7日(月)

表3.1.1-16 第13期 時間割・担当

曜日	1限目	2限目	3限目	4限目
月	A 敷田	B 敷田	C 島	H 岡沢*
火	A 笹原	B 島	D 太田* (中)・C 島	E 笹原
水	F, J 三浦*・山口	G, J 三浦*・島	D 太田*	K 三浦*
木	A 平瀬	J 山口	B 敷田・山口	C 敷田
金	A 平瀬	B 小西	C 小西	H 岡沢*

<sup>6</sup> (中) = 中級クラス

<sup>7</sup> (上) = 上級クラス

xiv) 第 14 期：平成14(2002)年 4月～9月

開講期間：2002. 4 .11(木)～2002. 9 .13(金)

夏季休暇：8月1日(木)～8月30日(金)

表 3.1.1-17 第14期 時間割・担当

曜日	1限目	2限目	3限目	4限目
月	A 小西	B 敷田	C 敷田	K 三浦*
火	A 小西	B 小西	C 島	E 島
水	F, I 山口・三浦*	G, I 三浦*・島	I 山口	H 岡沢*
木	A 笹原	B 笹原	C 太田*	D 太田*
金	A 平瀬	B 山口	C 三浦*・太田*	H 岡沢*

### 3.1.1.4 成績評価

#### a. 履修状況

第1期から第14期までに受け入れた研修コース留学生は149名である（大使館推薦144名、大学推薦5名）。その大部分の者が初級集中コースを受けた。日本語力中級以上と判断された者19名は、総合日本語コースの中・上級日本語を受講し、コンピュータ演習、日本人学生との共同活動、プロジェクト専門への橋渡し、視聴覚演習、作文などのみに参加した。研修コース在籍のまま進学予定研究科の研究生として受け入れられた7名は、コースの授業にはほとんど参加できなかった。

教員研修留学生は、研修コース履修者中44名（約29%）である。

表3.1.1-18 日本語研修コース履修者数と内訳

学期	履修者数	内 訳		
		大使館推薦		大学推薦
		研究留学生	教員研修生	研究留学生
第1期：平成7（1995）年10月期	6	4	2	0
第2期：平成8（1996）年4月期	9	9	0	0
第3期：平成8（1996）年10月期	10	3	7	0
第4期：平成9（1997）年4月期	16	16	0	0
第5期：平成9（1997）年10月期	8	2	6	0
第6期：平成10（1998）年4月期	10	10	0	0
第7期：平成10（1998）年10月期	14	8	6	0
第8期：平成11（1999）年4月期	15	15	0	0
第9期：平成11（1999）年10月期	14	7	7	0
第10期：平成12（2000）年4月期	13	8	0	5
第11期：平成12（2000）年10月期	9	3	6	0
第12期：平成13（2001）年4月期	9	9	0	0
第13期：平成13（2001）年10月期	11	6	5	0
第14期：平成14（2002）年4月期	5	5	0	0
計	149	105	39	5

以下の修了要件を満たした学生に対しては、修了証明書が授与される。

1. 出席と平常点が良好であること
2. 20科目30時間必修の日本語課目試験に合格すること
3. 学期の修了時に口頭研究発表会で研究成果を（口頭で）発表すること
4. 研究レポートを提出すること

初級の成績の評価は、以下の基準による。

試験	250点（隔週の定期試験：書く・聴く・話す200、漢字テスト50）
プロジェクト	150点（研究計画50、アウトラインの内容と日本語50、発表50）
平常点	100点（出席40、宿題40、授業への参加態度20）
計	500点

A=400点以上、B=350～399点、C=300～349点

但し、この評価は学生の勉学に対する意欲を刺激するためのものであり、落第はない。

本コースでは、初級集中修了時に過去の日本語能力試験3級を受けさせ、日本語力の一応の目安としている。（これは成績評価には反映させない。）初級受講者の半数以上（115名中62名）が合格ラインを超えていている。

日本語能力試験に合わせた指導は全くしていない上、専門への橋渡しプロジェクトや他の活動に割かれる時間も多く、しかも大多数の者が日本語力ゼロレベルから学び始めることを考えると、17週間で3級合格ラインを半数以上が超えたことは、コースの一応の成果を表しているだろう。

表3.1.1-19 日本語研修コースの成績一覧(初級者のみ)

学期	初級人数	成績			日能3級 模試合格者数 <sup>8</sup>
		A	B	C	
第1期：平成7（1995）年10月期	5	2	1	2	-----
第2期：平成8（1996）年4月期	9	6	1	2	5
第3期：平成8（1996）年10月期	9	7	1	1	7
第4期：平成9（1997）年4月期	13	8	5	0	5
第5期：平成9（1997）年10月期	7	7	0	0	6
第6期：平成10（1998）年4月期	7	3	2	2	3
第7期：平成10（1998）年10月期	10	6	1	3	6
第8期：平成11（1999）年4月期	11	8	3	0	9
第9期：平成11（1999）年10月期	8	7	1	0	6
第10期：平成12（2000）年4月期	11	7	1	3	8
第11期：平成12（2000）年10月期	6	6	0	0	3
第12期：平成13（2001）年4月期	4	2	2	0	2
第13期：平成13（2001）年10月期	8	4	3	1	0
第14期：平成14（2002）年4月期	5	5	0	0	2
合計	113	78	21	14	62

<sup>8</sup> 日本語能力試験3級模擬試験の合格者数

### 3.1.1.5 問題点

#### a. 研究留学生と教員研修生の混在

毎年、前期の受講生は全員が研究留学生であるが、後期は教員研修生が大半を占め、研究留学生は少数であり、留学の目的の異なる2つのタイプの受講生が一つのクラスで学ぶ。現在は前期・後期とも、発表プロジェクト以外は、ほぼ同一のカリキュラムで運営している。身分の差による成績の差があると言えるほどではない。しかし、明らかに、2つのタイプの受講生の日本語学習の目的は異なっているので、将来は、前期と後期のカリキュラム・シラバスを違うものにすることを考えるべきであろう。特に、2つのタイプが混在する後期のコース内容を検討しなければならない。

#### b. 専門への橋渡し

このコースでは、第1期から専門課程へのスムーズな移行を考えた授業内容を採用しているが、日本語力ゼロレベルから始めてわずか半年の時間しか与えられていないため、ハードな学習内容になっている。14期の蓄積の上に安住することなく、大学でしかできないアカデミックな日本語授業、受講生が楽しめる授業を工夫する必要がある。

#### c. コース生の数の減少

近隣の大学や特定分野の大学に留学生センターが設置され、それに伴って大使館推薦のコース生数が減る傾向が見られる。平成15（2003）年度からは、コース生は石川県内の大学に進学する者のみに限られることになる。コースを維持するために必要な最低数（5名程度）以下になった場合の対応策を考えねばならない。

### 3.1.2 日韓共同理工系学部留学生コース（日韓プログラム）

#### 3.1.2.1 コース概要

日韓共同理工系学部留学生受入れ事業（以下「日韓プログラム」と称す）の発端は、平成10年10月の金大中・大韓民国大統領訪日の際に当時の小渕恵三総理大臣との間で発表された「日韓共同宣言－21世紀に向けた新たなパートナーシップ」に付随する、付属書「21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップのための行動計画」中の「青少年交流の拡大」項<sup>9</sup>に遡る。

上記共同宣言付属書に基づいて、文部省（当時）から全国の国立大学のうち理工系学部と留学生センターを併せ持つ大学及び東京と大阪の外国語大学に日韓プログラム受入れの可否等についての打診があった。金沢大学もその一つで、最終的に受入れ「可」との回答を行った。（平成11年10月12日付け）

回答内容の要旨は概ね以下の6点である。

- ①受入れ学部は工学部5学科（当時）とし、当初は各学科1名ずつの受入れとする。<sup>10</sup>
- ②日韓プログラムの受入れに当たっては、全学協力体制の下、留学生センターと工学部が中心となって計画・立案し、ワーキング・グループ(WG)を設ける。
- ③日本語教育については、留学生センターが責任を持って当たり、同センターの既存の日本語コースを積極的に活用するほか、日韓プログラムのための新設コース（専門教科科目）も開設し、両コースの併合とする。
- ④専門教科教育については工学部と協議し実施する。
- ⑤宿舎は予備教育期間中の半年間、本学の国際交流会館入居を保証する。
- ⑥学部への受入れ時には改めて書類選考を行う。

WGは、日韓プログラムを中心となって立案・計画する留学生センターと工学部によって結成され、平成10年12月から早速活動を開始した。メンバーは、前者からは担当の太田が、後者からは工学部の留学生専門教育教官と同学部教務委員長が選出された。

なお、金沢大学留学生センターにおける日韓プログラムの法規上の位置づけは大学院予備教育と同様に「日本語研修コース」とされ、日韓プログラムの開始に伴って法規が以下のように一部改正された。（改正箇所網かけ）

<sup>9</sup> 両国は、将来のより良い日韓関係のため日韓間の留学生・青少年交流が重要であることを再確認し、韓国の理工系大学学部留学生の派遣・受入れ事業を共同で実施し、今後10年を目途に、その時点で日本の理工系大学に在学する韓国人留学生が1,000人に達することを目指とする。

<sup>10</sup> 平成12年4月より工学部の学科改組があり、「電気情報工学科」が「電気電子システム工学科」と「情報システム工学科」に分科され、現在は6学科体制である。また、上記2学科以外を列挙すると、「土木建設工学科」、「機械工学科」、「物質化学工学科」、「人間・機械工学科」の4学科である。これに伴って第2期からの受け入れ可能数も6名となった。

表3.1.2-1 日本語研修コース規程主要改正点

	改 正 前	改 正 後
第2条 受講資格	研修コースを受講できる者は、国費外国人留学生制度実施要項(昭和29年3月31日文部大臣裁定)に定める研究留学生とする。	研修コースを受講することができる者は、次に掲げる者とする。 (1)国費外国人留学生制度実施要項(昭和29年3月31日文部大臣裁定)に定める研究留学生(以下「研究留学生」という。) (2)日韓共同理工系学部留学生事業実施要項(平成12年8月1日文部省学術国際局長裁定)に定める予備教育期間中の日韓理工系留学生(以下「日韓理工系留学生」という。)
第4条 定員	研修コースの定員は、30人とする。	研修コースは、次の各号に掲げる種類に分けるものとし、それぞれの定員は、当該各号に定める数とする。 (1)研究留学生に対する研修コース 30人 (2)日韓理工系留学生に対する研修コース 学長が定める人数

日韓プログラム第1期(平成12年度)と第2期(平成13年度)は概ね以上のような体制でコース運営を行ったが、第2期の学生選考に当たって文部科学省から受入れ照会のあった5名のうち3名に、配置予定学科と本人の専攻希望の間にミスマッチングが起こり、文部科学省に受入れ「保留」との回答を行った。最終的には保留回答をした3名は本学に配置されず、第2期は受け入れ数2名という残念な結果になった。

このようなミスマッチングを少しでも防ごうと第3期に向けて採られた措置の一つが受け皿の拡大である。平成13年度後期に働きかけを行った結果、第3期(平成14年度)から理学部6学科のうち、「数学科」1名、「物理学科」2名、「化学科」1名、「地球学科」1名の計5名の受入れ可能数拡大を行うことができ、現在に至っている。

### 3.1.2.2 カリキュラム

第1期（平成12年度）

図3.1.2-1 時間割（平成12年10月20日現在）

	月	火	水	木	金
1 時限 または 2 時限	総合日本語	総合日本語	総合日本語	総合日本語	〈日本語B〉 総合日本語
3 時限	数学 (勝見)	専門日本語 [レポート] (太田)	物 理 (深澤)	専門日本語 [発表] (太田)	ホームルーム または 日本事情見学 (太田)
4 時限	専門日本語 [読解] (小林)	数学 (勝見)	専門日本語 [聴解] (深澤)	化学 (佐藤)	
5 時限	〈日本事情〉	太枠内が新規増分、〈 〉は教養的科目			

#### 日本事情見学 8回

1. (2000.10.20) 兼六園, 金沢城址, 中村記念美術館
2. (2000.11.10) 石川県菓子文化会館 (和菓子作り体験は11/11 〈土〉午前10時より石川県観光物産館)
3. (2000.11.17) ひがし茶屋街, 金箔工房 (金銀箔工芸さくだ)
4. (2000.12.01) 長町武家屋敷跡, 尾山神社, 近江町市場
5. (2000.12.08) 金沢周遊 (ふらっとバスまたは金沢周遊バス)
6. (2001.1.12) コマツ栗津工場
7. (2001.2.02) Eizo ナナオ (13:30~15:00)
8. (2001.2.09) 福光屋 (酒造り見学)

#### ホームルーム・その他 7回

1. (2000.10.13) オリエンテーション・外国人登録
2. (2000.10.27) 10月分ホームルーム
3. (2000.11.24) 11月分ホームルーム
4. (2000.12.15) 12月分ホームルーム
5. (2001.1.26) 1月分ホームルーム (内外学生センター訪問)
6. (2001.2.16) スキー教室参加
7. (2001.2.23) 総括・コース評価

第2期(平成13年度)

図3-1-2-2 時間割(平成13年8月30日現在)

	月	火	水	木	金
1 時限 または 2 時限	総合日本語	総合日本語	総合日本語	総合日本語	〈日本語B〉 総合日本語
3 時限	専門日本語 [レポート] (佐藤)	専門日本語 [読解] (古本)	物理 (石黒)	専門日本語 [読解] (古本)	コンピュータ (岡澤)
4 時限	化学 (佐藤)	専門日本語 [聽解] (太田)	数学 (勝見)	実地見学 または ホームルーム (太田)	数学 (勝見)
5 時限	専門日本語 [口頭発表] (臼杵)				

太枠内が新規増分、〈 〉は教養的科目

総合日本語コース用プレースメントテスト：2001年10月9日（火）

コース・オリエンテーション：2001年10月10日（水）

合同開講式、生活オリエンテーション：2001年10月11日（木）

授業開始：2001年10月12日（金）

冬季休業：2001年12月18日（火）～2002年1月10日（木）

授業終了：2002年3月6日（水）

合同閉講式：2002年3月7日（木）

実地見学 4回

1. (2001.10.18) 金沢市内見学1（兼六園周辺）
2. (2001.11.22) 金沢市内見学2（東山周辺、金箔工芸さくだ）
3. (2002.01.17) ディスプレイ製造見学 (Eizo ナナオ)
4. (2002.02.21) 酒造り見学（福光屋）

ホームルーム・その他 5回

1. (2001.10.25) 10月分ホームルーム
2. (2001.11.29) 11月分ホームルーム
3. (2001.12.13) 12月分ホームルーム

4. (2002.01.31) 1月分ホームルーム（内外学生センター訪問）

5. (2002.02.28) 総括・コース評価

図3.1.2-3 補 講

	3/7 (木)	3/8 (金)	3/11 (月)	3/12 (火)	3/13 (水)
1 時限	専門日本語 〔読解〕 (古本)	専門日本語 〔読解〕 (古本)	化 学 (佐藤)	コンピュータ (岡澤)	物 理 (石黒)
2 時限	専門日本語 〔読解〕 (古本)	専門日本語 〔読解〕 (古本)	化 学 (佐藤)	コンピュータ (岡澤)	物 理 (石黒)
3 時限	専門日本語 〔レポート〕 (佐藤)	数 学 (勝見)	専門日本語 〔口頭発表〕 (臼杵)	専門日本語 〔聴解〕 (太田)	数 学 (勝見)
4 時限	専門日本語 〔レポート〕 (佐藤)	数 学 (勝見)	専門日本語 〔口頭発表〕 (臼杵)	専門日本語 〔聴解〕 (太田)	数 学 (勝見)
5 時限					数 学 (勝見)

### 3.1.2.3 教育活動実績

表3.1.2-2 受入れ学生

年度・期	配置照会数	受け入れ数	男女比	配置先学部・学科
第1期 平成12年度	4	3	2/1	工学部・物質化学工学科 1名
				同・情報システム工学科 1名
				同・土木建設工学科 1名
第2期 平成13年度	5	2	2/0	工学部・情報システム工学科 1名
				同・電気電子システム工学科 1名

表3.1.2-3 授業・活動

年度・期	総合日本語	専門日本語	専門教科	その他の授業・活動
第1期 平成12年度	日本語D×3/週 漢字D×1/週 技能別×1/週	読解×2/週 聴解×1/週 レポート×1/週 口頭発表×1/週	数学×2/週 物理×1/週 化学×1/週	教養的科目〔聴講〕 日本事情×1/週 専門基礎教育〔聴講〕 1~2/週 日本事情（訪問見学） 全7回 ホームルーム×1/月 コンピュータ講習 全6回 実地見学旅行 11月上旬（1泊2日）
第2期 平成13年度	日本語C 2/D×3/週 漢字C/D×1/週 技能別×1/週	読解×2/週 聴解×1/週 レポート×1/週 口頭発表×1/週	数学×2/週 物理×1/週 化学×1/週	コンピュータ×1/週 日本事情（訪問見学） 全3回 ホームルーム×1/月 実地見学旅行 11月上旬（1泊2日） ホームステイ 3月下旬（2泊3日）

注) 特記事項として次の点が挙げられる。

- 日韓プログラム用にラップトップコンピュータを6台確保しており、予備教育期間中予備教育生に1台ずつ貸与している。
- 第1期：学生の渡日が1ヶ月弱遅れたことにより、シラバスを全15回から全12回に変更した。
- 第2期：第1期同様学生の渡日が1ヶ月弱遅れたが、遅れた分として平成14年3月に集中補講を行った。

## ＜サポート制度＞

日韓プログラムの大きな特徴の1つとして、今まで経験したことがない「学部予備教育」であり、留学生の年齢が18~19歳と若年層であるという点が挙げられる。この年齢の若者が日本にやって来て、予備教育を含めると実に4年半もの長期間にわたり国費留学生<sup>11</sup>として日本で留学生活を送るのである。この年ごろの若者はどこの国からの出身者でも青春を謳歌したくなる年齢層であり、日韓プログラム生も例外ではないだろうと予想された。

そこで考えられたのが、サポート制度における以下の3点の充実であった。

- ① 謝金チューター（しかも学部生）の確保
- ② カウンセリング（ホームルーム）の定期的実施
- ③ 予備教育終了後のアパート探しについてのアドバイス

①については、学内関係規定の変更及び改定を伴った。そして②については、韓国人の大学院生に対する謝金を確保し、カウンセリングの際に同席してもらい、日韓プログラム生に直接韓国語で口頭または書面の形でのカウンセリングを可能にした。カウンセリングでは以下の7点について質問を行っている。

- i 日本語学習（総合日本語コース・専門日本語）について
- ii 専門教科（数学・物理・化学）について
- iii 日本人チューターとの関係について
- iv 生活面（国際交流会館・買い物等）について
- v 経済面について
- vi 健康面について
- vii その他（自由記述）

③については、来日直後から奨学金から「毎月4万円貯蓄」を勧めている。この額は、金沢大学留学生センターがある角間キャンパスから工学部のある小立野キャンパスまでの間で、学生が多くアパートを賃借している地区の家賃最高額平均を調べた結果算出された額である。またこの額を半年間の予備教育期間中貯蓄しておくと、ちょうど引っ越しと入居時の敷金・礼金分相当程度の金額が手元にあることにもなる。アパート探しでは、(財)内外学生センターに連れていき紹介したが、実際には、第1期生はチューターの助けを借り、第2期生はチューター及び第1期生の助けを受けて探し当てた。

<sup>11</sup> 原則としては、日韓両政府による経費折半であるため、書類上は日本の国費留学生と韓国の政府派遣留学生が混在することになる。しかし、現場では分け隔てなく「国費留学生扱い」として対応している。

#### 3.1.2.4 評価方法・成績

多様な教科の授業を提供する日韓プログラムゆえ、統一的な評価基準を立てにくい。また、実質4ヶ月半で学部入学に必要な学力水準を目指すという目標に重点を置いたことから、担当教官に毎月月報を提出してもらい、主観評価及び現状を把握することに努めた。一方、渡日直後の第1回目の授業ではどの教科でも学力診断テストを行い、小テストまたは中間テストを学期中に織り交ぜて、最終的には到達度測定テストを学期末に行うことで客観評価としている。

しかしながら、第1期においてはプログラム初年度ということもあり、主観的評価の部分が多く、客観的評価の部分が少ない結果になった。第1期の反省を踏まえ、第2期では学期末にできるだけ点数化して測定できる部分を多くするよう担当教官に依頼した。その結果、大学全体の評価基準と同様に100満点の4段階評価（優～80・良80～70・可70～60・不可60～）で概ね診断できるようになった。

最終評価の結果は学生の配置先学部学科にそれぞれを送付し、入学時選考の判断材料として提供している。

#### 3.1.2.5 問題点

主な問題点は次の通りである。

- a. 1ヶ月弱の渡日の遅れにより、奨学金支給開始が遅れたり、授業内容を調整したりしなければならず、コース運営に支障を来している。
- b. 受入れ学生確定時期とカリキュラム編成時期に半年以上の大きな開きがあるため、実際に学生間で学力に開きがあった場合や個々に問題があった場合の対応が難しい。
- c. 到達目標を曖昧な形にしか設定できないため、必要な教科の取捨選択、シラバス、評価方法が手探り状態でまだ流動的である。実際に学部に進学してから何が必要か、今後とも追跡調査が必要である。
- d. 日韓プログラムは当初予定が10年間のプログラムである。現時点から、学生の卒業後の進路問題（特に男子学生の場合、兵役に絡んだ問題）や、プログラム自体の今後の見通しに一抹の不安を抱えている。

### 3.1.3 日本語・日本文化研修コース

#### 3.1.3.1 コース概要

金沢大学日本語・日本文化研修コースは留学生センターの設置と共に1995年10月に設立された。本コースの現在の目的、並びに受講資格は以下のとおりである。

##### a. コースの目的

本コースの目的は受講者の日本語能力の向上、及び日本社会・文化に対する理解の促進である。

本コースの教育内容は日本語と日本文化の二つの柱から成るが、日本語の授業は総合日本語コースの上級クラスに合流して行われる。単なる「読む、書く、聞く、話す」という4技能の上達のみならず、様々な教室活動を通し、日本語の応用力を身に付けることを目指している。一方、日本文化は本コース専用の教育課程として編成されており、様々な角度から日本社会・文化について考察する機会を受講者に与えている。身に付けた日本語の応用力、及び日本に対する知識などを生かした日本研究を行い、それを下にコース終了時に口頭研究発表、並びに研究レポート作成を行うことを義務付けている。

更に、日本人学生との合同調査・研究を行う機会も設けている。日本人の若者の考え方について学ぶ機会を与えるためである。また、日本文化体験実習、及び実地研修を通して、大学所在地である金沢の豊かな伝統文化に触れる機会を数多く設けている。

##### b. 対象学生

受講者として受け入れるのは原則として大使館推薦及び大学推薦の国費留学生(日本語・日本文化研修留学生)である。しかし、本コースの学生として受け入れる充分な理由があり、かつ受け入れ定員に余裕があれば、協定校から推薦される私費留学生も受け入れことがある。

本コースの受講資格として以下に挙げる四つの条件を設けている。

- i) 日常生活に必要な日本語能力を有し、平易な文章の読み書きができる者
- ii) 海外の大学において3、4年次に在学中の者
- iii) 海外の大学において、日本語・日本文化関係学科に在学する者、及び他の専攻分野に在学しつつ、副専攻として日本語・日本文化に関する分野を学習している者
- iv) 日本研究に対して意欲的であり、1年間積極的な姿勢で本コースの学習に専念する意志を有する者

なお、コースの現在の受け入れ定員は20名である。

### c. 現在までの受講者数

第1期から第7期までの受講者数は以下の通りである。

表3.1.3-1 日本語・日本文化研修コース受講者数

受け入れ年度	国費留学生		その他 (私費留学生等)	合計
	大使館推薦	大学推薦		
1995.10~1996.9 第1期	5	4	0	9
1996.10~1997.9 第2期	3	3	0	6
1997.10~1998.9 第3期	5	5	3	13
1998.10~1999.9 第4期	6	3	0	9
1999.10~2000.9 第5期	6	4	1	11
2000.10~2001.9 第6期	10	9	0	19
2001.10~2002.9 第7期	7	5	0	12
合計	42	33	4	79

### d. 受講者の所属、及び身分

受講者の所属は留学生センターとなるが、受け入れ身分は科目等履修生、または特別聴講学生になる。金沢大学の協定校からの留学生である場合、特別聴講学生として受け入れ、それ以外の大学からの大使館推薦の国費留学生である場合、科目等履修生として受け入れる。

第1期及び第2期においては、受講生は文学部、教育学部、法学部、経済学部、理学部に所属していたが、第3期では経済学部に2名、残り全員留学生センターの所属となった。第4期以降は全員留学センター所属となっている。

### e. 里親制度及び日本人学生との交流

日本語・日本文化研修生に日本社会を直接体験する機会を与えることを目的に、第5期（1999年10月）から里親プログラムを実施している。地域住民の協力のもと実施しているこのプログラムでは、1年間にわたって交流を行う地元の家族を、里親家族として各学生に紹介している。里親との交流を通じて地域に溶け込み、日本の家庭生活を直接知ることができ

る(日本語・日本文化研修コース里親制度の詳細については、7.5 ホームステイ/里親制度を参照)。

また、日本語・日本文化研修生と交流を行いながら、勉学または生活の面で手助けをしてくれる日本人学生チューターを紹介している。学内募集を行い、交流活動に関心を持っている日本人学生を募り、「りゅうとも」というチューターサークルを作っている。このサークルの日本人学生との交流活動を通して、日本の若者の考え方に対する機会が設けられている(「りゅうとも」の活動については、7.2 日本人ボランティア学生チューター制度を参照)。

### 3.1.3.2 カリキュラム

コースの受講期間は10月から翌年の9月までの1年間である。現在日本語・日本文化研修コースの教育課程は各学期必修科目9科目からできており、年間の合計必修授業科目数は18科目である。

表3.1.3-2 日本語・日本文化研修コース教育課程

授業科目	1週間当たりコマ数(1コマ=90分)		
	秋学期	春学期	計
日本語	3	3	6
技能別日本語	1	1	2
漢字	1	1	2
日本文化演習Ⅰ	1	1	2
日本文化演習Ⅱ	1	1	2
日本文化体験実習	1	1	2
調査実習	1	1	2
合計	9	9	18

それぞれの概略を以下に記す。

#### a. 日本語(必修科目、週5コマ)

受講者はそれぞれの日本語能力に応じ、金沢大学総合日本語コースに合流し、中・上級の日本語コースを履修する。日本語はメインコースに加えて、漢字、及び技能別日本語の授業が履修できる。技能別日本語として読解、講義の聴解、作文、レポート作成、口頭発表技術練習、コンピューターを使った論文資料作成などが用意されているが、その中で各自のレベルに合ったものが1つ、乃至2つ選択できる(詳しくは、3.1.5 総合日本語コースを参照)。

## b. 日本文化（必修科目、週3コマ）

日本語・日本文化研修生専用の日本文化科目として日本文化演習Ⅰ・Ⅱ及び日本文化体験実習の3科目が開講されている。これらの授業科目は日本社会・文化についての理解を深め、直接日本文化に触れる機会を与えることを目的としたものである。

### i) 日本文化演習Ⅰ

日本文化演習Ⅰでは、社会、生活、政治、経済、言語、ジェンダー、若者の文化等の観点から日本社会・文化について概観する。学内外の専門家が日本社会・文化の諸局面について講義を行う形でこの授業は編成されている。また、セクション毎に討論会や発表等も組み込まれ、学生参加型授業が試みられている。

### ii) 日本文化演習Ⅱ

この科目は後述する日本文化体験実習と連結する形で構成されている。体験実習で行う文化体験や実地研修を理解する上で必要とされる日本の歴史、文化、宗教、教育、社会、技術、産業、伝統工芸、伝統芸能、文学等についての予備知識を与えることを目的とする。学内外の各分野の専門家が講義を担当する。

### iii) 日本文化体験実習

この授業の目的は、金沢の豊かな伝統文化を直接体験する機会を与えること、及び実地研修を通して現代日本社会について学ぶ機会を与えることである。人間国宝を始めとする金沢の著名な芸術家・伝統工芸職人及び金沢市教育委員会の協力の下、古い町並み散策、日本庭園見学、雪吊り体験、蒔絵体験、和紙漉き体験、金箔工芸体験、美術館見学、工場見学、学校訪問、日本料理体験、和菓子作り体験、茶道体験、座禅体験、琴弾き体験、能楽体験、俳句作り等の体験を実施している。なお、文化体験は平均的に3時間ほど要するものであるので、一つの体験を2コマ分の授業としてカウントする。

なお、日本文化体験実習の一環として実施する文化体験や実地研修の他に本コースの行事として茶会、和服体験、陶芸体験、和太鼓体験、能楽鑑賞、キリコ祭り参加、能登巡り等を日本文化研修の一環として実施している。また、他の留学生との合同企画として見学旅行、スキー講習等も行われている。

## c. 調査実習（必修科目週1コマ）

調査実習は、日本人学生を交えた少人数グループで研究調査やプロジェクトを合同で行う実習科目である。各グループで日本社会・文化についてのテーマを選択し、1学期にわたって調査・研究を行い、学期末に発表会を行う。実習や訓練を通して、研究方法論や日本語によるプレゼンテーションスキルの習得を目指す。また、日本人学生との共同作業を通して、より日常的なレベルでの日本社会の理解を深め、同時に自国文化の再確認を試みる。この授

業は金沢大学の日本人学生との国際交流をも主眼においていた学生参加型授業である。なお、この授業の一環として現代社会問題についてのビデオ・ドキュメンタリー制作の試みもなされている。

これらの授業科目のシラバスについては3.1.3.3. 教育活動実績を参照されたい。

#### d. 選択科目

日本語・日本文化研修生の母国大学における専攻は日本語、日本文学、日本史、経済学などと様々である。それぞれの専攻に関連のあるテーマについて、担当教官の許可を得て、日本人学生向けに開講している一般授業科目の履修が可能である。各学期の初めに一般授業科目履修ガイダンスを行い、日本語・日本文化研修生に推薦科目を紹介している。1学期当たり、2科目程度の一般授業科目の履修が薦められている。

表3.1.3-3 日本語・日本文化研修コース 時間割

曜日 時間	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1限		日本語	週5コマ	履修	
2限					
3限		日本文化 演習Ⅱ	日本文化 体験実習		日本文化 演習Ⅰ
4限		調査実習	日本文化 体験実習		

### 3.1.3.3 教育活動実績

上述したように本コースは設立から8年目を迎えており、ここでは、コースの教育活動を年度別に取り上げる。なお、現在までのコース担当者は以下の通りである。

表3.1.3-4 日本語・日本文化研修コース担当者

担当期間	担当者名
第1期（1995.10～1996.9）	八重澤美知子（留学生センター教授）
第2期～第3期（1996.10～1998.9）	岡澤孝雄（留学生センター教授）
第4期（1998.10～1999.9）	峯 正志（留学生センター助教授）
第5期～第8期（1999.10～2003.9）	ルチラ パリハワダナ（留学生センター助教授）

#### a. 第1期（1995年10月～1996年9月）

##### i) 日本語

第1期では日本語補講に合流する形で日本語学習が行われた。日本語・日本文化研修生はそれぞれのレベルに合った日本語クラスを週3コマ、乃至2コマ履修した。また、日本語研修の一環としてそれぞれのレベルに応じた漢字クラスを週1コマ履修した。従って、日本語・日本文化研修生が履修した日本語の科目数は1学期4科目、乃至3科目ということになる。

##### ii) 日本文化・事情

日本語・日本文化研修生専用の必修授業科目として日本文化・日本事情クラスが1学期2コマ開講された。「日本探訪」と題されたこの科目は学内外の専門家が講義を担当する形で行われた。行われた講義は次の通りである。

表 3.1.3-5 「日本探訪」1995年秋学期及び1996年春学期シラバス

担当者	講義題目
浅野純一(外)	西洋人の見た日本、中国人の見た日本
王 勇江(留)	日本文化と日本経済、東アジアの経済
太田秀樹(工)	自然と灾害 I、II
岡澤孝雄(留)	日本の人口構造と医療制度
加藤和夫(教)	日本語の共通語と方言 I、II
鹿野勝彦(文)	統計に見る日本の近代化
楠根重和(法)	日本のイメージ
後藤祐自(能面作家)	能面の世界 I、II
小西健二(金沢大学名誉教授)	沖縄の戦後史と珊瑚礁
近藤仁美(非常勤日本語講師)	漫画による日本社会の一端
柴田あかね(経)	日本の公害について
島 岩(文)	様々な日本人論 —日本人と宗教—
島 弘子(非常勤日本語講師)	日本の家族感
清水 忠(清水製鋼社長)	西田哲学と無の世界
志村 恵(文)	日本の市民運動
下郷 稔(兼六園管理事務所所長)	兼六園の歴史
高野誠鮮(羽咋市職員)	UFO
高光里栄子(金沢情報ビジネス専門学校)	父、高光一也
田崎和江(理)	電子顕微鏡の目から見た地球環境
田中一郎(理)	日本の技術、西洋の技術
中野節子(文)	金沢を見る、歩く I、II
新関敦生(サンコーコンサルタント(株)取締役)	金沢城
西田昭治(西田医院院長)	石川県における渡来人
西村 聰(文)	能 I、II
広岡治樹(樹心院伝統文化研究所)	華道の歴史 I、II
廣瀬幸雄(留)	コーヒー学入門
深川明子(教)	日本昔話の中の娘たち、日本昔話の中の女房たち
前田達男(法)	日本の労働問題
三浦香苗(留)	鳥と鳴き声
村田 武(経)	国際化と日本農業
守屋以智雄(文)	日本の自然災害 I、II
八重澤美知子(留)	異文化で暮らす
山本勝美(金沢経済同友会会长)	大野弁吉
横山壽一(経)	福祉の経済
李 永連(留)	日本人の好きな言葉から日本人の国民的な性格を探る

b. 第2期（1996年10月～1997年9月）

i) 日本語

第2期の研修生も日本語補講のCレベル以上のクラスに合流し、日本語を週3乃至2コマ、漢字クラスを週1コマ履修した。

ii) 日本国文化・事情

2期生に対する日本文化・事情科目として「日本探訪」が開講され、週2コマ履修する形を取っていた。「日本探訪」のシラバスは以下の通りである。

表3.1.3-6 「日本探訪」1996年度秋学期シラバス

担当者	講義題目
中野節子(文)	金沢を見る、歩くⅠ、Ⅱ
王 勇江(留)	日本文化と日本式経営Ⅰ
岡澤孝雄(留)	オリエンテーション
太田秀樹(工)	自然と災害Ⅰ、Ⅱ
王 勇江(留)	日本文化と日本式経営Ⅱ
塩沢敏明(富士コーヒー社長)	コーヒー学入門
加藤和夫(教)	日本語の共通語と方言Ⅰ、Ⅱ
西村 聰(文)	能Ⅰ、Ⅱ
岡澤孝雄(留)	日本の人口構造と病気
小西健二(金沢大学名誉教授)	海外留学が決めた職業と友達
志村 恵(文)	日本の市民運動
太田秀樹(工)	自然と災害Ⅲ
後藤祐自(能面作家)	能面Ⅰ、Ⅱ
宮崎直二(金沢中央公民館学習指導員)	星座について
岡澤孝雄(留)[引率]	酒蔵福光屋見学
柴田あかね(経)	日本公害について
三本木一夫(上島コーヒー(株)本部勤務)	コーヒーの栽培
深川明子(教)	日本昔話の中の女房たち
岡澤孝雄(留)	レポートの中間発表
鈴木哲志男(勝田信用組合理事長)	コーヒーと茶
村田 武(経)	グローバリゼーションと日本経済
高光里栄子(金沢情報ビジネス専門学校)	画家「高光一也の世界」
岡澤孝雄(留)[引率]	石川県歴史博物館見学Ⅰ、Ⅱ

表3.1.3-7 「日本探訪」1997年春学期シラバス

担当者	講義題目
李 永連(留)	日本人の好きな言葉から日本人の国民的な性格を探る
峯 正志(留)	世界の諸言語と日本語
村上 貢(石川県土木部次長)	兼六園周辺の文化ゾーン整備
広岡治樹(樹心院伝統文化研究所)	華道 I、II
横山壽一(経)	福祉の経済学
岡澤孝雄(留)[引率]	小松市お旅祭り見学
西山芳喜(法)	日本法の性質
島 岩(文)	様々な日本人論——日本人と宗教——
山本勝美(金沢経済同友会会长)	地域経済の今日的課題
松尾一良(篆刻家)	日本の日常生活と印章
石原多賀子(金沢市教育長)	日本の教育の現状とこれから課題—金沢の子供・家庭・教育—
楠根和重(法)	比較ジャーナリズム I
坂井明美(医)	日本のお産と産育習俗
楠根重和(法)	比較ジャーナリズム II
加藤洋一(大谷短期大学助手)	日本仏教における死後の概念
三浦香苗(留)	角間の野鳥
佐川哲也(教)	日本のスポーツ事情
廣瀬幸雄(留)	コーヒーと文化を語る
塚脇真二(工)	日本海の歴史(見学)
李 永連(留)	日本の政治と政党
木越 治(文)	日本文学の流れ
八重澤美知子(留)	異文化で暮らす
岡澤孝雄(留)	レポート発表会 I、II
村田 武(経)	グローバリゼーションと日本経済
高光里栄子(金沢情報ビジネス専門学校)	画家「高光一也の世界」 II
岡澤孝雄(留)[引率]	石川県立歴史博物館見学 I、II

c. 第3期（1997年10月～1998年10月）

3期生に対する教育課程も基本的に第2期のそれと同様である。

i) 日本語

4期生はそれぞれの日本語能力に応じて日本語補講のC, D, Eレベルに合流し、日本語を週3コマ、漢字を週1コマ履修した。

ii) 日本文化・事情

日本文化・事情科目として「日本探訪」と題した科目が週2コマ開講された。

表3.1.3-8 「日本探訪」1997年度秋学期シラバス

担当者	講義題目
八重澤美知子(留)	日本の大学生と大学生活・オリエンテーションに代えて
中野節子(文)	金沢を見る、歩く(講義)
李 永連(留)	日本の年中行事
中野節子(文)	金沢を見る、歩く(見学)
志村 恵(文)	日本の市民運動とマイノリティⅠ、Ⅱ
柴本その子(真野響子 女優)	着物
畔柳 潤(松屋コーヒー社長)	日本のコーヒーの事情
小西健二(金沢大学名誉教授)	今年は国際珊瑚礁年(IYOR)
塩澤敏明(富士コーヒー社長)	コーヒーを訪ねて
太田秀樹(工)	大地と人間
鈴木誉志男(勝田信用組合理事長)	茶碗とお皿
志村 恵(文)	日本の市民運動とマイノリティⅢ
三ツ木 清(柴田書店書籍部長)	作る人と飲む人と食べる人との対話を願って
大樋年雄(陶芸家)	加賀の工芸と大樋焼き
大樋年雄(陶芸家)	現代の工芸、茶道そしてデザイン
西村 茂(法)	日本の政治
岡澤孝雄(留)	日本の人口構造
後藤祐自(能面作家)	能と能面Ⅰ、Ⅱ
岡澤孝雄(留)	レポート
岡澤孝雄(留)【引率】	酒蔵見学(福光屋)
西村 聰(文)	能Ⅰ、Ⅱ
加藤和夫(教)	日本語の共通語と方言Ⅰ、Ⅱ
本康宏史(石川県立博物館学芸主任)	石川県立歴史博物館見学Ⅰ
長谷川孝徳(石川県立博物館学芸主任)	石川県立歴史博物館見学Ⅱ
八重澤美知子(留)	女性のアイデンティティの発達Ⅰ
峯 正志(留)	世界の諸言語と日本語

表 3.1.3-9 「日本探訪」1998年春学期シラバス

担当者	講義題目
岡澤孝雄(留)	平成10年度の予定
八重澤美知子(留)	女性のアイデンティティの発達II
加藤和夫(教)	日本語の共通語と方言III、IV
大藪加奈(外)	お稽古と日本文化
太田 亨(留)	日系人と日本語・日本文化——ブラジルを中心に——
坂井明美(医)	母性領域の現状と通過儀礼I、II
広岡治樹(樹心院伝統文化研究所)	花を活けるI、II
畠 安次(法)	日本の憲法の半世紀I、II
加藤洋一(大谷短期大学非常勤講師)	日本仏教の特色I、II
山本勝美(金沢経済同友会会长)	からくり記念館見学I、II
三井 徹(教)	日本の音楽
三浦香苗(留)	角間の野鳥
木越 治(文)	日本の古典文学について
ルチラ パリハワダナ(留)	親族名称に反映される日本文化
森岡吉男(日拓産業社長)	演劇における情緒
柴本そのこ(真野響子 女優)	文化と演劇
岡澤孝雄(留)	日本の風土病
大橋信喜美(留)	私の学生時代
岡澤孝雄(留)	レポート発表会I、II
塚脇真二(工)	日本海の歴史(犀川中流の地層)I、II
岡澤孝雄(留)[引率]	石川県立歴史博物館見学I、II

#### d. 第4期 (1998年10月～1999年9月)

4期生に対する教育課程も第3期のそれと同様なものであった。

##### i ) 日本語

1998年度秋学期から短期留学プログラムの設立をきっかけに、日本語補講が総合日本語コースとして新たにスタートを切り、学生のニーズや能力に応じて選択できる技能別科目が新たに開講された。

##### ii ) 日本文化・事情

第4期においても本コース専用の日本文化・事情科目として各学期において「現代日本の社会と文化」及び「現代日本の政治経済と暮らし」の2科目が開講された。その講義題目、及び担当者一覧は以下の表の通りである。

表3.1.3-10 「現代日本の政治経済と暮らし」1998年度秋学期シラバス

担当者名	講義題目
八重澤美知子(留)	異文化で暮らす
峯 正志(留)	平成10年度の授業
峯 正志(留)[引率]	職人大学I、II
太田 亨(留)	日本語学入門
ルチラ パリハワダナ(留)	待遇表現と日本文化
岡澤孝雄(留)	日本の人口構造
新保裕子(泉の台幼稚園園長)	日本の幼児教育
志村 恵(文)	日本の市民運動とマイノリティI、II
小西健二(金沢大学名誉教授)	国際海洋年(IYO)だ。みんなの海を考えようI、II
塩沢敏明(富士コーヒー社長)	コーヒーを訪ねて
畔柳潤(松屋コーヒー社長)	コーヒーと文化
後藤祐自(能面作家)	能と能面I、II
水谷隆司(住田物産常務)	コロンビアの経済
鈴木誉志男(勝田信用組合理事長)	日本の経済
西村 茂(法)	日本の政治
林 敦(北陸ミサワホーム社長)	留学生と日本企業
八重澤美知子(留)	女性のアイデンティティの発達
峯 正志(留)	レポートについて
加藤和夫(教)	日本の共通語と方言I、II
西村 聰(文)	能I、II
峯 正志(留)[引率]	酒藏見学I、II
本康宏史(石川県歴史博物館学芸主任)	石川県立歴史博物館
濱岡伸也(石川歴史博物館勤務)	石川県立歴史博物館

表3.1.3-11 「現代日本の社会と文化」1999年度春学期シラバス

担当者名	講義題目
中野節子(文)	金沢を見る、歩くⅠ、Ⅱ
峯 正志(留)	平成11年度の予定
峯 正志(留)	ワープロ実習
畠 安次(法)	日本国憲法の半世紀Ⅰ、Ⅱ
峯 正志(留)[引率]	座禅Ⅰ、Ⅱ
加藤洋一(大谷短期大学非常勤講師)	日本の仏教Ⅰ、Ⅱ
峯 正志(留)	世界の諸言語と日本語
木越 治(文)	日本古典文学について
峯 正志(留)	レポート途中経過報告会
峯 正志(留)	レポート途中経過報告会
坂井明美(医)	母性領域の現状と通過儀礼Ⅰ、Ⅱ
岡澤孝雄(留)	日本の風土病
三浦香苗(留)	角間の野鳥
横山壽一(経)	日本の福祉
峯 正志(留)[引率]	塗りもの実習Ⅰ～Ⅷ
峯 正志(留)	レポート発表Ⅰ、Ⅱ
山本勝美(金沢経済同友会会长)	からくり記念館Ⅰ、Ⅱ(見学)

#### e. 第5期 (1999年10月～2000年9月)

##### i) 日本語

5期生は総合日本語コースに合流し、各学期週5コマ(メインコース3コマ、漢字1コマ、技能別1コマ)の日本語を必修科目として履修した。すなわち、年間合計10科目の履修が必要であった。5期生の日本語のレベルは、秋学期はCからFレベルまで、春学期はDからFレベルまでで、ばらついていた。なお、1学期目からFレベルに配置された学生に対する対応策として、2学期目に同じFレベルで違った内容での学習を行うように工夫された。

##### ii) 日本事情・文化

各学期週2コマずつ日本文化科目が開講された。その構成は以下の表の示す通りである。第5期の年間のテーマは「日本人の考え方」であり、政治、経済、生活、「和」と「洋」の共存、産業、伝統芸能、言語、文学、教育、宗教などを具体的な考察の切り口としたものである。なお、なるべく学生参加型授業にするため、サブセクション毎に討論会を組んだ。

表3.1.3-12 「日本の政治経済と暮らし」1999年秋学期シラバス

サブテーマ	講義担当者	講義題目
間近に見る日本 の暮らし—金沢 という町—	広岡治樹 (樹心院伝統文化研究所)	金沢の歴史と文化 金沢巡りⅠ、Ⅱ
政治から見た 日本人の考え方	楠根重和(法)	マスメディアに作られた国民性
	宋安鍾(法)	日本の視点から見た国際関係
	加藤喜代志(法)	日本政治の課題
	加藤喜代志(法)、宋安鍾(法)	日本政治の課題—討論会1—
経済活動から 見た日本人の 考え方	鄭承衍(経)	日本を取り巻く環境の変化 —環境変化への対応から見た日本人の考え方—I、II
	鈴木誓志男(勝田信用組合理事長)	日本の風土から見た経済活動
	林敦(北陸ミサワホーム社長)	環境と経済活動
産業と日本社会	柴本そのこ(真野響子 女優)	日本のテレビ業界における演技法
	森岡吉男(日拓産業社長)	地域社会と産業
	小西健二(金沢大学名誉教授)	環境保護策—その現状と課題—
	水谷隆司(住田物産常務)	食品輸入産業の今後
	山本勝美(金沢経済同友会会长)	21世紀における伝統産業
	大向稔(大向高洲堂社長)	輪島塗と日本の美学
	浜田重隆(ライフハウジング社長)	金山の歴史
	小西健二(金沢大学名誉教授)	産業界における「古」と「新」の共存—討論会2—
共存する 「和」と「洋」	大樋年雄(陶芸家)	茶道に現れる日本人の心 茶道体験
	塩沢敏明(富士コーヒー社長)	コーヒー文化論
	畔柳潤(松屋コーヒー社長)	西洋を好む日本人
	鹿野勝彦(文)	日本人の生活感
生活から見た 日本人の考え方	木越治(文)	日本人の精神—義理と人情—
	清水邦彦(文)	日本の行事とその精神—お祭り—
	岡沢孝雄(留)	長寿国日本の現状と課題
	岡田茂(金城短期大学教授)	日本人の生と死
	八重澤美智子(留)	生活から見た日本人の考え方—討論会3—

表3.1.3-13 「日本の社会と文化」2000年春学期シラバス

サブテーマ	講義担当者	講義題目
中間発表会	ルチラ パリハワダナ(留)	外国人から見た日本人の考え方Ⅰ、Ⅱ
伝統芸能と日本 人の心Ⅰ	広岡治樹 (樹心院伝統文化研究所)	華道の心 華道体験
言語から見た 日本人の考え方	加藤和夫(教)	方言に反映される日本人の考え方
	長野ゆり(留)	日本語における人称表現
	太田亨(留)	視点論から見た日本人の考え方
	峯正志(留)	曖昧性から見た日本人の考え方—「うち」から「そと」へ—
	ルチラ パリハワダナ(留)	待遇表現から見た日本の考え方 言語から見た日本人の考え方—討論会1—
	俳句を見る 日本人の心	俳句の心 私が詠んだ俳句—実作の試みと角間散策—
文学から見た 日本人の考え方	山本一(教)	日本古典文学
	森英一(教)	日本近代文学
	前田久徳(教)	日本現代文学から見た日本人の考え方—討論会2—
教育と日本社会	石原多賀子 (金沢市教育委員会教育長)	日本の教育制度—その現状と課題— 教育問題の解決方法—新しい教育を目指して— 中学・高等学校訪問Ⅰ、Ⅱ
伝統芸能と 日本人の心Ⅱ	西村聰(文)	能と日本人の心
	後藤祐自(能面作家)	能面と日本人の表情—表情のスケッチワークショップ—
宗教と日本人の 考え方	加治洋一 (大谷短期大学非常勤講師)	日本人の宗教意識Ⅰ—仏教— 日本人の宗教意識Ⅱ—神道—
	島岩(文)	日本人の信仰心—宗教と日本人の考え方—討論会3—
	ルチラ パリハワダナ(留)[引率]	大乗寺座禅体験Ⅰ、Ⅱ
発表会	ルチラ パリハワダナ(留)	外国人から見た日本人の考え方Ⅰ、Ⅱ

### iii) 里親制度及び日本人学生チューターサークル「りゅうとも」の発足

第5期から新たに里親制度を立ち上げ、日本の家族として1年間交流を行う里親家族を各学生に紹介した。なお、日本人学生を募り、「りゅうとも」という交流サークルを発足させた。

### iv) 公開研究発表会の開催及び研究指導体制の改善

第5期から受講者が1年間に渡って行う研究の成果を発表する場を提供し、受講者のモーティベーションを高めることを目的に公開研究発表会を行うことにした。発表会に向けての準備が計画的に進められるように年間の研究スケジュールを組み、研究指導体制の改善を図った。

その一環として春休み中の4月の初めに2泊3日の合宿を行い、中間発表会、研究・レポート指導を行うことにした。なお、この合宿に前述した日本人学生の交流サークルのメンバーにも数人参加してもらい、交流活動及び日本文化体験も行っている。

#### v) 文化体験

表3.1.3-14 第5期生を対象にした日本文化体験及び実地見学

日本事情科目の一環としての体験		授業外研修としての体験	
1999年度秋学期	2000年度春学期	1999年度秋学期	2000年度春学期
金沢巡り	華道体験 俳句作りと角間散策 中学・高等学校訪問 座禅体験	畳、板金、表具、瓦などの制作体験 味噌工場見学 和服体験	合宿 陶芸体験（大社焼き） 七宝焼き体験 和菓子作り 能楽鑑賞 富来町西海祭り参加 日本料理教室
茶道体験と大樋美術館見学			

#### f. 第6期（2000年10月～2001年9月）

第6期からは調査実習という科目を日本語・日本文化研修コースの必修科目として新たに開講した。

##### i) 日本語

第6期生は総合日本語コースに合流し、各学期5コマの日本語（漢字、技能別を含む）を履修した。受講した日本語のレベルは、秋学期はBレベルからFレベルまで、春学期はCレベルからFレベルまでであった。

##### ii) 日本文化

第6期から日本文化・事情科目を日本文化演習Ⅰ、及び日本文化演習Ⅱとして科目名を改め、開講した。日本文化研修は上記の2科目（週2コマ）から構成され、「変わり行く日本社会と文化」を年間のテーマにしたものであった。いくつかサブセクションを設け、サブセクション毎に討論会を組んだ。

表3.1.3-15 日本国文化演習Ⅰ 2000年度秋学期、及び2001年度春学期シラバス

サブテーマ	担当教官	講義題目
自然環境に対する意識の変化	川北良造（人間国宝 造形作家）	木の温もり—21世紀に残すもの—
	清水建美（金沢大学名誉教授）	北陸地方の樹木 社会変化による森林生態系への影響
	岡沢孝雄（留）[引率] ルチラ・パリハワダナ（留）[引率]	実地見学—天然記念物指定樹木見学— 実地見学—川北工房見学、木と漆器産業—
	鹿野勝彦（文）	日本農村における環境利用と環境意識の変化
	中村浩二（理）	自然環境に対する意識の変化—討論会1—
生活における変化	鏡味治也（文）	ライフスタイルにおける変化
	橋本和幸（文）	人間関係の変化
	柴田正良（文）	価値観の変化
	横山壽一（経）	社会の高齢化とその対応策
	岡田 茂（金城短期大学教授）	日本人の生と死に対する意識の変化—医学の観点から—
	橋本和幸（文）	生活における変化—討論会2—
	岡沢孝雄（留）	日本人の栄養摂取
	福田久子（元金沢女子短期大学教授）	日本人の味覚の変化—日本料理体験—I、II
言葉を通して見る変化	加藤和夫（教）	日本語の変化
	藤島秀隆（金沢工業大学教授）	滅び行く民話を追って
	木越 治（文）	文学作品を通して見る社会変化I
	上田正行（文）	文学作品を通して見る社会変化II
	ルチラ・パリハワダナ（留）	言葉と変化—討論会3—
	渡辺香根夫（金沢大学名誉教授）	俳句を通して見る変化 実作の試み
教育における変化	石原多賀子（金沢市教育長）	義務教育の現状 社会変化に応じた新たな試み 中学・高等学校訪問I、II
	疋田勝一（金沢市立工業高等学校教頭）	変化する教師と生徒との人間関係
	江森一郎（教）	教育における変化—討論会4—
伝統文化における変化I	大樋年雄（陶芸家）	陶芸の世界—変化と不変性— 不变の日本の美意識—茶道体験を通して—

表3.1.3-16 日本文化演習Ⅱ 2000年度秋学期、及び2001年度春学期シラバス

サブテーマ	担当教官	講義題目
中間発表会	ルチラ パリハワダナ（留）	日本社会と文化における変化
伝統芸能における変化Ⅱ	広岡治樹（樹心院伝統文化研究所）	華道の世界—変化と不変化—、華道体験Ⅰ、Ⅱ
	西村 聰（文）	能楽における変化
	後藤祐自（能面作家）	不变の日本文化—能面制作に携わって—
社会変化と伝統産業界	毎田健治（加賀友禅作家）	加賀友禅の世界—変化と不変化—、毎田加賀友禅工房見学
	大向 稔（大向高洲堂社長）	輪島塗—変化と不変化—
	坂本宗一郎（紙衣作家）	和紙の世界—変化と不変化—
	津田千枝（津田水引折型専務）	水引産業—変化と不変化—、水引制作体験
	山本勝美（金沢経済同友会会长）	味噌工場見学、大野からくり記念館見学
経済界の変動	橋本哲哉（経）	戦後日本経済の変動
	海野八尋（経）	バブル時代とその崩壊後の日本経済の姿
	小林 昭（経）	日本の財政と財政再建
	伍賀一道（経）	変貌する日本の企業—雇用と失業—
	鄭承衍（経）	国際化・情報化と日本経済
		経済界の変動—討論会1—
日本政治における変化	加藤喜代志（法）	戦後日本政治の変遷
	宋 安鍾（法）	国旗・国歌とは何か？—変化する国民の意識—
	河村和徳（法）	戦後日本の民主主義政治を巡って一世論形成と政治活動—
	鹿島正裕（法）	国際社会における日本の役割
	畠 安次（法）	今後の政治に期待するもの
	宋 安鍾（法）	日本政治の今後の課題—討論会2—
変わり行く日本社会と文化—総論—	加藤喜代志（法）	捨てていこうとしているもの
	畠 安次（法）	次世代に残すもの
発表会	ルチラ パリハワダナ（留）	変わり行く日本社会と文化—私の提言—

### iii) 調査実習

第6期から、日本語・日本文化研修生と日本人学生が混在型小グループを作り、合同で調査研究を行う調査実習を新たに開講した。この授業科目は、1. 調査・研究の方法論を身に付ける場を提供すること、及び2. 多言語・多文化の環境を生かし、日本人学生と日研生との知的交流を図ること、3. 自国文化を再認識する機会をそれぞれに与えることという3つを目的にしている。日本語・日本文化研修生にとっては必修科目であるが、日本人学生には単位を出していない。単位が出なくとも参加したいという、国際交流に深い関心を持っている日本人学生を対象にしている。

表3.1.3-17 調査実 2000年度秋学期シラバス

回	授業内容
1回	説明会、自己紹介、グループ形成、各グループのテーマ選択
2回	グループ別作業：考察の観点の選択、研究方法の話し合い、フリーディスカッション
3回	データー収集の方法、グループ別作業、フリーディスカッション
4回	グループAの発表1、質疑応答、討論会
5回	グループBの発表1、質疑応答、討論会
6回	グループCの発表1、質疑応答、討論会
7回	グループDの発表1、質疑応答、討論会
8回	グループ別作業：調査方法の決定、フリーディスカッション
9回	グループ別作業：データー分析の方法、フリーディスカッション
10回	日研生単独発表、グループAの発表2、質疑応答、討論会
11回	日研生単独発表、グループBの発表2、質疑応答、討論会
12回	日研生単独発表、グループCの発表2、質疑応答、討論会
13回	日研生単独発表、グループDの発表2、質疑応答、討論会
14回	日本語でのプレゼンテーションの技術1
15回	日本語でのプレゼンテーションの技術2

表 3.1.3-18 調査実習 2001年度春学期シラバス

回	授業内容
1回	説明会、自己紹介、テーマ選択、グループ形成、アンケート2、フリーディスカッション
2回	研究の手順グループ別作業：アウトライン作り、計画の発表 アウトラインの提出「日本人を辞める」(留学生によるインタビュー)
3回	グループ別作業：先行研究の分析、まとめ、クラス全体に対する報告、アンケート5
4回	グループ別作業：データーの分析、解釈、クラス全体に対する報告、伝言ゲーム
5回	中間発表会1：各グループ15分ずつ グループ1、グループ2、グループ3、グループ4
6回	グループ別作業：アンケート作り、クラス全体への報告、アンケート提出 「外国人を辞める」(日本人学生によるインタビュー)
7回	グループ別作業：アンケート調査の分析、クラス全体への報告、アンケート6
8回	グループ別作業：アンケート結果の解釈、及びまとめ、全体への報告、ジェスチャーゲーム
9回	中間発表会2：各グループ15分ずつ グループ4、グループ3、グループ2、グループ1
10回	グループ別作業：論拠方法、残された課題、全体への報告 「私の考える『国際人』』 インタビュー
11回	グループ別作業：全体的構成の見直し、まとめる作業、全体への報告 「私の異文化体験ベスト3」(留学生)
12回	グループ別作業：発表のまとめ、レジュメの作成、スライド作り 「私の異文化体験ベスト3」(日本人学生)
13回	最終発表会
14回	グループ別作業：原稿にまとめ上げる作業、アンケート10
15回	グループ別の感想・問題点、及び反省点の提示、原稿の提出

iv) 日本文化体験などの行事、及びその他の活動

表 3.1.3-19 第6期生を対象に実施した日本文化体験、及び実地見学等

日本文化演習科目の一環としての体験		授業外研修としての体験	
2000年度秋学期	2001年度春学期	2000年度秋学期	2001年度春学期
柏の大杉の見学	華道体験	金沢巡り	合宿
山中漆器産業技術センター及び川北工房見学	毎田加賀友禅工房見学	書道体験	陶芸体験
日本料理体験	水引作り体験	座禅体験	七宝焼き体験
俳句作りと句会	味噌工場見学	和服体験	和菓子作り
中学・高等学校訪問	大野からくり記念館見学	蕎麦打ち体験	紙漉き体験と 和紙工房見学
茶道体験と 大樋美術館見学			能楽鑑賞 金箔作り 富来町西海祭り参加

なお、第5期同様4月に2泊3日の合宿を行い、中間発表会、日本文化体験、及び日本人学生との交流活動を行った。

#### g. 第7期（2001年10月～2002年9月）

第7期から、これまで日本文化演習科目の一環及び課外文化体験として実施していた日本文化体験や実地見学を正規の研修課程に組み込み、日本文化体験実習科目として位置付けた。その結果、日本語・日本文化研修生が1学期に履修する必修科目数は9科目となった。

##### i) 日本語

第7期生は総合日本語コースに合流し、各学期5コマずつ日本語科目を履修した。秋学期はC1レベルからFレベルまで、春学期はC2レベルからFレベルまでのレベルに配置された。

##### ii) 日本文化

日本文化演習Ⅰは「日本人の価値観」を年間テーマにして編成された。日本文化演習Ⅱは日本文化体験実習と連結する形で編成され、体験実習のために必要な予備知識を与える役目も果たしている。日本文化科目の詳細な内容を以下に記す。

表3.1.3-20 日本文化演習Ⅰ 2001年度秋学期シラバス

サブテーマ	担当者	講義題目
価値観の変化	ルチラ パリハワダナ(留)	オリエンテーション
	鏡味治也(文)	生活に反映される価値観の変化
	橋本和幸(文)	家族のあり方に反映される日本人の価値観
	樋口博美(法)	社会変化に基づく仕事の捉え方の変化
	ルチラ パリハワダナ(留)	日本語から見たジェンダー
	横山壽一(経)	高齢化による価値観の変化—老後の生活—
日本人の意識	樋口博美(法)	討論会「価値観の変化—日本と自国の比較—」
	中村浩二(理)	日本人の自然観
	木越治(文)	文学作品を通して見る日本人の意識
	大澤善信(教)	集団主義と個人主義
	河村和徳(法)	国民主義と現代政治のあり方
経済による価値観への影響	加藤喜代志(法)	公害病と人権意識
	堀林巧(経)	経済の国際化に伴う価値観の変容

表3.1.3-21 日本国文化演習Ⅰ 2002年度春学期シラバス

サブテーマ	担当者	講義題目
経済による価値観への影響	田口直樹（経）	失われた10年間と日本人の価値観
	伍賀一道（経）	「日本神話」の崩壊に伴う価値観の変化
	吉居史子（経）	討論会1「『豊かさ』と価値観」
言語と価値観	加藤和夫（教）	方言に対する価値観
	長野ゆり（留）	自称と自己
	太田亨（留）	視点と日本語の話し手中心性
	ルチラ・パリハワダナ（留）	内・外関係と日本語
	峯正志（留）	日本語の文字の特徴と思考への影響
	ルチラ・パリハワダナ（留）	討論会2「言語と文化」
若者の価値観	溝部明男（文）	若者の人生観
	ルチラ・パリハワダナ（留）	若者の拘り（日本人学生との討論会）
	加藤和夫（教）	若者の言葉
	木越治（文）	若者の文学
	西嶋愉悦（外）	IT時代におけるコミュニケーションの形態及びその内容の変化
	ルチラ・パリハワダナ（留）	討論会3「世界の若者と日本の若者」

表3.1.3-22 日本国文化演習Ⅱ 2001年度秋学期シラバス

サブテーマ	担当者	講義題目
	ルチラ・パリハワダナ（留）	オリエンテーション
金沢を出発地点に	梶川勇作（文）	金沢の歴史
	中野節子（文）	金沢に見る江戸時代の面影
日本文化における「型」	島 岩（文）	日本人の宗教意識—仏教と神道—
	大久保英哲（教）	日本文化における型
	島 岩（文）	日本人の宗教意識—日本文化の相反する性質—
	内田洋（文）	俳句と「型」
日本文化における「道」	ピットマン・ハイコ（留）	武道の「道」
	大島廣靖（茶道家 石川県茶道協会代表幹事）	「茶道」と「一期一会」の心
	恵土孝吉（教）	「道」の精神
	大久保英哲（教）	武士道
社会と教育	石原多賀子（金沢市教育長）	義務教育の狙い
		教育の課題
	柴田正良（文）	青少年問題とその社会的背景
発表会	ルチラ・パリハワダナ（留）	日本社会と文化

表3.1.3-23 日本文化演習Ⅱ 2002年度春学期シラバス

サブテーマ	担当者	講義題目
日本の食文化	岡澤孝夫（留）	日本人の栄養摂取Ⅰ、Ⅱ
	加藤重和（青木クッキングスクール教頭）	日本人の食生活
	清水邦彦（文）	お酒と日本文化
伝統芸能	西村 聰（文）	能楽—歴史的背景と現在の姿—
	後藤祐自（能面作家）	能面と日本人の表情
	三井 徹（教）	日本の音楽Ⅰ、Ⅱ
文化の保存	道下甚一（尾口村東二口文弥人形浄瑠璃保存会会長）	地域文化の保存—尾口村でくの舞を例に—
	脇本伸一（自衛隊勤務）	地域文化の保存—祭りと和太鼓—
	深美和夫（児童文学作家）	故郷民話とその伝承
伝統工芸	坂本宗一郎（紙衣作家）	和紙の魅力
	大向 稔（大向高洲堂社長）	輪島塗
	山口信行（大工職人）	宮大工
	ルチラ パリハワダナ（留）	日本社会と文化—私の提言—（癡癡会）

表3.1.3-24 日本文化体験実習 2001年度秋学期シラバス

サブテーマ	担当者	講義題目
	ルチラ パリハワダナ（留）	オリエンテーション
金沢を出発地点に	梶川勇作（文）	金沢城見学
	小寺清吉（内川公民館館長）	藁草履作り
	松田弘（和傘職人）	金沢和傘作り
「型」から入る日本文化	モス透巣（大乗寺僧侶）	座禅体験
	泉 紫像（俳人）	俳句作りと句会
日本文化における「道」	大樋年雄（陶芸作家）	茶道と大樋焼きの世界
	広岡治樹（樹心院伝統文化研究所所長）	華道
社会と教育	石原多賀子（金沢市教育長）	中学・高等学校訪問
	ルチラ パリハワダナ（留）[引率]	小松製作所見学

表3.1.3-25 日本文化体験実習 2002年度春学期シラバス

サブテーマ	担当者	講義題目
日本人の 食文化	山本勝美（金沢経済同友会会長）	味噌工場、及び大野からくり記念館
	福田久子（元金沢女子短期大学教授）	お豆腐作り体験
	水本寛（水本菓子店社長）	和菓子作り体験
伝統芸能	北島公之（県立桜ヶ丘高校教諭）	能楽体験
	北村雅樂弓（琴師範）	琴弾き体験
伝統工芸	川北良造（人間国宝轆轤作家）	轆轤への思い－川北工房見学－
	坂本宗一郎（紙衣作家）	紙漉き体験
	ルチラ パリハワダナ(留)[引率]	北安江金箔工芸館見学
		金箔工芸体験（金箔の作田にて）
発表会	ルチラ パリハワダナ（留）	発表会

### iii) 調査実習

7期生を対象にした調査実習では秋学期において2つのグループに分かれて、日本人学生と合同で、日本社会問題についてのビデオ・ドキュメンタリーを作成するプロジェクトを実施した。各グループのテーマは「フリーター」、及び「携帯電話」であった。なお、このプロジェクトを実現するに当たって、必要機材類の購入のため学長裁量経費から支援があった。

春学期は通常通り、日本人学生との合同調査研究を行った。各学期のシラバスを以下に記す。

表3.1.3-26 調査実習 2001年度秋学期シラバス

回	授業内容
1	全体：説明会、自己紹介、グループ形成 グループ別：テーマについて案を出し合い、検討する 全体：グループ別作業の結果発表（テーマの重要性など）
2	全体：プロジェクトの手順 グループ別：テーマの決定、問題提起、取材の観点・内容の検討 全体：計画（案）の発表、テーマの提出
3	グループ別：問題提起の具体化、取材計画、役割分担 全体：取材計画の発表、取材計画の提出
4	グループ別（教室外）：準備のための取材（テーマを深めて、取材計画の具体化を図る）
5	グループ別：準備取材の分析、上記を踏まえたドキュメンタリーの構成を考える 全体：各グループのドキュメンタリー構成の発表、意見交換、ドキュメンタリー構想の提出
6	グループ別：グループA（教室外）：ロケ1（実際の撮影） グループB：要素の整理、内容についての再検討
7	グループ別：グループB（教室外）：ロケ1（実際の撮影） グループA：要素の整理、足りない要素について検討
8	グループ別：グループA（教室外）：ロケ2（実際の撮影） グループB：要素の整理、足りない要素についての検討
9	グループ別：グループB（教室外）：ロケ2（実際の撮影） グループA：要素の整理、足りない要素についての検討
10	グループ別：全体の構想の具体化、特殊効果、音楽などの入れ方の検討、編集作業の手順、役割分担の決定 全体：編集計画の発表
11	全体：試写会、感想・意見交換会
12	グループ別：内容のチェック：問題提起の仕方・書き方の妥当性、視聴者に訴えることが出来たかなど
13	グループ別：仕上げ作業 全体：補足する点についての検討結果の発表
14	全体：ビデオ・ドキュメンタリー鑑賞会、意見交換会
15	全体：各自の感想、及び反省点、取り上げた二つの問題についての全員によるディスカッション、ビデオの提出、アンケートの提出

表3.1.3-27 調査実習 2002年度春学期シラバス

回	授業内容
1	全体：説明会、自己紹介、テーマの決定、グループ形成 グループ別：問題提起、研究内容・方法についての検討 1 全体：グループ別作業の結果報告、異文化理解ワークショップ 1
2	全体：研究とは何か？ グループ別：研究内容・方法についての検討 2、アウトライン作り、アウトライン提出 全体：計画（案）についての報告、異文化理解ワークショップ 2
3	全体：研究のモデル提示 グループ別：問題提起・方法論の具体化、役割分担 全体：具体化した問題提起についての報告、異文化理解ワークショップ 3
4	グループ別：データ収集、分析 全体：論点、及び論拠方法についての報告、異文化理解ワークショップ 4
5	グループ別：データの分析、解釈、考察 1 全体：グループ別作業の報告、異文化理解ワークショップ 5
6	グループ別：データの分析、解釈、考察 2 全体：グループ別作業の報告、異文化理解ワークショップ 6
7	全体：中間発表会 各グループの中間発表
8	グループ別：データの分析、解釈、考察 3 全体：グループ別作業の報告、異文化理解ワークショップ 7
9	グループ別：サブテーマ別の結論の割り出し 全体：グループ別作業の報告、異文化理解ワークショップ 8
10	グループ別：論点の確認、論拠方法、データの選択 全体：グループ別作業の報告、異文化理解ワークショップ 9
11	グループ別：結論提示、全体のまとめ、構成の工夫 全体：グループ別作業の報告、異文化理解ワークショップ 10
12	グループ別：仕上げ作業、プレゼンテーションの工夫 全体：各グループのプレゼンテーション方法についての報告、異文化理解ワークショップ 11
13	全体：最終発表会（グループ別の発表）
14	全体：異文化理解ワークショップ 12
15	全体：意見交換会、アンケート記入

#### iv) 課外文化体験、及びその他の行事

日本文化体験実習で行った文化体験以外にコースの課外文化体験として茶会、和服体験、西海祭り参加と能登巡りを実施した。

コースの行事として4月に2泊3日の合宿を行い、中間発表会と日本文化体験、及び日本人学生との交流活動を行った。この合宿に日本人学生が6名参加した。

なお、第1期から第7期までの日本文化授業科目担当者数、及びその身分別の内訳は次の通りである。

表3.1.3-28 日本語・日本文化研修コース 日本文化科目担当者身分別内訳

期	身分別担当者数		
	学内教官	非常勤講師	合計
第1期(1995.10~1996.9)	23	12	35
第2期(1996.10~1997.9)	23	13	36
第3期(1997.10~1998.9)	20	12	32
第4期(1998.10~1999.9)	16	10	26
第5期(1999.10~2000.9)	20	18	38
第6期(2000.10~2001.9)	24	16	40
第7期(2001.10~2002.9)	32	22	54

#### 3.1.3.4 成績評価

##### a. 成績評価

日本語・日本文化研修コース専用科目の成績評価は下記の基準に基づいて行っている。

###### i) 日本文化演習Ⅰ・Ⅱ

学期末の口頭発表	40%
平常点(討論会への参加度合いを含む)	30%
出席点	30%

###### ii) 日本文化体験実習

学期末レポート	40%
平常点	30%
出席点	30%

###### iii) 調査実習

発表、及びレポート	40%
平常点	40%
出席点	20%

発表は中間発表と期末の最終発表の2回に分かれて行われる。平常点はグループ活動や全体で行う討論などへの参加度合い、課題提出などを基準にしている。

上記の4科目の成績評価は上述の総合評価に基づいて次の通りに行う。

A : 100~80

B : 79~70

C : 69~60

D : 59~0

なお、A、B、Cは合格、Dは不合格とみなす。

各受講者に成績証明書を交付している。それに基づいて単位認定を行う大学も増えているようである。

#### b. 修了要件、及び修了証書授与

本コースの修了要件は以下の通りである。

(1) 日本語・日本文化研修コースの教育課程で定められている必修科目(18科目)を履修し、合格しなければならない。

但し、修了判定を行う際に、各学期1科目まで一般授業科目の読み替えを認める。

(2) コース終了時に日本に関わるテーマについて口頭研究発表を行わなければならぬ。

(3) 同研究テーマについて研究レポートを作成し、提出しなければならない。

なお、修了者には、修了証書を授与している。

#### 3.1.3.5 問題点

##### a. ニーズの多様化

日本語・日本文化研修生は世界各国の様々な大学から集まって來るので、その教育的背景も一様ではない。従って、当然のことながら、日本語能力などの学力にばらつきが生じてしまう。また、母国大学における専攻も日本語、日本語学、日本文学、日本文化、国際関係論、言語学、ビジネス日本語などと多様であり、その結果、留学目的やニーズにもばらつきが生じてしまう。従って、一つのプログラムで多様なニーズに応えざるを得なくなる。現在、入学時、及びコース終了時に行うアンケート調査の結果に基づいて、日本文化科目の内容を決めている。学生の興味のある日本についての分野を少しでも多く取り上げるように工夫を凝らしているが、依然として、多様化するニーズにどのように応えていくのかということが課題として残る。

学生のニーズに応えるためには学生の背景などについて知る必要があり、協定校との連絡を密にしていかなければならない。柔軟な教育プログラムを立てるためには各大学における学習スタイル、教育課程、使われている教科書、学年の構成、渡日以前の教育、及び帰国後

の教育と日本での教育との関連性、単位互換制度の有無などについて正確に把握しておくことが重要である。この作業は非常に手間のかかるものであり、場合によっては現地調査をするものと思われる。しかも、国別の特徴を把握するだけでは不充分で、大学別のシステムについての情報も必要となる。

#### b. 日本語

日本語の面では、第1学期から総合日本語コースの最上級のFレベルに配置される学生の2学期目の対応が問題になる。現在の第8期生20人の中には1学期目からFクラスを受講する学生は6人もいる。現段階での対応策として、学部留学生向けの教養的科目の日本語Bや日本語と関係のある日本人学生用の一般授業科目の振替を認めている。しかし、このような学生が増えていくことを考慮すると、春学期にGクラスを開講することなどの対策を講じなければならないと思われる。

#### c. 受講者の選考

日本語・日本文化研修生は原則として国費留学生であるため、その奨学金を目当てに、明確な留学動機を持たずに、単なる日本体験を目的に受講を申請する者もいる。本コースでは学生の質を高め、学習意欲の高い学生を受け入れることを目的に、第7期（2001年度）の大学推薦による日本語・日本文化研修留学生選考からはポイント制度を設け、厳格な選考を行うことを試みている。しかし、申請書類を作成する際に、他人の力を借りる者もあり、第7期では修了要件を満たさなかった者が2人いた。このような事態を避け、学習意欲の高い学生を受け入れるためにには、協定校などにコース内容などの情報をなるべく詳細に通知しなければならない。本コース独自のホームページの立ち上げ、及び案内用のパンフレットの発行などを検討している。

#### d. アフターケア

日本語・日本文化研修生はコース修了後に母国大学に戻り、大抵1年から2年以内に卒業する。卒業後に日本の大学の大学院への進学を希望する学生は年々増えている。受け入れ指導教官探しや奨学金申請のためのサポート、推薦書作成などを現在でも行っている。しかし、金沢大学の大学院への進学希望者が増えてくることが予想されるので、今後の学内の受け入れ体制の整備が必要である。

#### e. 追跡調査の必要性

学生の帰国後のニーズをより正確に把握し、金沢大学での教育プログラムの充実を図るために追跡調査を行う必要がある。現在では修了者に対し、帰国前にアンケート調査を行っているが、帰国1年後（卒業後）に追跡調査が出来れば、コース設計を行う上で貴重なデータとなる情報が得られると思われる。

#### f. 日本人学生との交流

日本語・日本文化研修生に日本人学生との交流の場を提供することを目的に「りゅうとも」という交流サークルを作っている。しかし、日本人学生との交流は表面的なものに留まっており、眞の友人関係へとは発展しないという意見が多い。日本人学生との交流を妨げている要因を適切に分析し、解決方法を模索しなければならない。

#### g. 活躍の場の提供

日本の良き理解者になる前提条件として、日本語・日本文化研修生は金沢大学に、また地域社会に自分なりに何らかの方法で貢献すべきだと思う。なぜならば、一方通行的な日本に対する理解は眞の理解とは言い難い上、一方通行的な交流は意味をなさないからである。そのために、現在でも地域の学校の国際交流行事に参加することなどを行っている。日本語・日本文化研修生が大学または地域に貢献できる機会を作り、自らの能力を発見しながら、世界の舞台で活躍できる人物に成長できる環境作りを手掛けていきたい。

### 3.1.4 短期留学プログラム(KUSEP)

#### 3.1.4.1 コース概要

このプログラムは、平成10年10月から始まった、金沢大学と交流協定を締結している大学等から留学生を受け入れ、日本語教育、英語による日本事情・日本文化及び各専門分野の授業科目を提供する、半年または1年間の特別のプログラムである。

プログラムの教育を通じ、また広く世界の学生との交流を進めながら、日本への理解を深めていくこと及び国際社会で活躍する人材に育つことを期待している。

さらに、この短期留学をきっかけとして、留学生の日本に関する研究あるいは金沢大学での専門的な研究に取り組む動機となることも期待されている。

#### 3.1.4.2 カリキュラム

##### a. 第Ⅰ期（1998年10月～1999年9月）

###### i) 必修科目

日本語の能力に応じてクラス分けをし、各学期5単位が必修である。

- ・日本語：秋学期5単位、春学期5単位、週5コマ、コーディネーター：三浦香苗、岡澤孝雄（留）

###### ii) 選択必修科目（科目名、単位、週のコマ数、コーディネーターの順）

日本事情、日本文化、日本の自然関係を学ぶ科目で、秋学期及び春学期を通じて2科目が必修である。

###### ①秋学期

- ・日本人の心理と思想：2単位、週1コマ、小牧純爾（文）
- ・科学風土記 - 加賀・能登のサイエンス -：2単位、週1コマ、本淨高治（理）

###### ②春学期

- ・日本の社会と文化：2単位、週1コマ、志村恵（文）
- ・日本の自然と生物：2単位、週1コマ、中村浩二（理）

###### iii) 選択科目（科目名、単位、週のコマ数、コーディネーターの順）

###### ①秋学期

- ・英語学演習1：2単位、週1コマ、斎木麻利子（教）
- ・東アジアの国際政治：2単位、週1コマ、ミッドフォード ポール（法）
- ・日本経済 - 発展の過程と世界経済との関係-：1単位、週1コマ、小林昭（経）
- ・身近な微生物と地球環境：2単位、週1コマ、田崎和江（理）
- ・数学A：2単位、週1コマ、石本浩康（理）

- ・ Introduction to Modern Physics : 2 単位, 週 1 コマ, 久保治輔(理)
  - ・ Introduction to Experimental Physics : 2 単位, 週 1 コマ, 鈴木治彦(理)
  - ・ ハローケミストリー : 2 単位, 週 1 コマ, 須原正彦 (理)
  - ・ 化学課題研究1 : 3 単位, 週 3 コマ, 須原正彦 (理)
  - ・ 植物と環境 : 2 単位, 週 1 コマ, 和田敬四郎(理)
  - ・ 計算科学 A : 2 単位, 週 1 コマ, 伊藤達郎(理)
  - ・ 東洋医学 : 2 単位, 週 1 コマ, 鈴木永雄(薬)
  - ・ 土木建設工学総論 : 2 単位, 週 1 コマ, 木俣昇 (工)
  - ・ 計算機援用工学演習 : 2 単位, 週 1 コマ, 山崎光悦(工)
- ②春学期
- ・ 数学 B : 2 単位, 週 1 コマ, 一瀬孝(理)
  - ・ 物質化学概論 : 2 単位, 週 1 コマ, 須原正彦(理)
  - ・ 計算科学 B : 2 単位, 週 1 コマ, 樋渡保秋(理)
  - ・ 化学課題研究1 : 3 単位, 週 3 コマ, 須原正彦 (理)
  - ・ 電気・電子・情報工学の技法 : 2 単位, 週 1 コマ, 作田忠裕(工)
  - ・ 流体力学と伝熱 - 環境と地球物理への応用 - : 2 単位, 週 1 コマ, 木村繁男(工)
  - ・ 高分子化学入門 : 2 単位, 週 1 コマ, 石田真一郎(工)

iv) 自主研究 (秋学期 2 単位, 春学期 2 単位, 週 1 コマ)

留学生自身が定めたテーマについて, 専門分野の教官の指導の下に研究する。

各学期の終了前にレポートを提出する。

表3.1.4-1.1 秋学期1998.10-1999.3 時間割

	1限 8:50-10:20	2限 10:30-12:00	3限 12:50-14:20	4限 14:30-16:00	5限 16:10-17:40
月曜日	日本語	日本語	日本人の心理と思想 小牧純爾	東アジア国際政治 ミッドフォード ポール	科学風土記 本淨高治
火曜日	日本語	日本語	東洋医学 鈴木永雄	Introduction to Modern Physics 久保治輔	数学A 石本浩康
			計算科学 A 伊藤達郎		
水曜日	日本語	日本語	計算機援用工学演習 山崎光悦	植物と環境 和田敬四郎	土木建設工学総論 木俣昇
			ハローケミストリー 須原正彦	化学課題研究 (1) 須原正彦	
木曜日	日本語	日本語	課外活動 自主研究		
金曜日	日本語	日本語	英語学演習 1 斎木麻利子	Introduction to Experimental Physics 鈴木治彦	日本経済 小林昭
			身近な微生物と地球環境 田崎和江	化学課題研究 (2) 須原正彦	化学課題研究 (3) 須原正彦

表3.1.4-1.2 春学期1999.4-1999.9 時間割

	1限 8:50-10:20	2限 10:30-12:00	3限 12:50-14:20	4限 14:30-16:00	5限 16:10-17:40
月曜日	日本語	日本語	物質化学概論 須原正彦	計算科学 B 樋渡保秋	日本の社会と文化 志村恵
火曜日	日本語	日本語	日本の自然と生物 中村浩二	化学課題研究 須原正彦	数学 B 一瀬孝
水曜日	日本語	日本語	電気・電子・情報工学の技法 作田忠裕	化学課題研究 須原正彦	
木曜日	日本語	日本語			
金曜日	日本語	日本語	高分子化学入門 石田真一郎	流体力学と伝熱 木村繁男	化学課題研究 須原正彦

b. 第Ⅱ期 (1999年10月～2000年9月)

i) 必修科目

日本語の能力に応じてクラス分けをし、各学期5単位が必修である。

- ・日本語：秋学期5単位、春学期5単位、週5コマ、コーディネーター：三浦香苗（留）

ii) 選択必修科目（科目名、単位、週のコマ数、コーディネーターの順）

日本事情、日本文化、日本の自然関係を学ぶ科目で、秋学期及び春学期を通じて2科目が必修である。

①秋学期

- ・日本人の心理と思想：2単位、週1コマ、小牧純爾（文）
- ・科学風土記 - 加賀・能登のサイエンス -：2単位、週1コマ、本淨高治（理）

②春学期

- ・日本の社会と文化：2単位、週1コマ、志村恵（文）
- ・日本の自然と生物：2単位、週1コマ、中村浩二（理）

iii) 選択科目（科目名、単位、週のコマ数、コーディネーターの順）

①秋学期

- ・統語論入門：2単位、週1コマ、斎木麻利子（教）
- ・比較政治学：2単位、週1コマ、ミッドフォード・ポール（法）
- ・日本経済 - 発展の過程と世界経済との関係-：1単位、週1コマ、小林昭（経）
- ・日本の言語と文化：2単位、週1コマ、パリハワダナ・ルチラ（留）
- ・数学A：2単位、週1コマ、児玉秋雄（理）
- ・Introduction to Modern Physics：2単位、週1コマ、久保治輔（理）
- ・Introduction to Experimental Physics：2単位、週1コマ、鈴木治彦（理）
- ・化学課題研究：3単位、週3コマ、木下英樹（理）
- ・植物と環境：2単位、週1コマ、和田敬四郎（理）
- ・計算科学A：2単位、週1コマ、伊藤達郎（理）
- ・東洋医学：2単位、週1コマ、鈴木永雄（薬）
- ・土木建設工学総論：2単位、週1コマ、前川幸次（工）
- ・計算機援用工学演習：2単位、週1コマ、山崎光悦（工）
- ・日本文化体験：2単位、週1コマ、岡澤孝雄（留）

②春学期

- ・言語学入門：2単位、週1コマ、斎木麻利子（教）
- ・日本の政治・法制・社会入門：2単位、週1コマ、鹿島正裕（法）
- ・ディスカッションクラス「文化比較」：2単位、週1コマ、大藪加奈（外）
- ・数学B：2単位、週1コマ、藤曲哲郎（理）

- ・物質化学概論：2単位、週1コマ、木下英樹(理)
- ・身近な微生物と地球環境：2単位、週1コマ、田崎和江(理)
- ・計算科学B：2単位、週1コマ、樋渡保秋(理)
- ・電気・電子・情報工学の技法：2単位、週1コマ、久米田稔(工)
- ・流体力学と伝熱 - 環境と地球物理への応用 -：2単位、週1コマ、木村繁男(工)
- ・ポリマープロセッシング入門：2単位、週1コマ、山田敏郎(工)
- ・外国語表現法：2単位、週1コマ、ミッドフォード ポール(法)
- ・日本文化体験：2単位、週1コマ、岡澤孝雄(留)

iv) 自主研究（秋学期2単位、春学期2単位、週1コマ）

留学生自身が定めたテーマについて、専門分野の教官の指導の下に研究する。

各学期の終了前にレポートを提出する。

表3.1.4-2.1 秋学期1999.10-2000.3時間割

	1限 8:50-10:20	2限 10:30-12:00	3限 12:50-14:20	4限 14:30-16:00	5限 16:10-17:40
月曜日	日本語	日本語 比較政治学 ミッドフォード ポール	日本人の心理と思想 小牧純爾	日本経済 小林昭	科学風土記 本淨高治
火曜日	日本語	日本語	東洋医学 鈴木永雄	植物と環境 和田敬四郎	数学A 児玉秋雄
			土木建設工学総論 前川幸次		Introduction to Modern Physics 久保治輔
水曜日	日本語	日本語	計算機援用工学演習 山崎光悦	化学課題研究 木下英樹	Introduction to Experimental Physics 鈴木治彦
木曜日	日本語	日本語			日本文化体験 岡澤孝雄
金曜日	日本語	日本語	統語論入門 斎木麻利子	日本の言語と文化 パリハワダナ ルチラ	計算科学A 伊藤達郎

表3.1.4-2.2 春学期2000.4-2000.9 時間割

	1限 8:50-10:20	2限 10:30-12:00	3限 12:50-14:20	4限 14:30-16:00	5限 16:10-17:40
月曜日	日本語	日本語	流体力学と伝熱 木村繁男	日本の政治・法制・ 社会入門 鹿島正裕	日本の社会と文化 志村恵
			外国語表現法 ミッドフォード ポール		
火曜日	日本語	日本語	日本の自然と生物 中村浩二		数学B 藤曲哲郎
水曜日	日本語		化学課題研究 木下英樹	ディスカッションクラス 「文化比較」 大藪加奈	計算科学B 樋渡保秋
木曜日	日本語	日本語		日本文化体験 岡澤孝雄	
金曜日	日本語	日本語	ポリマープロセッシング 入門 山田敏郎	身近な微生物と地球環境 田崎和江	電気・電子・ 情報工学の技法 久米田稔
			言語学入門 斎木麻利子		

c. 第Ⅲ期 (2000年10月～2001年9月)

i) 必修科目

日本語の能力に応じてクラス分けをし、各学期5単位が必修である。

- ・日本語：秋学期 5 単位、春学期 5 単位、週 5 コマ、コーディネーター：三浦香苗（留）

ii) 選択必修科目 (科目名、単位、週のコマ数、コーディネーターの順)

日本事情、日本文化、日本の自然関係を学ぶ科目で、秋学期及び春学期を通じて2科目が必修である。

①秋学期

- ・日本人の心理と思想：2 単位、週 1 コマ、小牧純爾(文)
- ・科学風土記 - 加賀・能登のサイエンス -：2 単位、週 1 コマ、本淨高治(理)

②春学期

- ・日本論・日本人論の系譜：2 単位、週 1 コマ、楠根重和(法)
- ・日本の自然と生物：2 単位、週 1 コマ、中村浩二(理)

iii) 選択科目 (科目名, 単位, 週のコマ数, コーディネーターの順)

①秋学期

- ・統語論入門：2単位, 週1コマ, 斎木麻利子(教)
- ・武道(杖道)：1単位, 週1コマ, 惠土孝吉(教), ビットマン ハイコ
- ・比較政治学：2単位, 週1コマ, ミッドフォード ポール(法)
- ・日本経済—国際的視野から見る日本経済の発展過程一：1単位, 週1コマ, 小林昭(経)
- ・日本文化体験：2単位, 週1コマ, 岡澤孝雄(留)
- ・日本の言語と文化：2単位, 週1コマ, パリハワダナ ルチラ(留)
- ・数学A：2単位, 週1コマ, 藤本坦孝(理)
- ・Introduction to Modern Physics：2単位, 週1コマ, 久保治輔(理)
- ・Introduction to Experimental Physics：2単位, 週1コマ, 鈴木治彦(理)
- ・化学課題研究：3単位, 週3コマ, 上原章(理)
- ・植物と環境：2単位, 週1コマ, 和田敬四郎(理)
- ・計算科学A：2単位, 週1コマ, 伊藤達郎(理)
- ・東洋医学：2単位, 週1コマ, 鈴木永雄(薬)
- ・土木建設工学総論：2単位, 週1コマ, 川上光彦(工)
- ・計算機援用工学演習：2単位, 週1コマ, 山崎光悦(工)

②春学期

- ・言語学入門：2単位, 週1コマ, 斎木麻利子(教)
- ・日本の政治・法制・社会入門：2単位, 週1コマ, 鹿島正裕(法)
- ・外国語表現法：2単位, 週1コマ, ミッドフォード ポール(法)
- ・ディスカッションクラス「文化比較」：2単位, 週1コマ, 大藪加奈(外)
- ・日本文化体験：2単位, 週1コマ, 岡澤孝雄(留)
- ・数学B：2単位, 週1コマ, 中尾慎太郎(理)
- ・物質化学概論：2単位, 週1コマ, 上原章(理)
- ・身近な微生物と地球環境：2単位, 週1コマ, 田崎和江(理)
- ・計算科学B：2単位, 週1コマ, 樋渡保秋(理)
- ・電気・電子・情報工学の技法：2単位, 週1コマ, 藤田政之(工)
- ・流体力学と伝熱 - 環境と地球物理への応用 -：2単位, 週1コマ, 木村繁男(工)
- ・ポリマー・プロセッシング入門：2単位, 週1コマ, 山田敏郎(工)
- ・武道I：2単位, 週1コマ, ビットマン ハイコ(留)
- ・武道II：2単位, 週1コマ, ビットマン ハイコ(留)

iv) 自主研究 (秋学期2単位, 春学期2単位, 週1コマ)

留学生自身が定めたテーマについて, 専門分野の教官の指導の下に研究する。

各学期の終了前にレポートを提出する。

表3.1.4-3.1 秋学期2000.10-2001.3 時間割

	1限 8:50-10:20	2限 10:30-12:00	3限 12:50-14:20	4限 14:30-16:00	5限 16:10-17:40
月曜日	日本語	日本語	日本人の心理と思想 小牧純爾	比較政治学 ミッドフォード ポール	科学風土記 本淨高治
火曜日	日本語	日本語	東洋医学 ・鈴木永雄		植物と環境 和田敬四郎
			計算機援用工学演習 山崎光悦		Introduction to Experimental Physics 鈴木治彦
水曜日	日本語	日本語	数学 A 藤本坦孝	統語論入門 斎木麻利子	計算科学 A 伊藤達郎
			化学課題研究 上原章	化学課題研究 上原章	化学課題研究 上原章
木曜日	日本語	日本語	日本文化体験 岡澤孝雄		
金曜日	日本語	日本語	Introduction to Modern Physics 久保治輔	日本の言語と文化 パリハワダナ ルチラ	武道 惠土孝吉, ピットマン ハイコ
					日本経済 小林昭

表3.1.4-3.2 春学期2001.4-2001.9 時間割

	1限 8:50-10:20	2限 10:30-12:00	3限 12:50-14:20	4限 14:30-16:00	5限 16:10-17:40
月曜日	日本語	日本語	流体力学と伝熱 木村繁男	外国語表現法 ミッドフォード ポール	数学B 中尾慎太郎
火曜日	日本語	日本語	日本の自然と生物 中村浩二		
水曜日	日本語	日本語	日本論・日本人論の系譜 楠根重和	日本の政治・法制・社会入門 鹿島正裕 ディスカッションクラス 「文化比較」 大藪加奈	計算科学B 樋渡保秋 物質化学概論 上原章
木曜日	日本語	日本語		日本文化体験 岡澤孝雄	
金曜日	日本語	日本語	ポリマープロセッシング 入門 山田敏郎	身近な微生物と地球環境 田崎和江	電気・電子・情報工学の 技法 藤田政之
			言語学入門 斎木麻利子	武道II ビットマン ハイコ	武道I ビットマン ハイコ

d. 第Ⅳ期 (2001年10月～2002年9月)

i) 必修科目

日本語の能力に応じてクラス分けをし、各学期5単位が必修である。

- ・日本語：秋学期5単位、春学期5単位、週5コマ、コーディネーター：峯正志、長野ゆり(留)

ii) 選択必修科目 (科目名、単位、週のコマ数、コーディネーターの順)

日本事情、日本文化、日本の自然関係を学ぶ科目で、秋学期及び春学期を通じて2科目が必修である。

①秋学期

- ・日本人の心理と思想：2単位、週1コマ、小島治幸(文)
- ・行動科学序論(1)：2単位、週1コマ、清水邦彦(文)

②春学期

- ・日本論・日本人論の系譜：2単位、週1コマ、楠根重和(法)
- ・日本の自然と生物：2単位、週1コマ、中村浩二(理)

iii) 選択科目 (科目名, 単位, 週のコマ数, コーディネーターの順)

①秋学期

- ・日本の政治・法制・社会入門：2単位, 週1コマ, 鹿島正裕(法)
- ・日本の政治：2単位, 週1コマ, ミッドフォード ポール(法)
- ・日本の会社と法 - はじめてのビジネス・ロー -：2単位, 週1コマ, 西山芳喜(法)
- ・日本経済—国際的視野から見る日本経済の発展過程ー：1単位, 週1コマ, 小林昭(経)
- ・ディスカッションクラス「文化比較」：2単位, 週1コマ, 大藪加奈(外)
- ・日本文化体験：2単位, 週1コマ, 岡澤孝雄(留)
- ・武道I：2単位, 週1コマ, ビットマン ハイコ(留)
- ・日本の言語と文化：2単位, 週1コマ, パリハワダナ ルチラ(留)
- ・数学A：2単位, 週1コマ, 児玉秋雄(理)
- ・Introduction to Modern Physics：2単位, 週1コマ, 久保治輔(理)
- ・Introduction to Experimental Physics：2単位, 週1コマ, 鈴木治彦(理)
- ・化学課題研究：3単位, 週1コマ, 中西孝(理)
- ・植物と環境：2単位, 週1コマ, 和田敬四郎(理)
- ・体験地球環境学：2単位, 週1コマ, 田崎和江(理), 佐藤努(自研)
- ・生物学実験：3単位, 週1コマ, 東(遠藤)浩(理)
- ・計算科学A：2単位, 週1コマ, 伊藤達郎(理)
- ・東洋医学の化学：2単位, 週1コマ, 鈴木永雄ほか(薬)
- ・計算機援用工学演習：2単位, 週1コマ, 山崎光悦(工)

②春学期

- ・現代日本の文化と社会：2単位, 週1コマ, 鹿野勝彦, 鏡味治也ほか(文)
- ・言語学入門：2単位, 週1コマ, 斎木麻利子(教)
- ・東アジア国際政治：2単位, 週1コマ, ミッドフォード ポール(法)
- ・カズオ・イシグロの世界：2単位, 週1コマ, 大藪加奈(外)
- ・日本文化体験：2単位, 週1コマ, 岡澤孝雄(留)
- ・武道I：2単位, 週1コマ, ビットマン ハイコ(留)
- ・武道II：2単位, 週1コマ, ビットマン ハイコ(留)
- ・数学B：2単位, 週1コマ, 菅野孝史(理)
- ・物質化学概論：2単位, 週1コマ, 中西孝(理)
- ・計算科学B：2単位, 週1コマ, 西川清(理)
- ・土木建設工学総論：2単位, 週1コマ, 松本樹典(工)
- ・電気・電子・情報工学の技法：2単位, 週1コマ, 猪熊孝夫(工)
- ・流体力学と伝熱 —環境と地球物理への応用ー：2単位, 週1コマ, 木村繁男(工)

iv) 自主研究（秋学期 2 単位、春学期 2 単位、週 1 コマ）

留学生自身が定めたテーマについて、専門分野の教官の指導の下に研究する。

各学期の終了前にレポートを提出する。

表 3.1.4-4.1 秋学期2001.10-2002.3 時間割

	1限 8:50-10:20	2限 10:30-12:00	3限 12:50-14:20	4限 14:30-16:00	5限 16:10-17:40
月曜日	日本語	日本語	日本人の心理と思想 小島治幸	体験地球環境学 田崎和江、佐藤努	計算科学 A 伊藤達郎
火曜日	日本語	日本語	東洋医学の化学 鈴木永雄	植物と環境 和田敬四郎	数学 A 児玉秋雄他 2 名
			計算機援用工学演習 山崎光悦	Introduction to Experimental Physics 鈴木治彦	
水曜日	日本語	日本語	日本の会社と法 ーはじめてのビジネス・ロー	ディスカッションクラス 「文化比較」	
			西山芳喜	大數 カロナ	
木曜日	日本語	日本語		化学課題研究 中西孝他 8 名	
				日本の政治・法制・社会入門 鹿島正裕他 2 名	
				日本文化体験 岡澤孝雄	
金曜日	日本語	日本語	Introduction to Modern Physics 久保治輔	日本の言語と文化 パリハワダナ ルチラ	武道 I ピットマン ハイコ
			行動科学序論（I） 清水邦彦		日本経済 小林昭
				生物学実験 東（遠藤）浩	

表3.1.4-4.2 春学期2002.4-2002.9 時間割

	1限 8:50-10:20	2限 10:30-12:00	3限 12:50-14:20	4限 14:30-16:00	5限 16:10-17:40
月曜日	日本語	日本語	流体力学と伝熱 木村繁男	土木建設工学総論 松本樹典	数学B 菅野孝史
火曜日	日本語	日本語	日本の自然と生物 ・中村浩二		
水曜日	日本語	日本語	日本論・日本人論の系譜 楠根重和	物質化学概論 中西孝	計算科学B 西川清
木曜日	日本語	日本語	現代日本の文化と社会 鹿野勝彦・鏡味治也	カズオ・イシグロの世界 大藪加奈	電気・電子・情報工学の技法 猪熊孝夫
				日本文化体験	
				岡澤孝雄	
金曜日	日本語	日本語	言語学入門 斎木麻利子	武道II ピットマン ハイコ	武道I ピットマン ハイコ

### 3.1.4.3 教育活動実績・評価

表3.1.4-1～5を参照。

### 3.1.4.4 評価方法・成績

原則として1年間の留学で秋学期10単位以上、春学期10単位以上で計20単位以上履修した留学生には、短期留学プログラム修了証書を授与する。

#### a. 第Ⅰ期（1998年10月～1999年9月）

受講生人数：24名：1年間：16名、半年：8名

1年間の留学で取得単位合計20単位以上：10名

半年の留学で取得単位合計10単位以上：5名

#### b. 第Ⅱ期（1999年10月～2000年9月）

受講生人数：28名：1年間：18名、半年：10名

1年間の留学で取得単位合計20単位以上：14名

半年の留学で取得単位合計10単位以上：7名

#### c. 第Ⅲ期（2000年10月～2001年9月）

受講生人数：29名：1年間：26名、半年：3名

1年間の留学で取得単位合計20単位以上：24名

半年の留学で取得単位合計10単位以上：4名

d. 第Ⅳ期（2001年10月～2002年9月）

受講生人数：30名：1年間：24名、半年：6名

1年間の留学で取得単位合計20単位以上：21名

半年の留学で取得単位合計10単位以上：3名

#### 3.1.4.5 問題点

a. 奨学金

金沢大学と交流協定を結ぶ海外の大学も年々増え、留学希望者も増加している。しかし、AIEJ の奨学金の受給者の人数は頭打ちか微減状況にある。

b. 授業科目数

開講科目数と分野の多様性は開始以来あまり増えていない。講義の新しい分野の開拓も必要である。

c. 日本人との交流

KUSEP の学生は国際交流会館に住み、授業は KUSEP の学生のみが参加する。学業と日常生活において日本人との交流は稀薄である。

### 3.1.5 総合日本語コース（一般日本語）

#### 3.1.5.1 コース概要

##### a. 成立の経緯

「総合日本語コース」（以下、「総合コース」と略記）は平成10年10月、それまで行われていた「全学向け日本語補講」<sup>12</sup>を母体とし、それを拡充・再編するという形で誕生した。再編の直接のきっかけは、平成10年度後期にスタートした「金沢大学短期留学プログラム」（KUSEP）である。KUSEPにおいては日本語が必修であるが、独自の日本語コースを新しく創る余裕はなかったため、従来の「日本語補講」の中にKUSEPの日本語プログラムを組み込むこと（しかも他の必修科目の履修との両立が可能な形で）が求められた。

また、これを契機として、「日本語補講」の内容的見直しを行い、さらに充実したものになると共に、KUSEPだけでなく、留学生センター所属の他のコースの学生たちも、従来の「日本語補講」の受講学生と共に日本語が履修できるような、総合的な日本語コースが創られることになった。

##### b. 目的

大学・大学院での学習・研究活動の基盤となる、実践的日本語力を養う。

##### c. 対象学生

金沢大学に在籍する留学生で、日本語を母語としない者。

具体的には、次のような学生である。

- 1) 学部生、大学院生、研究生、科目等履修生、特別研究学生、特別聴講学生
- 2) 留学生センターに所属する次のコースの学生

1. 金沢大学短期留学プログラム（KUSEP）
2. 日本語・日本文化研修コース
3. 日韓共同理工系学部留学生コース（平成12年度後期に開始）
4. 日本語研修コースの学生のうち、日本語のレベルが総合日本語コースのBレベル以上と認められる者

ただし、クラス定員に余裕がある場合、次のような優先順位で、上記以外の学生を受け入れる場合がある。

- 1) 金沢大学に在籍する外国人客員研究員
- 2) 金沢大学の外国人教職員
- 3) その他、留学生センター長が特に認めた者

<sup>12</sup> 詳細については、最後の「補足説明2」を参照のこと。

### 3.1.5.2 カリキュラム

#### a. 開講期間・開講時間

春（4月～8月）と秋（10月～2月）の2学期、開講される。1学期は15週、授業は週5日、1コマは90分である。小立野キャンパスでは午前・午後共に開講されるが、角間キャンパスでは、KUSEPの学生が他の必修科目を履修することを可能にするため、午前中のみ開講される。

上記の通常の授業のほか、春休みと夏休み中にも「特別補講」<sup>13</sup>を行ってきた。

以下の記述は、通常の学期中の授業について述べたものである。

#### b. 開講キャンパス

角間・小立野両キャンパスで開講される。角間キャンパスの方が学生数も多く、また、留学生センター所属の学生（日本語が必修の学生）は原則として角間キャンパスで日本語を履修するため、クラスの種類もレベルの数も角間キャンパスの方が多い。

#### c. クラスの種類とレベル

総合コースのクラスには、次の i) ～iii) の3種類がある。

総合コース設立以前と比べての大きな相違点は、「日本語クラス」に上級2のレベル（F）を設けたこと、また、「漢字クラス」・「技能別クラス」をあらたに創ったこと、の2点である。

##### i) 日本語クラス

日本語の四技能（読む・書く・聞く・話す）の総合的な習得を目指す。

留学生センター所属の学生にとっては必修。

A～Fの7レベルがある。A・Bは初級、C1は初中級、C2・Dは中級、E・F（Fは角間キャンパスでのみ開講）は上級である。コース設立当初はC1、C2というレベルではなくC（現在のC2相当）だけだったが、BとCのレベル間のギャップが大きく、特に非漢字圏から多くの脱落者を出していたため、平成12年度後期にC1というレベルを設け、初級と中級とを繋ぐ橋渡し的役割を担わせることになった。各レベルの学習内容と到達目標は次のとおりである。

<sup>13</sup> 詳細については、最後の「補足説明1」を参照のこと。

表3.1.5-1 「日本語クラス」の学習内容と到達目標

レベル	学習内容・到達目標
A（初級1）	平仮名・カタカナ・漢字109字、初級文法の前半を学習し、その運用力を養う。日常生活に必要な簡単な会話、平易で短い文章の読み書きができるようになる。
B（初級2）	初級文法の後半を学習し、その運用力を養う。日常生活に役立つ会話、簡単な文章の読み書きができるようになる。
C1（初中級）	C2への橋渡しレベル。一度は学んだが正確に覚えていない、または身に付いていない初級文法の復習をしながらその運用練習を充分に行うことにより、C2への足固めをする。C2に備えて漢字の読みも学習する。
C2（中級1）	主として書き言葉の文章（漢字仮名混じり文）の読解を中心として学習し、そこに使われている表現や構文を学び、それを題材にした「聞く・話す・書く」活動ができるようになる。
D（中級2）	上質で文化的深み・広さを持った文章（生教材を多少書き直したもの）の読解を中心として学習し、そこに使われている表現や構文を学び、それを題材にした「聞く・話す・書く」活動ができるようになる。
E（上級1）	現代日本社会の幾つかのトピックについて書かれた文章（すべて日本人向けに書かれた生教材）の読解を中心として様々な活動を行い、日本語の運用力をさらに高める。日本語や日本文化・日本社会についての理解も深める。
F（上級2）	これまでに習得した日本語の応用能力をさらに高めることにより、大学や大学院での学習・研究活動の基盤となる実践的日本語力を養うことを目指す。現代日本社会の実態・問題を様々な視点からとらえ、考える。日本語や日本文化・日本社会についての理解もさらに深める。

### ii) 漢字クラス（原則として角間キャンパスでのみ開講）

漢字のみを学習するクラス。B～Fの5レベルがある。「日本語クラス」のAレベルでは漢字109字（『Basic Kanji Book Vol. 1』1～10課）を学習するが、B以上のレベルでは漢字の学習を特に授業に取り入れてはいないため、漢字の重点的な学習は漢字クラスで行われることになる。漢字クラスは「日本語クラス」とは別建てであり、必ずしも「日本語クラス」と同じレベルを履修しなくてもよい。

### iii) 技能別クラス（原則として角間キャンパスでのみ開講）

特定の技能の習得を目指すクラス。「読解」（C2レベル相当）・「講義の聴解」・「作文」（Dレベル相当）「レポート作成」・「口頭発表技術」（Eレベル相当）・「コンピューターを使った論文作成」（Fレベル相当）の6クラスがある。「日本語クラス」に在籍する学生は、「日本語クラス」と同レベルか、1レベル上または下の技能別クラスを履修することができる。技能別クラスはすべて専任教官が担当する。

上記のクラスとレベル、及びそれぞれの週あたりコマ数を表にまとめると次のようになる。

表3.1.5-2 クラス・レベル・週あたりコマ数

日本語クラス	コマ	漢字クラス	コマ	技能別クラス	相当レベル	コマ
A (初級1)		5 (漢字109字も学習)				
B (初級2)	4	漢字B	1			
C1 (初中級)	3	漢字C	1			
C2 (中級1)	3			読解	C2	1
D (中級2)	3	漢字D	1	講義の聴解 作文	D	1 1
E (上級1)	3	漢字E	1	レポート作成 口頭発表技術	E	1 1
F (上級2)	3	漢字F	1	コンピューターを使つた論文作成	F	1

#### d. 使用教科書

それぞれのクラスで用いるメインテキストは、総合コースとして定めている。

それ以外の教材を副教材として用いることは、担当教師の判断に任されている。

以下に、平成14年度後期に使用予定の各クラスのメインテキストを示す。

表3.1.5-3 「日本語クラス」の使用教科書

日本語クラス	著者・編者／教科書名／出版社
A (初級1)	スリーエーネットワーク『みんなの日本語 初級I』スリーエーネットワーク
B (初級2)	スリーエーネットワーク『みんなの日本語 初級II』スリーエーネットワーク
C1 (初中級)	文化外国語専門学校『新文化初級日本語II』凡人社、自主作成教材
C2 (中級1)	文化外国語専門学校『文化中級日本語I』凡人社
D (中級2)	文化外国語専門学校『文化中級日本語II』凡人社 (1~6課)
E (上級1)	鎌田修他『中級から上級への日本語』The Japan Times
F (上級2)	山本富美子他『国境を超えて』新曜社、生教材

表 3.1.5-4 「漢字クラス」の使用教科書

漢字クラス	著者・編者／教科書名／出版社
漢字B	加納千恵子他『Basic Kanji Book Vol.1』凡人社 (11~22 課)
	加納千恵子他『Basic Kanji Book Vol.2』凡人社 (23~27 課)
漢字C	加納千恵子他『Basic Kanji Book Vol.2』凡人社 (28~45 課)
漢字D	加納千恵子他『Intermediate Kanji Book Vol.1』凡人社
漢字E	自主作成教材 (日本語能力試験 3 級漢字 3 字, 2 級漢字 164 字)
漢字F	自主作成教材 (日本語能力試験 2 級漢字 157 字, 付表 56 語)

表 3.1.5-5 「技能別クラス」の使用教科書

技能別クラス	著者・編者／教科書名／出版社
読解	三浦香苗他『「わたし」を話そう』金沢大学留学生センター自主作成教材
作文	アカデミック・ジャパニーズ研究会『大学・大学院生の日本語②作文』アルク (平成 14 年前期まで : 佐藤政光他『にほんご作文の方法』第三書房)
講義の聴解	産能短大日本語教育研究室『講義を聞く技術』産能短大
レポート作成	浜田麻里他『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版
口頭発表技術	東海大学留学生教育センター『日本語口頭発表と討論の技術』東海大学出版会
コンピューターによる 論文作成	自主作成教材

日本語クラスの D ~ F においては、平成 14 年度前期以前のメインテキストは表 3.1.5-3 のものと異なる部分があるので、それを表 3.1.5-6 にまとめて記す。

表 3.1.5-6 「日本語クラス」 D ~ F の使用教科書 (平成 14 年度前期以前)

D (中級 2)
平成 10 年度後期 : 文化外国語専門学校『文化中級日本語 II』凡人社 (1~8 課)
平成 14 年度前期 : 文化外国語専門学校『文化中級日本語 II』凡人社 (1~5 課)
E (上級 1)
平成 10 年度後期 : 門倉正美他『日本社会再考』北星堂
平成 11 年度前期 : 文化外国語専門学校『文化中級日本語 II』凡人社 (7, 8 課)
門倉正美他『日本社会再考』北星堂
平成 11 年度後期~13 年度後期 :
文化外国語専門学校『文化中級日本語 II』凡人社 (7, 8 課)
架谷真知子他『日本社会探検』スリーエーネットワーク
平成 14 年度前期 : 文化外国語専門学校『文化中級日本語 II』凡人社 (6~8 課)

### e. 履修の手続き・履修形態

#### i) プレースメント・テスト

日本語クラスを初めて履修しようとする学生は全員、プレースメント・テストを受けなければならない。テストは筆記試験（聴解を含む）で、初級用と中・上級用の2種類があり、学生の自己申告によってどちらかを選んでもらう。

プレースメント・テストは総合コース設立時は日本語能力試験をもとに作られたが、平成13年度後期に現在のものに改められた。現在行っているテストの（以前のものと比較しての）特徴は次のとおりである。

1. 総合コースにおける学習内容から出題している。
2. 総合コースのA～Eの各レベルを測る問題を、この順番に配列している。
3. できる限り記述式の問題を取り入れている。

漢字クラス・技能別クラスのみを履修する学生はプレースメント・テストを受ける必要はなく、授業に出て担当教師のレベルチェックを受ける。

#### ii) レベルの確定

授業開始後、学生のレベルがクラスのレベルに合っていないと判断された場合に備えて、日本語クラスについては3週間、漢字クラス・技能別クラスについては4週間の「レベル移動期間」を設けている。以下の要件が順次満たされた場合、学生は上下1レベルの範囲でレベルを変更することができる。

1. 学生が現在出ているクラスの担当教師全員の合意
2. 移動先のクラスの責任者の教師の合意
3. 仮移動
4. 移動先のクラスの責任者の教師の合意

上記の手続きを踏んだことは書いた形で記録に残す。このように煩雑な手続きを踏む理由は、このようにすると、「レベル移動は教師が適当に、または恣意的に行っているのではなく、きちんとした手続きを踏んで行われている」ということが学生にも分かり、希望どおりにならなかった場合の不満が少なくなるからである。しかし一方、レベルが確定するまでに時間がかかり、移動先のクラスでの学習が出遅れるという不都合があることも事実で、現行の手続きは再検討の余地がある。

#### iii) 登録期間

学生は授業開始後、日本語クラスは3週間以内、漢字クラス・技能別クラスは4週間以内にクラスに出て登録しなければならない。ただしこの期間を過ぎた場合でも、それが正当な理由によるものと認められる場合は、授業開始後6週間までは学生を受け入れる。

#### iv) 履修可能コマ数

1人の学生が1学期に履修できるコマ数は、最大5コマである。たとえば、日本語クラスのAレベルを履修する学生は、それだけで既に5コマを履修することになるので他のクラスは履修できない。それに対して、日本語クラスC1を履修する学生は、日本語クラス3コマのほかに、たとえば漢字Cと技能別クラスの読解を履修することができる。最大5コマまでと定めた理由は、1)（自宅学習も含めた）1学期の学習量としてはそのくらいが適当である、2)（語学学習という性質上）毎学期平均して学習してもらいたい、という理由によるものである。

#### f. 授業担当者と授業運営

総合コースの授業は、平均して20名程度（数名の専任教官と十数名の非常勤講師）の教師が担当している。漢字クラス（専任教官または非常勤講師）と技能別クラス（専任教官のみ）は1名の教師が単独で担当するが、日本語クラスは3～5名の教師がチーム・ティーチング方式で担当している。各チームの「レベル責任者」（総合コースの「コース責任者」が指名）は、シラバスの作成、学生のレベル移動についての判断、月例報告（毎月コース責任者への提出が義務づけられている）の提出、問題があったときのコース責任者への連絡、定期試験の問題作成の作業分担、クラス毎のミーティング（毎学期最低2回は開催）の召集などを行い、各日本語クラスの運営の取りまとめ役としての役割を果たす。

毎回の授業の引き継ぎは、以前は主に電話で当該曜日担当者の間でのみ行われていたが、ここ2～3年は電子メールの普及により、メンバー全員が同時にその日の授業報告を受けることが可能になっている。

専任教官が務める「コース責任者」（当初は1名だったが平成12年度後期からは2名）は総合コース全体の運営を統括する立場にあり、プレースメント・テストの実施と学生のクラス分け、レベル移動に関する最終的判断、学期開始時の打ち合わせ会の開催、学期中の種々の問題の対処、学期末の反省会の開催、などを行っている。

#### 3.1.5.3 教育活動実績

##### a. 開講科目と履修者数・合格者数、留学生総数と履修率

平成14年度前期までの各学期の開講科目とその履修者数<sup>14</sup>・合格者数、留学生総数及び総合コースの授業の履修率の推移を表3.1.5-7に示す。なお平成12年度前期まで（小立野キャンパスにおいては後期まで）はC1、C2は存在せず、C一つしかなかったが、この時期のC履修者はC2の欄に記す。

<sup>14</sup> 「履修者」とは、登録期間内にクラスに出席した学生を指す。したがって中途脱落者もその中に含まれる。

表3.1.5-7 開講科目と履修者数・合格者数、留学生総数と履修率

1) 角間キャンパス 2) 小立野キャンパス 3) 履修者数 4) 合格者数

開講 科目	平成 10 後期	11年 前期	11年 後期	12年 前期	12年 後期	13年 前期	13年 後期	14年 前期	合計
	履 <sup>3)</sup> 合 <sup>4)</sup>								
A 角 <sup>1)</sup>	14 9	6 2	7 7	1 1	11 9	10 7	17 13	5 4	71 52
小 <sup>2)</sup>	13 6	9 5	8 4	4 1	18 12	8 3	6 3	4 1	70 35
B 角 <sup>1)</sup>	14 10	11 7	9 7	10 8	11 11	14 12	12 11	13 5	94 71
小 <sup>2)</sup>	8 4	8 5	11 3	7 5	7 4	15 9	7 5	5 4	68 39
C1 角 <sup>1)</sup>					11 11	11 11	12 11	9 7	43 40
小 <sup>2)</sup>					— —	3 1	7 2	7 6	17 9
C2 <sup>15</sup> 角 <sup>1)</sup>	10 6	23 12	22 12	18 8	8 7	18 11	7 5	16 9	122 70
小 <sup>2)</sup>	17 6	10 3	11 3	8 7	5 3	3 2	8 7	3 3	71 34
D 角 <sup>1)</sup>	8 5	10 6	6 6	11 9	11 9	13 9	8 7	9 8	76 59
小 <sup>2)</sup>	11 4	10 6	8 3	2 1	9 7	5 1	3 1	10 6	58 29
E 角 <sup>1)</sup>	10 6	6 6	15 11	8 6	15 9	10 9	11 10	8 4	83 59
小 <sup>2)</sup>	3 0	4 2		8 1	3 0	9 1			27 4
F 角 <sup>1)</sup>	5 4	11 9	7 6	12 10	8 5	11 10	7 3	11 11	72 58
漢字B									
角 <sup>1)</sup>	9 8	8 5	7 6	8 3	14 13	14 14	8 6	15 9	83 64
小 <sup>2)</sup>	2 0	3 3	3 1	3 3					11 7
漢字C									
角 <sup>1)</sup>	3 2	14 12	18 11	21 17	8 7	16 13	14 13	4 3	98 78
漢字D									
角 <sup>1)</sup>	6 6	13 11	9 6	9 6	15 15	11 7	8 8	15 11	86 70
漢字E									
角 <sup>1)</sup>	7 6	2 2	13 9	6 6	6 6	10 10	9 8	7 7	60 54
漢字F									
角 <sup>1)</sup>	4 3	10 3	8 6	10 7	5 5	9 9	2 2	8 7	56 42

<sup>15</sup> 平成12(2000)年度前期(小立野キャンパスにおいては後期)までは「C」。

開講 科目	平成 10 後期	11 年 前期	11 年 後期	12 年 前期	12 年 後期	13 年 前期	13 年 後期	14 年 前期	合計
		履 <sup>3)</sup> 合 <sup>4)</sup>							
読解 角 <sup>1)</sup>									
角 <sup>1)</sup>	6 6	12 8	16 10		17 15	17 16	18 12	7 7	93 74
作文 角 <sup>1)</sup> 小 <sup>2)</sup>	6 3	11 8	6 4 2 1	11 7	8 8	7 5	3 3	11 5 2 1	63 40
聴解 角 <sup>1)</sup>	2 0	5 4	2 1	11 11	11 9	9 8	10 9	8 7	58 49
レポート作成 角 <sup>1)</sup> 小 <sup>2)</sup>	9 9	4 4	3 3 2 0	5 4	3 3	7 6	1 1	4 2 2 0	36 32
口頭発表 角 <sup>1)</sup>	10 10	2 2	9 6	5 5	5 3	4 4	5 5	3 3	43 38
コンピュータ 角 <sup>1)</sup>		9 9	11 10	6 6	5 2	7 6	1 1	9 9	48 43
合計 角 <sup>1)</sup> 小 <sup>2)</sup>	123 54	157 44	168 45	152 32	172 42	198 43	153 31	162 35	1285 326
総履修者数 (異なり)	113	113	105	97	117	133	106	101	
留学生総数	336	318	340	334	370	353	365	340	
履修率	33.6%	35.5%	30.9%	29.0%	31.6%	37.7%	29.0%	29.7%	

b. 履修者総数における学生の身分別内訳

表3.1.5-8 履修者の身分別内訳

	10後期	11前期	11後期	12前期	12後期	13前期	13後期	14前期
KUSEP	19	21	21	25	26	29	26	28
日本語・日本文化研修生	9	9	11	11	19	19	12	12
日韓理工系学部留学生					3		2	
日本語研修コース生	4	4	6	5	3	8	2	0
その他	81	79	67	56	66	77	64	61

c. 授業時間割

各学期の授業時間割を次に示す。

i) 平成10(1998)年度後期 10月19日(月)～2月26日(金)

(角間キャンパス)

曜日	1時限(8:50～10:20)		2時限(10:30～12:00)	
	クラス	教官	クラス	教官
月	B	山口	A	山口
	聽解	太田*	C	櫻田
	レポート	パリハワダナ*	E	島
火	B	パリハワダナ*	A	パリハワダナ*
	漢字C	芳浦	C	早川
	漢字E	中村	E	藤田
水	B	パリハワダナ*	A	一瀬
	読解	深沢	C	鎌田
	口頭	峯*	E	太田*
木	B	岡沢*	A	一瀬
	漢字D	鎌田	D	鎌田
	作文	長野*	F	櫻田
金	D	長野*	A	峯*
	漢字B	櫻田	D	櫻田
	F	鎌田	漢字E	藤田

<sup>16</sup>\*は専任教官であることを示す。

(小立野キャンパス)

曜 日	1 時限		2 時限		3 時限		4 時限	
	クラス	教官	クラス	教官	クラス	教官	クラス	教官
月	A	浅野	B	浅野	C	櫻田		
火	A	越野	B	越野	E	藤田		
水	A	笹原	B	笹原	C	笹原	D	鎌田
木	A	河内	C	中村	D	中村	E	島
金			B	河内	E	太田*	D	深川

ii) 平成11(1999)年度前期 4月12日(月)～8月3日(火)

(角間キャンパス)

曜 日	1 時限 (8:50～10:20)		2 時限 (10:30～12:00)		3 時限 (12:50～14:20)		
	クラス	教官	クラス	教官	クラス	教官	
月	A	河内	B	スティーブ			
	E	鎌田	C	山口			
	漢字B	山口	F	島			
火	B	河内	A	スティーブ			
	C	櫻田	D	中村			
	口頭	峯*	漢字F	藤田			
	聽解	太田*					
水	A	一瀬	B	一瀬			
	F	畠田谷	D	櫻田			
	漢字C	櫻田	E	太田*			
	漢字D	太田*					
木	A	関	Computer	岡澤*	漢字E	中村	
	B	中村					
	C	一瀬					
	E	早川					
金	A	長野*	作文	長野*			
	D	パリハワダナ*	レポート	パリハワダナ*			
			読解	三浦*			

(小立野キャンパス)

曜 日	1 時限		2 時限		3 時限		4 時限	
	クラス	教官	クラス	教官	クラス	教官	クラス	教官
月	A	浅野	B	浅野	C	峯*	D	長野*
火	B	越野	A	越野	E	藤田	C	中村
水	A	パリハワダナ*	B	寺下	漢字B	早川		
木	C	笛原	D	笛原	A	関		
金	B	櫻田	A	寺下	D	鎌田	E	島

iii) 平成11(1999)年度後期 10月12日(火)～2月18日(金)

(角間キャンパス)

曜 日	1 時限 (8:50～10:20)		2 時限 (10:30～12:00)	
	クラス	教官	クラス	教官
月	A	中村*	D	早川
	C	鎌田	F	櫻田
	漢字B	櫻田	漢字E	中村
火	A	スティーブ	B	スティーブ
	E	一瀬	C	木水
	F	島	D	中村
	特別 <sup>17</sup>	中村	漢字F	藤田
水	B	笛原	A	山口
	C	一瀬	漢字C	笛原
	E	長野*	作文	長野*
	漢字D	太田*	特別	一瀬
木	A	山口	Computer	岡澤*
	B	中村		
	E	櫻田		
	特別	早川		
金	読解	三浦*	A	一瀬
	レポート	パリハワダナ*	B	太田*
	聴解	太田*	D	笛原
			口頭	峯*

<sup>17</sup> 最も人数の多いクラス（殆ど常にC）の学生の一部を分担するためのクラスとして、学期開始時にはレベルを最終的には決定せずに設けられたクラス。

## (小立野キャンパス)

曜 日	1 時限		2 時限		3 時限		4 時限	
	クラス	教官	クラス	教官	クラス	教官	クラス	教官
月	A	浅野	B	浅野	C	鎌田	漢字B	鎌田
火	作文	長野*	A	長野*	D	鎌田	レポート	パリハワダナ*
水	C	早川	B	越野	A	越野		
木			A	寺下	B	寺下	D	鎌田
金	B	櫻田	A	寺下	C	小西	D	島

iv) 平成12(2000)年度前期 4月12日(火)~8月3日((木)

## (角間キャンパス)

曜 日	1 時限 (8:50~10:20)		2 時限 (10:30~12:00)	
	クラス	教官	クラス	教官／講義室
月	A	パリハワダナ*	漢字B	櫻田
	D	櫻田	作文	長野*
	E	鎌田	レポート	パリハワダナ*
火	A	一瀬	B	島
	E	中村	C	一瀬
			D	山田
			漢字F	藤田
水	A	一瀬		
	B	マイケル		
	F	櫻田		
	聴解	太田*		
木	B	一瀬	A	小西
	C	山口	D	中村
	F	小西	漢字C	山口
	漢字E	中村	Computer	岡澤*
金	A	平瀬	B	中村
	E	早川	C	早川
	F	中村	口頭	峯*
	漢字D	太田*		

(小立野キャンパス)

曜日	1時限		2時限		3時限		4時限	
	クラス	教官	クラス	教官	クラス	教官	クラス	教官
月	A	浅野	B	浅野	C	鎌田	D	鎌田
火	B	太田*	C	畠田谷	E	藤田	A	パリハワダナ*
水	D	鎌田	漢字B	鎌田	A	越野	B	越野
木	D	鎌田	E	櫻田	C	笹原	A	笹原
金			A	寺下	B	寺下		

v) 平成12(2000)年度後期 10月12日(木)~2月26日(月)

(角間キャンパス)

曜日	1時限 (8:50~10:20)		2時限 (10:30~12:00)	
	クラス	教室	クラス	教官
月	A	平瀬	漢字F	藤田
	B	櫻田	C 2	小林*
	作文	長野*	漢字B	河内
	読解	三浦*	D	櫻田
火	F	櫻田	A	山口
	C 2	一瀬	漢字C	一瀬
	聽解	太田*	E	櫻田
	C 1	長野*		
水	A	一瀬	B	平瀬
	漢字E	早川	D	早川
			レポート	パリハワダナ*
木	A	小西	B	一瀬
	C 2	鎌田	C 1	寺下
	D	長野*	E	小西
	口頭	峯*	F	島
	Computer	岡澤*		
金	B	小林*	A	河内
	漢字D	太田*	C 1	鎌田
			E	早川
			F	小林*

(小立野キャンパス)

曜 日	1 時限		2 時限		3 時限		4 時限	
	クラス	教官	クラス	教官	クラス	教官	クラス	教官
月	A	浅野	B	浅野	E	藤田		
火	C	峯*	A	河内	B	早川	D	早川
水	D	小林*	B	越野	A	越野	E	櫻田
木	C	笛原	A	笛原	D	鎌田		
金			A	寺下	B	寺下	C	河内

vi) 平成13 (2001) 年度前期 4月12日(木)~8月3日(金)

(角間キャンパス)

曜 日	1 時限 ( 8:50~10:20 )		2 時限 ( 10:30~12:00 )	
	クラス	教官	クラス	教官
月	読解	三浦*	漢字F	藤田
	F	桜田	C 2	桜田
	A	長野*	C 1	長野*
	B	平瀬	口頭	峯*
火	E	小林	B	島
	漢字C	一瀬	C 2	一瀬
	A	笛原	C 1	笛原
	作文	長野*	D	小林*
水	レポート	パリハワダナ*	漢字B	河内
	漢字D	太田*	A	平瀬
			聽解	太田*
木	B	早川	F	敷田
	D	一瀬		
	A	敷田		
	Computer	岡澤*		
	E	島		
金	C 2	早川	D	小西
	F	小西	漢字E	早川
	E	桜田	C 1	桜田
	B	小林*	A	古本

(小立野キャンパス)

曜 日	1時限		2時限		3時限		4時限	
	クラス	教官	クラス	教官	クラス	教官	クラス	教官
月	A	浅野	B	浅野	E	藤田	D	櫻田
火	C2	山口	D	山口	B	河内	A	河内
水	C1	長野*	C2	長野*	A	越野	B	越野
木	D	峯*	A	寺下	E	古本	C2	古本
金	A	平瀬	B	寺下	C1	寺下	E	小林*

vii) 平成13(2001)年度後期 10月12日(金)～3月6日(水)

(角間キャンパス)

曜 日	1時限 (8:50～10:20)		2時限 (10:30～12:00)	
	クラス	教室	クラス	教官
月	A	長野*	B	峯*
	F	櫻田	D	櫻田*
	読解	三浦*	E	島
			漢字F	藤田
火	D	小西	C1	小西
	漢字C	一瀬	B	笹原
	E	櫻田	A	一瀬
			C2	櫻田
水	B	櫻田	A	越野
	C2	笹原	漢字B	河内
	レポート	パリハワダナ*	C1	笹原
			作文	長野*
			口頭	峯*
木	B	一瀬	F	敷田
	C2	早川	A	河内
	Computer	岡澤*	漢字D	太田*
	C1	長野*		
	聴解	太田*		
金	F	古本	E	古本
	漢字E	早川	D	早川
			A	苗田

(小立野キャンパス)

曜 日	1 時限		2 時限		3 時限		4 時限	
	クラス	教官	クラス	教官	クラス	教官	クラス	教官
月	C1	浅野	A	浅野	D	藤田		
火	A	平瀬	B	平瀬	D	河内	C2	河内
水	C2	浅野	B	浅野	A	山口	C1	山口
木	D	峯*	B	寺下	A	平瀬		
金	A	長野*	C2	寺下	C1	寺下	B	越野

viii) 平成14(2002)年度前期 4月12日(金)～8月5日(月)

(角間キャンパス)

曜 日	1 時限 (8:50～10:20)		2 時限 (10:30～12:00)	
	クラス	教官	クラス	教官
月	A	長野*	D	小西
	B	パリハワダナ*	漢字B	河内
	読解	三浦*	漢字F	藤田
	聽解	太田*		
火	A	苗田	B	越野
	C2	一瀬	E	島
	F	櫻田	漢字C	一瀬
	口頭	峯*	作文	長野*
水	B	平瀬	A	平瀬
	C1	笛原	C2	浅野
	漢字D	太田*	D	笛原
木	B	一瀬	A	越野
	D	早川	C2	敷田
	Computer	岡澤*	F	古本
	C1	敷田	漢字E	早川
	E	古本		
金	A	櫻田	C1	寺下
	F	山口	E	櫻田
	レポート	パリハワダナ*		

(小立野キャンパス)

曜 日	1 時限		2 時限		3 時限		4 時限	
	クラス	教官	クラス	教官	クラス	教官	クラス	教官
月	A	浅野	B	浅野	D	藤田		
火	C2	古本	B	古本	A	河内	C1	河内
水	D	早川	A	早川	C2	櫻田		
木	B	峯*	D	寺下	C1	寺下	A	平瀬
金	A	長野*	C1	長野*	C2	河内	B	苗田

### 3.1.5.4 評価方法・成績

#### a. 単位の認定

総合コースでは、すべての開講科目において成績評価と合格・不合格の判定を行っている。金沢大学においては、総合コースの授業は単位として認定されないので、合否の判定は学生が次のレベルに進級できるかどうかを決定するために行われる。

金沢大学と短期の交換留学の協定を結んでいる協定校の中には、総合コースの授業を単位として認定している大学もあるので、その場合は学生の必要に応じて受講証明書や成績証明書を発行している。

#### b. 合格の条件（出席について）

合格するためには、登録しているクラスの全授業日数の3分の2以上に出席することが必要である。（3分の2未満の場合は合格できない。）ただし、留学生センターが正当と認める理由によって十分な出席ができなかった場合は、出席が3分の2未満でも、総合的に合格点に達すれば合格となる。

30分以上の遅刻3回は1回の欠席、45分以上の欠席2回は1回の欠席とみなされる。

上記の取り決めについての説明は、日本語版・英語版・中国語版を作成・配布して学生に周知徹底を図っている。

#### c. 成績評価と合格判定

成績評価は、「出席点」「平常点」（小テスト、宿題などの提出物、授業中のクラス活動への参加度、など）「定期試験」（中間試験と期末試験）によってなされる。この3つの基準の総合評価における割合は次のとおりである。

＜日本語クラスA～Dレベル／漢字クラス＞

出席点：平常点：定期試験=10：20：70

＜日本語クラスE・Fレベル／技能別クラス＞

出席点：平常点：定期試験=10：30：60

上記のように算出された総合得点は、次のように評価・判定される。

総合得点	評価	判定
80~100	A	合格（→ 次学期は一つ上のレベルに進級できる）
70~80未満	B	
60~70未満	C	
0~60未満	D	不合格（→ 次学期は現在のレベルから受講する）

### 3.1.5.5 問題点

#### a. コースの到達目標（日本語クラス上級レベルの問題）

総合コースの到達目標は、コース設立当初、日本語能力試験の2級合格程度と定められていた。しかし現在では、これは学生の実情と合わなくなってきた。上級クラス（E・F）には、毎学期すでに2級、1級を取得した学生も何人か在籍している（全員がそれ相当の日本語力を保持しているとは限らない）。これらの学生が上級クラスで学ぶべきことは何かということが、今一つ明確になっていない。その結果として、Fを修了した学生が、表1に掲げたFレベルの到達目標：「大学や大学院での研究活動の基盤となる実践的日本語力」を十分習得しているかというと、全員習得しているとは言い難いのが実情である。E・Fレベルの到達目標と学習内容を明確に定め、それにふさわしい教材も開発していかなければならぬ。

#### b. 短期留学生の問題

留学生センター所属の短期留学生—特にKUSEPの欧米の学生—は、彼等に特徴的な日本語学習上の困難を抱えている。一つの問題は、日本式学習形態への不適応である。欧米の大学における語学クラスの学習形態に慣れた学生にとっては、日本式学習形態は—90分授業に参加するだけでも—苦痛に感じられることさえあり得る。もう一つの問題は、来日前の日本語学習と、総合コースにおける学習との連結の問題である。海外（特に欧米）における日本語教育は、総合コースにおける日本語教育とはコースデザイン、使用教科書、教授法などが大きく異なることが多いため、海外で日本語を学習してきた学生たちは、そのギャップに悩むことになる。たとえば、海外で「日本語初級」を履修してきた学生たちは、総合コースでは当然中級を履修できるものと信じているが、海外の大学における「初級」と総合コースの「初級」は完全に対応してはいないため、必ずしも希望するレベルを履修できなくなる、といった問題が起こる。

コース開設2年後に「日本語クラス」の一つとして新たに「C1（初中級）」というレベルを設けたのは、この問題に対処するためであった。C1レベルの開設により、初級から中級への移行は以前よりかなりスムーズに行われるようになったが、他の問題は依然として解

決していない。

これらの問題を改善するためには、海外の協定校の日本語教育の実情をよりよく把握し、学生たちが総合コースで直面する学習上の困難をより正確に理解する必要がある。

### c. 学生のニーズの多様化

総合コースの最大の問題は、「日本語学習に対して異なるニーズを持つ学生たちが同じコースで学んでいる」ということである。一方には、日本語の他に専門を持ち、その学習・研究活動の傍ら日本語を学習する学生（大学院生、研究生など）があり、他方には、日本語が必修であり滞日期間中は日本語学習にその大部分の時間を割くことができる学生（留学生センター所属の学生—KUSEP、日本語・日本文化研修コース、日韓共同理工系学部留学生コース及び日本語研修コースの学生—）がいる。前者の学生たち、特に理系の専門を持つ学生たちは、専門分野の学習・研究活動が忙しく、日本語クラスに継続的に出席することがなかなか難しい。また自宅学習に割くことができる時間も、後者の学生に比べかなり少なくならざるを得ない。

小立野キャンパスではこのタイプの学生が大多数を占めるため、ときにクラス運営が困難になることもあるが、反面、殆どの学生が同じニーズと問題を抱えているという意味では、対処もしやすい。ところが角間キャンパスにおいては、上記の2つの異なるタイプの学生たちが同じ日本語コースのクラスで学習することになる。その結果、他に専門を持つ学生たちにとってはどうしても負担が重くなりがちで、脱落者が出ることもしばしばである。

それぞれのニーズに合ったコースを作ることが理想的だが、現状では教師の人員にその余裕がないため、現在のコースでなんとか全員のニーズにできるだけ応えていくしかない。そのためにはどのような学習内容・教授方法を提供するのがよいのか、それを具体的に検討するのが現在の最大の課題である。

### ※補足説明1：夏期・春期特別補講

#### a. 開講の趣旨

総合日本語コースが金沢大学の正式な日本語補講のクラスであるが、長期休業期間中の日本語能力の維持・発展のため、夏期休業、春期休業の期間にそれぞれ、夏期日本語特別補講および春期日本語特別補講を行ってきた。

#### b. 開講期間・コマ数・開講レベル

期間は、夏期が4週間、春期が3週間程度で、だいたい週3回開講される。主に総合コースの初級、中級レベルのものを開講している。上級レベルの留学生は自主的に学習できるであろうという理由で開講していない。学期末が近くなると、補講を希望するかどうか総合コースに在籍する学生にアンケートをとり、ある程度の参加者が見込まれる場合にのみ開講する。

### c. 履修資格

学期中の総合コース履修者については、原則として前学期在籍したクラスと同じレベルのクラスを履修するが、これは絶対の条件ではない。学期中の通常のクラスにおいては履修学生が多いため、クラス参加の条件を厳しくしている（複数レベルに渡る履修、学生のレベルと異なるレベルのクラスの履修などの制限）が、夏春補講についてはやや条件を緩くしている。例えば、学生の意欲に応じて複数のクラスの履修を許可したり、学期中のクラスを履修していなかった学生でも希望者には受講を許可したりしている。

### d. 教授内容

前学期学習したことを十分に身に付け、その運用力を高めることを目的とする。したがって、原則として新しい文法項目の導入などは行わない。

### e. 意味・役割

この特別補講の意味・役割は、大きく分けて次の二つにまとめられる。

1) 長期休暇中の日本語力の維持

2) 成績優秀者について、学期中の総合コースにおける飛び級の手助けをする。

レベル移動の手続きについては3.1.5.2 e. ii) で述べたとおりであるが、夏春補講は「上へのレベル移動」を実現する上で大きな役割を果たす。成績優秀者の中には、長期休業期間中の自習によって次学期、いわゆる飛び級をすることが可能になる学生がいるが、彼等がそれを完全な自力だけで実現することはかなり難しい。しかし夏春補講を履修することによりそれは十分可能になる。これまでの実例としては、この特別補講を履修することによりB修了→D進級、A修了→C2進級というレベル移動を果たした学生がそれぞれ1名ずついた。

### f. 成績評価

総合コースの補助として位置づけられているので、成績評価・合否の判定は行わず、受講証明書、成績証明書なども発行していない。

### g. 教育活動実績

現在までに実施した特別補講の開講期間・開講クラス・週あたりコマ数を表3.1.5-9に示す。履修者数は各クラス2, 3名～7, 8名であるが、長期休業期間中であるため旅行・一時帰国・アルバイトなどの理由により受講を中断する学生が多く、開講期間を通しての正確な履修者数を把握することは難しい。

表3.1.5-9 特別補講の開講期間・開講クラス・週あたりコマ数

	平成9 年度春 3.2~ 3.26	10 年度夏 8.24~ 9.18	10 年度春 3.1~ 3.29	10 <sup>18</sup> 年度春 3.17~ 3.31	11 年度夏 8.9~ 8.27	11 年度春 3.6~ 5.3	12 年度夏 8.28~ 9.22	12 年度春 3.12~ 3.30	13 年度夏 8.20~ 9.14	13 年度春 3.11~ 3.29	14 年度夏 8.19~ 9.13	
開講 クラス	コマ数 ／週 角 <sup>1)</sup> 小 <sup>2)</sup>											
A	4 4	3 3	3 3			3	3	3	3 3	3 3	3 3	3
視聴覚A					1 1	1 1						
B	4 4	3 3	3 3			3	3	3 3		3 3	3 3	3
視聴覚B					1 1	1 1						
C	4 4	3 3	3 3	5	3	3	3 3					
視聴覚C					1 1	1 1						
漢字C					1	1						
C1								3	3			3
C2									3 3	3		
D			3 3				3	3 3				3

1) 角間キャンパス 2) 小立野キャンパス

### ※補足説明2：全学向け日本語補講

#### a. コース概要

金沢大学留学生センターが発足する以前は、学内措置で設置された金沢大学留学生教育センターによって留学生に対する日本語補講クラスが行われていたが、平成7年10月に留学生センターが発足したとき、センターはその業務を「全学向け日本語補講」（以下「日本語補講」と略記）としてそのまま引き継いだ。日本語補講は、平成10年度後期に「金沢大学留学生センター総合日本語コース」として全面的に再編されるまで、6期3年間続けられた。

コースの目的はもちろん留学生の学習・研究活動のための日本語能力養成であるが、当時は現在と比べ留学生数も少なく、また現在総合コースで多くの学生を受け入れている金沢大学短期留学プログラム（KUSEP）も、日韓共同理工系学部留学生コースも存在していなかつたため、規模もクラスの多様性も現在のコースより小さかった。

<sup>18</sup> 遅れて来日したKUSEPの学生5名のために、通常の特別補講とは別に、彼等のみを対象として開講された。

## b. カリキュラム

### i) クラスの種類とコマ数

基本的には通常クラスと漢字クラスから構成され、技能別クラスも学期によっては少ながら開講されていた。キャンパスは現在と同様、角間キャンパスと工学部キャンパス両方で開講されていた。

総合コースは現在 A から F までの 7 レベル（C レベルは C 1 と C 2 の 2 レベルとなっているため）編成であるが、日本語補講は A から E までの 5 レベルであった。ただし、注意を要するのは、日本語補講の A（初級入門）レベルは総合コースの A および B に相当するということである。当時の学生達は、現在の学生が 2 学期で修めている内容を 1 学期で学んでいたことになる。開講クラスと週あたりコマ数を表 3.1.5-10 にまとめて示す。

表 3.1.5-10 全学向け日本語補講の開講クラスと週あたりコマ数

通常クラス	コマ数／週	漢字クラス	コマ数／週
A（初級入門）	5		
B（初級）	4	F（漢字初級）	1
C（中級入門）	3		
D（中級）	3	G（漢字中級）	1
E（上級）	2	H（漢字上級）	1

基本的には上記のような編成で開講したが、コマ数は学期によって変動があった。小立野キャンパスにおいては、通常クラスの上級クラスは開講されない学期があり、また漢字クラスは、初級・中級・上級というレベル別には開講されず、「混合」という 1 つのクラスにまとめて開講されることが多かった。具体的な実施状況については、表 3.1.5-11 を参照のこと。

### ii) プレースメントテスト

現在同様、プレースメントテストは初級用と中級用の 2 種類があった。総合コースでは学生の自己申告でどちらを受けるか決めているが、日本語補講では受験者すべてを面接し、その結果によってどちらを受けるか受験者に指定していた。面接は非常勤講師も動員して行い、コスト的にも時間的にも負担が大きかったため、現在の自己申告制に変えられた。

### iii) 使用教科書

テキストは A クラスのみ『新にほんごの基礎（I, II）』（スリーエーネットワーク）を

固定して使っていたが、B レベル以上のクラスではテキストは固定しておらず、学期前に担当予定教官が会議を開き、テキストを決定していた。

#### c. 評価

評価は現在同様、学期終了後に各担当教官が会議を開き、出席、定期テストの結果などから総合的に判断していた。ただ、現在のようにすべてのレベルで同じ基準を用いて、かつ数値化して判断していたわけではなかったため、多少主観が入りうる余地があった可能性はある。

#### d. 教育活動実績

以下に各学期の開講クラスと週あたりコマ数、履修者数<sup>19</sup>を示す。

表3.1.5-11 全学向け日本語補講の開講クラスと週あたりコマ数、履修者数

	平成7年度 後期	8年度 前期	8年度 後期	9年度 前期	9年度 後期	10年度 前期	合計
開講クラス	コマ <sup>3)</sup> 履 <sup>4)</sup>	履 <sup>4)</sup>					
A (初級入門)							
角 <sup>1)</sup>	5 4	5 6	5 4	5 4	5 4	5 2	24
小 <sup>2)</sup>	5 8	5 5	5 9	5 13	5 13	5 7	55
B (初級) 角 <sup>1)</sup>	4 7	4 5	4 13	4 7	4 8	4 12	52
小 <sup>2)</sup>	4 17	4 7	4 9	4 15	4 15	4 16	79
C (中級入門)							
角 <sup>1)</sup>	3 14	3 8	3 6	3 14	1 14	3 9	65
小 <sup>2)</sup>	3 12	3 15	3 7	3 6	3 11	3 9	60
D (中級) 角 <sup>1)</sup>	2 16	2 8	3 10	3 6	3 6	3 13	59
小 <sup>2)</sup>	2 11	2 8	3 11	3 8	3 12	3 7	57
E (上級) 角 <sup>1)</sup>	2 16	2 7		2 5	3 4	3 9	41
小 <sup>2)</sup>	2 6	2 3					9
F (漢字初級)							
角 <sup>1)</sup>	1 7	1 2	1 6		1 1	1 7	23
小 <sup>2)</sup>				1 7		1 4	11
G (漢字中級)							
角 <sup>1)</sup>	1 7	1 4	1 7			1 12	30
H (漢字上級)							
角 <sup>1)</sup>	1 13	1 3	1 5				21
H2 (漢字混合)							
小 <sup>2)</sup>	1 6	1 2	1 6				14
S (初級会話)							
角 <sup>1)</sup>			2 ?				?
小 <sup>2)</sup>			2 5				5
I (作文) 角 <sup>1)</sup>		1 7					7
小 <sup>2)</sup>		1 1					1
総履修者数 (延べ)							
角 <sup>1)</sup>	84	50	51	36	37	64	322
小 <sup>2)</sup>	60	41	47	49	51	43	291

1) 角間キャンパス 2) 小立野キャンパス 3) 週あたりコマ数 4) 履修者数

<sup>19</sup> 中途脱落者は含まれていない。

### 3.1.6 全学的貢献

#### 3.1.6.1 教養科目としての日本語B

学部留学生に対する教養教育としての日本語は、当初は教養部の日本語担当の教官によって開講されていたが、教養部の廃止に伴い教養教育科目は全学出動方式となり、新たに日本語・日本事情系所属の教官によって開講されることとなった。

しかし、日本語・日本事情系所属の教官は9割以上が留学生センター教官であり、教養的科目としての日本語クラスは、実質的に留学生センターの開講科目といってよい。

日本語・日本事情系所属の他学部教官としては、工学部の留学生専門教育教官があるが、これはたまたま専門が重なっていたことによるものであり、学部の留学生専門教育教官が日本語・日本事情系に所属するとは限らない。

教養の日本語Bは留学生にとって必修科目である。1年次に必修4単位（4コマ）を取らせようとした場合、他の科目と曜日時間が重なる可能性を考慮に入れると、各学期最低3コマは開講する必要があると考え、毎学期3コマ開講している。（平成12年度後期の場合は、担当予定の教官が学期開始直前に他大学に移るという事態が生じ、手当が出来ず、やむなく2コマのみの開講となった。）

教養部が廃止になってから以降の日本語Bの担当は以下の通りである。

平成8年度	前期	岡田英俊 3コマ、非常勤講師1コマ
	後期	岡田英俊 2コマ、非常勤講師1コマ
平成9年度	前期	峯正志 2コマ、三浦香苗 1コマ
	後期	峯正志 2コマ、三浦香苗 1コマ
平成10年度	前期	峯正志 2コマ、三浦香苗 1コマ
	後期	峯正志 2コマ、留学生専門教育教官 1コマ
平成11年度	前期	峯正志 2コマ、留学生専門教育教官 1コマ
	後期	峯正志 2コマ、留学生専門教育教官 1コマ
平成12年度	前期	峯正志 2コマ、留学生専門教育教官 1コマ
	後期	峯正志 2コマ
平成13年度	前期	峯正志 2コマ、ルチラ・パリハワダナ 1コマ
	後期	峯正志 2コマ、長野ゆり 1コマ
平成14年度	前期	峯正志 2コマ、ルチラ・パリハワダナ 1コマ
	後期	峯正志 2コマ、長野ゆり 1コマ

#### 3.1.6.2 教養的科目としての「ドイツ語A2」・「ドイツ語A4」

担当者：ビットマン ハイコ

2002年 前期より

### 3.1.6.3 教養科目としての日本事情

学部学生に対する教養的科目中、テーマ別科目（社会）として、留学生センターは1997年以来、毎年前期と後期に「日本事情」を出している。以下はその内容である。

#### a. 日本事情1（前期） 担当：岡澤、八重澤

受講生は金沢大学に入学したばかりの学部1年生の留学生で、毎年10名程度である。日本人の生活、社会について、講義、調査、発表及びレポート作成を通して学ぶ。

##### i) 授業の目標

留学生がこれから暮らしていかなければならない日本の社会、人々の生活について興味を持ち、理解を深める事を目的とする。

##### ii) 授業の概要

日本の社会、人々の生活について、毎回異なるトピック（日本の学生の日常生活、留学生の生活、ジェンダー、人口構造と社会の動き等）の講義をする。学生は、日本に来て自分自身が日本人の生活や社会について興味を持ったことについて調べ発表をし、レポートとして提出する。

##### iii) 評価

出席、発表、レポートを総合して判定。

#### b. 日本事情2（後期） 担当：三浦香苗

受講生は、学部学生（日本人と留学生）と留学生センター所属の留学生、合わせて45名程度である。小グループでのディスカッションを行う。

##### i) 授業の目標

この授業は、日本人学生にも開放する。ディスカッションを通して、留学生と日本人学生が互いに異文化に触れ、日本と世界に対する広く深い理解をもつようになることを第一の目的とする。第二の目的は、テーマに関する自分の見解を他者にわかりやすく話せるようになることである。三つのタイプのレポート（感想文、報告文、研究レポート）の提出も課せられる。これらすべての活動を通して、大学で学ぶための基礎力につけることが、この授業の大きな目的である。

##### ii) 授業の概要

このクラスは、留学生と日本人学生の混成クラスである。教師が1回の授業につき1テーマを設定し、予習用の参考資料（日本語・英語対訳）を与える。学生は参考資料を予習し、授業に臨む。授業では、小グループに分かれて、各々のグループで議長と書記を決め、自由に討論する。その後、各議長がクラス全体に対して小グループで行った討論の内容を報告し、全体で話す。各書記は討論の報告書を次回までに提出する。討論の

テーマは、日本人の“Yes”は“No”か、差別、謝り方、男らしさ・女らしさ、社会に出て成功するために何が必要か、デート代は男女どちらがもつか等である。期末には研究レポート（討論したテーマに関連した小テーマを自分で設定したもの）が課せられる。研究レポートの書き方については講義を行う。

### iii) 評価

試験は行わず、期末レポート、小レポート（2回程度）、出席（積極的参加）の総合判定である。

#### 3.1.6.4 関連科目：教育学部の教員養成

金沢大学教育学部では、平成8年度の学部改組に伴い、学校教育教員養成課程の学生を対象にした、日本語教育副専攻に相当する資格を認定するためのカリキュラムを開始した。

さらに、平成12年度の改組では、このカリキュラムを更に発展させ、日本語教育主専攻に相当する資格の取得を目的とした、人間環境課程「日本語・日本文化教育コース」を新しく開設した。これは、日本語教育主専攻に相当する資格を取ることができる大学が首都圏、関西圏に集中し、日本海側にはこれまでまったくなかったことを是正する大きな改革であった。

このコースのカリキュラムは、文部省が1985年に示した「日本語教員の養成について」の標準的内容と必要単位数を満たしている。

いずれの改組においても、そのカリキュラムの実現は教育学部教官だけでは難しく、他学部および本センターの教官の協力が求められた。本センター教官の担当しているのは「日本語の教授法に関する知識・能力」に関連する専門科目の授業である。

平成8年度の改組では、平成9年度の後期から本センター教官の授業が始まっている。（三浦教官による日本語教育学基礎論A）

平成10年度からは日本語教育基礎論B（峯教官）も始まり、この二つの授業は現在まで続けて行われている。

平成12年度から新設された人間環境課程「日本語・日本文化教育コース」に対しては、平成13年度後期の日本語教育学概論Aからである（これはそれまでの日本語教育基礎論から名称が変わっただけで、内容的には同じものである）。平成13年度には日本語教育学概論Bおよび日本語教育学各論Aも始まっている。

授業実績は以下の通りである。

平成9年度

後期 日本語教育学基礎論A（三浦）

平成10年度

前期 日本語教育学基礎論B（峯）

後期 日本語教育学基礎論A（三浦）

### 平成11年度

- 前期 日本語教育学基礎論 B (峯)  
後期 日本語教育学基礎論 A (三浦)

### 平成12年度

- 前期 日本語教育学基礎論 B (峯)  
後期 日本語教育学基礎論 A (三浦)

### 平成13年度

- 前期 日本語教育学基礎論 B (峯)  
後期 日本語教育学概論 A (三浦)  
後期 日本語教育学各論 A (パリハウダナ)

### 平成14年度

- 前期 日本語教育学概論 B (峯)  
日本語教育学各論 B (長野)  
後期 日本語教育学概論 A (三浦)  
日本語教育学各論 A (パリハウダナ)

#### 3.1.6.5 その他：

##### a. 大学教育開放センター公開講座

実施期間：平成8年2月24日～3月24日

テーマ：「留学生から見た日本・金沢」

主旨：

国際化、国際交流の進展と共に、キャンパス内で留学生と接する機会が次第に増えている。石川県の高等教育機関に在籍する留学生数は平成7年11月現在で405名、そのうちおよそ3人に2人の262名の留学生が金沢大学で学んでいる。

本学で学生生活を送る留学生たちの大学生活、日常生活は、日本人学生の生活とは、大きく異なる点が多く見受けられるのは周知の通りである。留学生たちの学生生活を中心に、彼らの留学の目的と将来展望、日本人学生たちへ望むこと、また、彼らの目に映った日本の大学と大学生、更には日本の人々、社会などについて明らかにした。あわせて、平成7年4月にスタートした金沢大学留学生センターの留学生教育に担う役割を明確にし、大学の国際化について検討した。実施内容は以下の通りである。

第1回	金沢大学で学ぶ留学生	
	I 金沢大学留学生センターの発足と役割	
	II 異文化適応の問題	
第2回	留学生のための日本語	
第3回	これからのアジア	
第4回	留学生から見た日本と金沢(1)	韓国からの留学生グループ
第5回	留学生から見た日本と金沢(2)	中国からの留学生グループ
第6回	留学生から見た日本と金沢(3)	韓国、中国以外の国からの留学生グループ
第7回	国際化時代における地域と大学	
第8回	シンポジウム	

#### b. 外国語教育センター総合科目への参加

外国語教育研究センターが教養的科目として提供している「異文化理解とコミュニケーション」と題した総合科目に1999年からルチラ・パリハワダナが1回の講義を担当する形で参加している。99年度、及び2000年度は「待遇表現と異文化理解」をテーマに日本語教育の見地から講義を行った。2001年度は「断り表現と異文化理解」をテーマに言語形式の裏に隠されている文化的価値観の相違によって生じる誤解などについて、日本語教育の試みなども紹介しながら、講義を行った。2002年度は同テーマについて、言語・文化によって異なる聞き手への配慮の仕方について、日本語の断り表現の分析を元に講義を行った。

総合科目を通して外国語教育研究センター教官との交流の場が持てる上、日本人学生に日本語教育の見地から異文化理解とコミュニケーションについて講義を行う有意義な機会が得られる。総合科目の講義担当を今後も続けていきたいと考えている。

### 3.2 専任教官・非常勤講師の時間数

表3.2-1 専任教官・非常勤講師のコマ数 (1コマ=90分)

上段：コマ/週 下段：総時間数 (1コマ=1.5時間)

	総合日本語コース 及び、日本語補講*				日本語研修 コース		日韓理工系 コース		日本語・日本 文化研修コース		他部局 の授業		学期別 合計コマ数	
	専任		非常勤		専任	非常勤	専任	非常勤	専任	非常勤	専任	専任	専任	非常勤
	角間	小立野	角間	小立野										
H 7 年度 後期	0	0	19	17	9	12							9	48
	0	0	428	383	230	306			0	11			230	1,128
H 8 年度 前期	6	5	14	13	10	10							21	37
	126	105	294	273	255	255			0	11			486	833
H 8 年度 後期	3	4	17	14	13	12							20	43
	68	90	383	315	332	306			0	12			490	1,016
H 9 年度 前期	4	3	15	13	11	22					4		22	50
	84	63	315	273	281	561			0	12	84		512	1,161
H 9 年度 後期	2	1	18	16	9	16					5		17	50
	42	21	378	336	230	408			0	15	105		398	1,137
H 10 年度 前期	3	3	17	13	10	15					5		21	45
	63	63	357	273	255	383			0	12	105		486	1,025
H 10 年度 後期	11	1	19	16	17	18					5		34	53
	248	23	428	360	434	459			0	15	105		810	1,262
H 11 年度 前期	10	3	21	15	15	18					4		32	54
	225	68	473	338	383	459			0	6	90		766	1,276
H 11 年度 後期	9	3	25	15	12	18			2		6		32	58
	203	68	563	338	306	459			45	27	135		757	1,387
H 12 年度 前期	8	2	23	16	11	19			2		5		28	58
	180	45	518	360	281	485			45	17	113		664	1,380
H 12 年度 後期	12	2	23	15	11	16	5	5	3		6		39	59
	270	45	518	338	281	408	98	98	68	24	135		897	1,386
H 13 年度 前期	12	4	23	16	12	14			3		6		37	53
	270	90	518	360	306	357			68	17	135		869	1,252
H 13 年度 後期	10	2	25	16	6	17	4	8	4		8		34	66
	225	45	563	360	153	434	90	180	90	26	180		783	1,563
H 14 年度 前期	9	3	26	15	9	14			4		7		32	55
	203	68	585	338	230	306			90	33	158		749	1,262
H 14 年度 後期	6	2	28	17	5	17	4	7	4		8		29	69
	135	45	630	383	128	434	90	158	90	24	180		668	1,629
合計 コマ数	105	38	313	227	160	238	13	20	22	—	69		407	798
合計 時間数	2,342	839	6,951	5,028	4,085	6,020	278	436	496	262	1,525		9,565	18,697

\* 平成7年度から平成10年度前期までは全学向け日本語補講に関するデータ、平成10年度後期からは総合日本語コースのデータをまとめて記載してある。

### 3.3 教育活動の評価

以上の教育部門の活動の動向をふまえると、どのプログラムも各々その特性を生かして積極的に運営され、質の高い、キメの細かい指導に向けての努力がなされていることを指摘できるが、一方で、克服しなければならない各プログラム／コースの問題点の存在もまた明らかとなった。

それは、以下のようなもので、大きく三つに分けられる。

第1は、文部科学省の留学生受け入れ制度・政策に関わる問題、すなわち、受入数の見通しを立てるのが困難であること、奨学金給付の低迷、制度化されたプログラムの硬直化等の問題である。

第2は、本センターを越えて、金沢大学として対応し解決するべき問題である。すなわち、センター専用施設がないことによる教室や施設面での不便の解消、本学としての受け入れ留学生数の目標設定、日本人学生との共学の制度化、本学へのUターン留学に備えた体制の整備、地域貢献、本センターの行う日本語授業の単位化、専門教育とのつながりを明確にした到達目標の設定、各学部の専門教官との連携の強化等の問題である。

第3は、本センター内で対応・解決するべき問題である。すなわち、コース生のニーズの多様性への対応、母国と日本の学習システムの違いによる留学生の不適応への対応、協定校との密な連絡システム構築、専門につながる日本語教育方法と教材開発の必要性、専門日本語の指導方法開発、日本人学生との共学や交流の可能性の検討等の問題である。

第3の問題の解決には、本センターとして一層の努力が必要である。特に、本センターの中心的業務である日本語教育のシステムと内容を、「大学で行う日本語教育」にふさわしいかという観点で見直すべきである。

また、制度的な不備の改善について、全学的な働きかけや広報活動が必要である。

## 4. 相談指導部門の活動

### 4・1 留学生相談指導

留学生センターの活動のうち、「留学生交流の推進に関すること」「外国人留学生に対する修学上及び生活上の指導助言に関すること」「海外留学を希望する学生に対する修学上及び生活上の指導助言に関すること」さらに「留学生教育の調査研究に関すること」の4点が本部門に直接関連する役割であるが、その中でも活動の中心を占めるのが「外国人留学生の修学上・生活上の指導・助言」である。このような活動は、本センター設置以前の段階から、学内の部局との兼務で行われていたものが、1995年以降は学内共同教育研究施設である留学生センターの1部門として、その位置付けと機能が明確化されて受け継がれた。

本センターの設置により、それ以前と比較すると、留学生本人に限らず、留学生とかかわる日本人の側からの相談の増加が認められる。

#### 4. 1. 1. 留学生に関わる相談・助言・情報提供

##### 4. 1. 1. 1. 留学生的相談に関する活動状況

留学生からの相談の内容を大別すると、次の5領域になろう。「修学上の問題」、「生活適応上の問題」、「経済的問題」、「身体・精神的問題」、「その他」である。

5領域中、一貫して最も多くの相談があるのが「修学上の問題」であり、中でもその解決に多くの時間を費やし、慎重な対応が必要とされるのが、「学位の取得に関するもの」である。具体的な内容としては、指導方針を巡る文化的差異／研究室の指導方針を含む研究環境の問題／学力・語学力、等についての相談である。その他、「学習態度・学習についての考え方のギャップ」「日本の授業に対する要望」「授業の選択や履修方法」などが「修学上の問題」に含まれる。

また、「経済的問題」では奨学金の選考を巡る問題／授業料免除、等がその内容であるが、奨学金・授業料免除は、選考や決定の公平性を巡って毎年のようにくり返される相談の一つである。それと同時に、奨学金を受給できない／期待していた授業料免除が受けられない留学生たちの経済面を支えるための対策—アルバイト探しをはじめとする経済対策の立て直しが次の段階の相談となって行く。また、近年目立つ相談に、任意保険に未加入の車で事故を起こし、その賠償金の支払いをどうしたらよいかというものがある。

「身体的・精神的諸問題」は、カウンセリング・教育相談・異文化理解についての専門性が必要とされる内容である。カルチャー・ショック／ホームシック／スチューデント・アパシー／ディプレッション／対人関係／等であり、問題の程度にもよるがその解決には一定の期間を要し、専門的に対処しなければならない。これ以外の他の4領域に分類される相談の多くが、1回限りのアドバイスや問い合わせに答える、または良い聞き手となることで解決がなされるものとは対照的である。更に、「身体的・精神的諸問題」は症状によって病院など、

もっと専門的な機関へと繋ぐ必要も生じる。

「生活適応上の問題」では，在留資格／国民健康保険料／日本での衣・食・住をはじめとする情報提供が主であり、「その他」の内容で多くを占めるのは、留学生の家族の問題である。留学以前の海外に居る段階から、専門領域や指導教官または留学後の奨学金についてのメールによる問い合わせが最近増加する傾向にある。

#### 4. 1. 1. 2. 生活指導オリエンテーションの実施

金沢大学で留学生活を始めるに当たり、直面する問題解決のための人的ネットワークの理解などの留学生に必要な情報提供を目的として、4月・10月の授業開始前にそれぞれ生活指導オリエンテーションを実施している。内容は以下のとおりである。

- ①留学生にとっていわゆる「重要な他者」となるスタッフ—留学生センター教官、各学部・研究科の留学生受入れ関係教官、留学生課職員、各学部留学生担当職員—の紹介
- ②カウンセリング・アドバイジングなどの心身の健康に関する情報や授業料・奨学金・国民健康保険・医療費補助など、留学生活全般にわたる情報
- ③学内外の留学生支援組織の紹介
- ④附属図書館など留学生の利用が多い学内施設の見学

なお、生活指導オリエンテーションは全学の留学生を対象としている。

#### 4. 1. 1. 3. 指導教官懇談会

留学生を受け入れた日本人の側からの相談で最も多いものが、留学生の指導教官からのものである。留学生の宿舎に関するアドバイスなど一回限りの情報提供もあれば、学位取得に関わる複雑で時間を要する問題など、相談内容は多岐にわたる。指導教官は留学生にとって最も「重要な他者」であり、学業・研究面以外の接触も多く、とりわけ理系で学ぶ留学生にとってこの傾向は著しい。

本センターでは、留学生の指導教官の方々から寄せられた問い合わせに対して、共通に回答できる情報の提供と、留学生との指導の中で体験された事柄についての意見を伺うために、指導教官懇談会を開催し、意見交換を行っている。

第1回目は、1998年12月、医・薬・工・理の各学部および大学院の、主として理系の指導教官のみを対象に懇談会を開催した。指導教官以外の出席者は、留学生センター長・センター教官（相談指導部門）・留学生専門教育教官（工学部・自然科学研究科）・留学生課である。学位を取るまでには長期滞在が必要な留学生の経済的な側面に議論が集中し、奨学金等を中心とした意見交換がなされた。

第2回目の指導教官懇談会は、2002年7月に、全学の指導教官を対象にして2回に分けて開催された。指導教官以外の出席者は、第1回目の出席者に加えて、留学生センターの全教官・経済学部海外交流室教官及び学生部の各課からの教職員である。留学生を研究生として受け入れる際の留意点、学内外で利用できる留学生支援についての情報提供などを行った。

指導教官からの意見で最も多かったものは第1回目同様、経済的側面の問題—利用できる貸し付け金制度・授業料免除の基準についてであり、担当部局からの説明や指導教官からの要望が出された。更に、留学生の受入れに対する大学としてのコンセプトについても活発な意見交換がなされた。

#### 4. 1. 2 留学生相談への対応と学内協力体制の構築

留学生本人および留学生に関連する相談を担当するのが、留学生センター相談指導部門である。また、留学生の受入れ関係教官（留学生専門教育教官・海外交流室教官）が配属されている工学部・自然科学研究科・経済学部でも、学部の特色を踏まえた相談を行っている。留学生へのカウンセリング・アドバイジングの適切性や専門性を保証するために、本センター発足時より、留学生相談における事例研究や検討課題などについて、毎月行われるフロントライン・ミーティング（仮称）は欠かすことのできないものである。更に、部局を越えた全学的な対応が必要とされる場合には、留学生センター委員会の中の留学生相談・指導専門委員会を招集し、その都度検討している。なお、留学生相談・指導専門委員会（2001年度までは留学生生活相談専門委員会）はセンターが設置された初期の約2年間は毎月1回、定期的に行われ、チューター選定の問題、大学主催行事への参加希望留学生の優先順位の基準作りなど、現在の諸規則の基本的なものの多くがこの時期に検討されている。

年々増加する留学生と共に、相談件数も増えている。一回限りの情報提供やアドバイジングをはじめ数回にわたる面接を必要とする専門的なカウンセリングまで、全ての相談を含めて平均すると、留学生センター・工学部・自然科学研究科・経済学部のそれぞれの部局とも、1日平均2～4件の相談を受けている。キャンパスが二つに別れていることや留学生の問題の多様性を考慮して、週に2回、工学部相談室を非常勤のカウンセラー1名が担当することになったのが2000年からである。

また、留学生の心理的な悩みについては、早期に発見し、対処することが肝要であるものの、留学生である立場から生ずるためらい、あるいはカウンセリングそのものに対する抵抗から、相談の場へと繋がる迄には時間がかかることが多い。従って留学生に関するより多くの情報は、指導教官、留学生の多くが出席する日本語の授業を担当する日本語教育部門の専任・非常勤の教官や留学生のチューター・学生ボランティア、授業に関連する連絡をはじめ諸手続きのために接触する機会の多い留学生課・各部局の学務係のスタッフ、また保健管理センターをはじめとする医師・看護師からもたらされる。これらの人々は、留学生の抱える問題の発見者であると同時に、留学生の問題解決に向けてもキー・パーソンとなりうる人々であり、センター発足時から相談指導部門とは密接な連絡網を構築してきた。更に、法学部教官のボランティアによる法律アドバイザ体制を1997年から正式に確立し、諸問題に対処してきた。突然生じる留学生の法的問題に緊急に対応するため、刑法・民法など幾つかの専門領域の教官複数名に依頼し、問題解決を行ってきた。

その他、出身国を同じくする留学生の協力を得ることもあった。

#### 4. 1. 3 チューター制度

新たに来日した留学生に対して、指導教官の指導のもとに、大学が選定したチューターによる個別的課外学習指導を行い、留学生の学習・研究の向上を図る目的の「チューター制度」について、その実質的な充実を目指し、相談指導部門を中心に検討を重ねてきた。

留学生の受入れにあたっては、教職員だけではなく、日本人学生をも含めた全学的な協力・支援体制が必要とされたからであるが、より積極的な側面として、チューターとなる日本人学生の異文化接触・異文化体験を促進したいとの意図もあった。

チューター制度の充実については、本センターが設置される以前、すなわち学内措置による「留学生教育センター」が置かれた1993年の時点で、既にパネルディスカッションを行っている。当時の出席者は、指導教官・日本語担当講師・留学生担当カウンセラー・留学生係・チューターの日本人学生で、それぞれの立場よりチューター制度について検討したものであるが、その内容については、「金沢大学留学生教育センター紀要」第2号（1993.10）に報告済みである。その後1995年に留学生センターが設置され、チューターに関する全ての事柄が相談指導部門の担当となり、現在までに下記の取り組みを行ってきた。

- ・チューター実施要項の作成と整備
- ・チューターのためのマニュアルの作成と整備
- ・チューターの選考
- ・チューター・オリエンテーションの実施
- ・チューターに対するチューテリング全般に渡るアドバイジングとカウンセリング
- ・チューターの指導計画・経過報告等の検討と分析

中でも、チューター・オリエンテーションは、前期と後期のそれぞれに数回ずつ、2カ所のキャンパスで実施し、チューターの役割を理解し、適切なチューテリングを行えるように、その徹底を図っている。対象となる留学生のタイプやその留学目的によって、チューテリングの内容も一義的には決められず、個々の留学生の留学状況に相応しい対応が求められるからである。なお、チューテリングの過程で生じた問題点や疑問に対しては、電話やメールによる情報提供やアドバイジング等を行い、チューターへのサポートを行っている。

またこのような「チューター制度」以外のボランティア・チューターとして、自発的に留学生の日本語学習を助けたり、討論の場に加わる日本人学生のグループもあり、必要に応じて彼らに対する情報提供やアドバイジング等を行っている。

#### 4. 1. 4 日本人学生との交流活動

サークルとして承認されているグループには、K I S S (Kanazawa University International Student Station) がある。日本人学生および留学生から成るグループで、留学生をサポートするだけではなく、一緒にスポーツ大会などのレクリエーションの企画や学習活動を通じて交流を図る学生の団体で、留学生の宿舎（国際交流会館）を中心に活動している。

角間キャンパスから離れた小立野キャンパスおよびその周辺の医・薬・工学部では一時

期、自然発的にできた地球倶楽部が活動していたが、定まった活動拠点が無いこと、理系の留学生は実験等で忙しく交流活動に参加する時間的な余裕がないこと、熱心に活動していた日本人学生が卒業してしまったこと、などの理由から現在のところ目立った交流活動は見られない。

さらに、学部留学生の教養教育を受ける期間には、チューターである日本人が学習面での支援に限らず、新入生歓迎会、桜見物、旅行等の交流活動を積極的に行っていた時期もあった。出身国が同じ留学生の増加に伴い、それぞれの国ごと集まって、旅行をしたりパーティを行っており、以前のように日本人学生側が交流の企画・運営をしていた頃とは大きく様変わりしている。

従って、留学生のタイプが、長期滞在か短期滞在か、また学部学生か大学院生かによって交流へのニーズと内容が変わってくる。短期滞在と学部の留学生は日本人学生との交流を求めており、この層への交流の第一段階として、学部留学生の昼休みや授業終了後にディスカッションを行い、ニーズの把握に務めている。

#### 4. 1. 5 留学生に関する調査研究

留学生に対して適切なるアドバイジング・カウンセリングを行うためには、留学生の実態を正確に把握する必要がある。さらに相談指導全体に関わる必要な資料として、基礎的データや情報の収集のため、ほぼ2年毎に様々な調査を行ってきた。以下にそれを記す。

- ・金沢大学留学生生活実態調査 1991（留学生教育センター当時の調査）
- ・石川県内留学生生活実態調査 1995（石川地域留学生交流推進会議より依頼）
- ・金沢大学工学部・工学研究科の留学生教育・研究指導の実態について 1997
- ・金沢大学帰国留学生の調査 1999
- ・チューターについての実態調査 1999
- ・金沢大学留学生生活実態調査（現在実施中） 2002

これらの成果については、「金沢大学留学生センター紀要」で公表した他、「異文化間教育学会」等で発表し、討論を重ねている。また、留学生のカウンセリングやアドバイジング、チューター指導の手掛かりとともに改善に向けて活用していることは言うまでもない。

また、科学研究費補助金による研究代表者（「異文化理解・異文化間交流促進のための実践的研究」平成7～8年度）や研究分担者（「大学関係保育所に見る異文化接触と留学生の子育て支援方策に関する基礎的研究」平成12～14年度）として、留学生相談指導のための実践的な研究を重ねている。

その他、適時留学生の面接をはじめ留学生と多く接触する教職員等の面接を行い（未刊行）、日本での留学生活全般に対する検討資料として活用している。

#### 4. 2 学外との連携・協力

留学生に対する相談指導を適切に行うためには学外の諸機関との連携・協力は欠くことの

出来ないものである。中でも代表的な組織として以下の2つを上げることができる。

#### 国立大学留学生指導研究協議会

全国に設置されている国立大学留学生センター・指導部門の教官を中心にして1996年5月に設立された協議会であり、金沢大学留学生センター・相談指導部門も設立当初からそのメンバーである（1998～2002幹事・1999「留学生交流・指導研究」編集委員）。協議会の目的は、「国立大学における留学生指導にかかる諸問題について、情報・意見交換を行うとともに、留学生に関する研究を推進し、もって国立大学における留学生指導の質的向上を図る。」ことであり、e-mailによる情報交換によって、留学生の指導指針を得たことも多い。さらに、現在のところ定例ともなっている5月（於；東京大学）、12月（於；大阪大学）の総会とそれ以外にも各大学主催の研究会などがあり、留学生の相談指導に対する有益な情報が得られる場となっている。

本学留学生センターでは、この協議会のメンバーと共に、2回の不定期な会議を金沢大学で開催した。1回目は、短期プログラムを本学でも行うにあたり、既に実施している大学からの意見、助言等を聞く会を1997年12月に持った。2回目は、2001年3月に行った「国立大学留学生指導懇話会」で、日本人学生の海外派遣を促進させるための工夫など、いくつかのテーマについて活発に意見を交換した。

平成16年度以降、国立大学は大きく変貌を遂げることが予定されているが、留学生指導に関わる者にとって、この協議会の果たす役割は、益々大きく重要度を増してくる。

#### 石川地域留学生交流推進会議

金沢大学が位置する地域には、大学以外にも留学生を支援する多くの団体がある。地域にある幾つかの大学を中心に、官民一体となって留学生受入れの体制を整えるための組織として石川地域留学生交流推進会議があり、地方自治体、経済団体、国際交流団体などから構成されている。その事業内容として、「奨学金等の援護体制の充実」「宿舎の確保」「ホームステイ・ホームビジットの機会の拡充」「地域住民との各種交流事業の促進」などがあげられる。また、文部省（当時）による「留学生交流モデル地域」に指定（平成10～12年の3年間）され、そのモデル地域推進事業として「帰国外国人留学生との友好交流の推進及び留学生の受入れ促進」、「石川地域留学生住宅連帯保証事業」及び「外国人留学生におけるいしかわ国際理解講座」が実施された。

定期的に開催される推進会議には相談指導部門も出席し、地域の留学生支援の状況の把握に務めている。さらに、推進会議主催の留学生担当者研修会において、留学生の相談指導の実態について、講師として講義を担当している。

#### その他の

角間キャンパスの近くに位置する財内外学生センター金沢学生相談所とは、その立地条件をはじめ、アパート及びアルバイトの紹介や様々な相談など、その業務との関連で、留学生

センターとの結びつきは強い。国内外学生センターが主催する諸行事には、本学の留学生及びその家族、留学生センター及び留学生課のメンバーなど多数が出席して、地域住民と交流している。なかでも、毎年の「留学生と家主との交流会」(1996年～)は、留学生と家主との間で直接に意見交換が出来る貴重な場である。

#### 4. 3 学外からのアプローチとその対応

異なる文化的背景を持つ留学生本人と、そのような留学生と接することの多い相談指導部門が把握している事柄について、情報の提供を学外から求められることが多い。具体的には、次の3形態がある。

①留学生及び留学生教育、国際化・国際交流、異文化理解教育等に関連した情報提供のため、石川県、金沢市、又は留学生支援団体が主催する研修会等の講師。

②自治体が主催するシンポジウムでの通訳・シンポジストとして、また、公立学校で行われている国際理解教育の講師として、留学生を派遣。

留学生への依頼は、日本社会を体験し理解を深めることになるため、学業に支障の無い限り積極的に引き受けることを勧めている。(経済的側面からは、留学生のアルバイトの創出と見ることが出来る。)

③国内外から、主としてメールによる問い合わせ及び依頼への対応。

#### 4. 4 日本人学生の海外派遣

留学生の受入れに比べてその整備が遅々として進まず、留学を希望する学生本人に任せされていた日本人学生の海外派遣も、1998年以降は留学生委員会の留学生交流小委員会を中心に、全学的な取り組みがなされるようになった。「金沢大学留学ハンドブック」の作成をはじめ、派遣留学説明会の実施、留学関連情報をホームページで発信するなど、海外に向けて広く教育の場を求めることが出来るよう情報提供が行われている。

さらに、派遣が決定するまでの日程などの年間スケジュールを明確にし、留学手続きに必要な書類の用意など、留学が計画的に準備できるよう配慮されている。なお、私費により留学する学生には、金沢大学海外留学奨励費による渡航費の援助がある。

しかし、留学する日本人学生の数は多くない。渡航希望先としてアメリカ及びヨーロッパが依然として大半を占め、アジアを重視する政策により奨学金が得にくいこと、単位互換の難しさから卒業・修了年限が延びること、留学に必要な外国語力が足りないことなどがその理由である。2002年、協定校から本学に留学中の学生たちの協力により、日本人学生のための「海外留学フェア」が角間キャンパスで開催された。教養教育を受講している1～2年生の段階から世界中の協定校への理解を深め、留学への準備やモチベーションの喚起に繋がることが期待される。なお、日本人学生の海外派遣に関する相談をはじめ、オリエンテーションや選考にかかる諸問題は相談指導部門が行っている。

#### 4.5 相談指導部門の評価

相談指導部門の活動を積極的に評価すると次の3点にまとめられる。

- ・まず、学内の各部局との協力連携体制、例えば留学生専門教育教官をはじめ保健管理センター等との連係がうまく機能しているため、留学生の問題解決が迅速かつ効果的になされている。
- ・つぎに、留学生や元留学生、さらには留学生と関わる日本人の側に対する継続的な調査や面接を行い、留学生や日本人側のニーズの把握につとめ、それを相談・指導や学内のルール作りに反映させている。また、教育に関する要求は日本語教育部門にフィードバックして、教育の改善へと繋げる努力をしている。
- ・また、地域からの様々な要請に応え、地域と留学生の橋渡しをつとめている。特に、小・中学校での国際理解教育がスタートして間もない時期から、キャンパスに隣接する学校を中心に留学生達が訪れ、子供達と教育交流を深めてきた。

しかしながら、問題点も指摘できる。

- ・相談のためのハード面とソフト面を充実させる必要がある。

相談をするための「場」の確保と多様化する留学生のニーズに応えるために相談員の増員が必要である。

- ・日本人学生との交流を積極的に進める。

留学生の多くが、日本人学生との交流を望んでいるにも関わらず、進展を見る事がない。教員の側が率先して留学生・日本人学生のグループ作りを働きかけている間は交流が見られるものの、教員の手を離れると自然に消滅するケースが多い。現在は、2~3の交流グループが活動を続けているが、留学生のニーズにもあるようにもっと学生レベルの交流を促進する働きかけを検討する必要がある。それは同時に、日本人学生にとって必要なことである。

- ・日本人学生に対する留学への動機付け。

大学間交流協定が締結され、大学間相互の交流の活発化が期待される中にあって、留学を希望しない学生が留学希望の学生を上回っている（2002年度「学生生活実態調査」）のは、なんとも残念な事である。本学で学ぶ留学生との交流を通して留学への動機付けを考える必要がある。

## 5. 研究活動

### 5.1 各教官の研究

#### 5.1.1 岡澤孝雄

##### a. 現在の研究テーマ

- 1) 吸血昆虫の生態
- 2) 留学生の口頭発表指導法

##### b. 業績

###### <著書>

- 1) 竹林に棲む蚊—ヤンバルギンモンカの生態。「蚊の不思議」宮城一郎編  
33-50, 東海大学出版会, 東京 2002

###### <学術論文>

- 1) Change in digital blood flow with simultaneous reduction in plasma endothelin induced by hand-arm vibration. Int. Arch. Occup. Environ Health 68: 115-119. (Nakamura, H., Okazawa, T., Nagase, H., Yoshida, M. Ariizumi, M. & Okada, A.) , 1996
- 2) Uterine circulatory dysfunction induced by whole-body vibration and its endocrine pathogenesis in the pregnant rat. Eur. J. Al Physiol. 72: 292-296. (Nakamura, H., Ohsu, W., Nagase, H. Okazawa, T., Yoshida, M., and Okada, A.) , 1996
- 3) Pathophysiological significance of plasma endothelin in peripheral circulatory disturbances. Environ. Health Preven. Med., 1: 51-55. (Nakamura, H., Nagase, H., Yoshida, M., Okazawa, T., and Okada, A.) , 1996
- 4) Development of Anopheles sinensis immatures (Diptera: Culicidae) in the field: effects of temperature and nutrition. Med. Entomol. Zool., 47: 355-362. (Mogi, M. and Okazawa, T.) , 1996
- 5) 高齢者喫煙に対する一般成人の意識に関する要因の検討。北陸公衛誌 24(1):21-26.  
(吉田雅美, 長瀬博文, 中村裕之, 岡澤孝雄, 萩野景規), 1997
- 6) 金沢市及び松任市の公園の砂場の Toxocara 卵による汚染と中卵検出法の検討。北陸公衛誌 24(1): 27-31. (滝野 豊, 尾谷静恵, 吉田雅美, 岡田 茂, 近藤力王至, 岡澤孝雄), 1997
- 7) Sero-epidemiological investigation of toxocariasis in Asian area. in Parasitic Zoonoses in Asian-Pacific Regions 1998, Proceedings of the fifth Asian-Pacific Congress for Parasitic Zoonoses. 65-70 . (K. Kondo, N. Akao, T. Ohyama and T. Okazawa), 1998

- 8) 免疫学的診断に基づく眼ドキソカラ症における眼所見とその新しい病型分類. *Clinical Parasitology* 9:51-53. (吉田雅美, 長瀬博文, 中村裕之, 萩野景規, 白尾 裕, 浅井宏志, 赤尾信明, 岡沢孝雄, 近藤力王至), 1998
- 9) 「やさしい日本語」に関する日本人の意識. 金沢大学留学生センター紀要 1: 27-47. (島 弘子, 八重澤美知子, 桜田千采, 岡沢孝雄), 1998
- 10) A retrospective study of ocular toxocariasis in Japan: correlation with antibody prevalence and ophthalmological findings of patients with uveitis. *J. Helminthology* 73: 357-361. (Yoshida, M., Shirao, Y., Asai, H., Nagase, H., Nakamura, H., Okazawa, T., Kondo, K., Takayanagi, T. H., Fujita, K. and Akao, N), 1999
- 11) 日本人ボランティア・チューターの意識調査. 金沢大学留学生センター紀要 2: 49-64. (深沢のぞみ, 岡沢孝雄), 1999
- 12) 知的障害児施設入所の健康状況と課題. 北陸公衛誌 27(1):37-42. (長瀬博文, 大下喜子, 大宅顕一郎, 岡沢孝雄, 中村裕之, 萩野景規), 2000
- 13) Psychological study using egogram on the resign and retirement from the job due to delivery in pregnant women. *Memoirs Health Sci. Med. Kanazawa Univ.* 24(2) :55-60. (Sakai, A., Shimada, K., Tabuchi, N., Kameda, Y., Sasagawa, T., Hayashi, C., Okazawa, T. and Sekizuka, N.), 2000
- 14) Effects of blood sources on fertility of a malaria vector, *Anopheles farauti*, in Solomon Islands. *Medical Entomol. Zool.* 52(3) : 249-252. (Okazawa T.), 2001

#### c. 口頭発表等

##### <研究発表>

- 1) Mosquito fauna in Khammouane Province (Final Seminar on Malaria Control Program in Lao PDR suorted by Japanese Grant Aid, Vientiane, Lao PDR, 2001 August)
- 2) ラオス中部カムワン県における蚊相と未記載種, *Tripteroides (Rachionotomyia)* sp. の生態 (衛生動物学会 山形 2001年4月)
- 3) キンパラナガハシカのバイオロジー 一訪花と産卵一 (衛生動物学会 東京 2002年4月)
- 4) 蚊産卵数に与える吸血源の影響 (衛生動物学会 那覇 2000年4月)

##### <講 演>

- 1) 日本語教師のための統計ー記述から分析へー (平成12年度第7回日本語教育学会研究集会講演・ワークショップ 富山 2000年11月)

### 5.1.2 三浦香苗

#### a. 現在の研究テーマ

- 1) 留学生の口頭研究発表指導法
- 2) プロソディーを意識した音声教育
- 3) 日本事情授業研究
- 4) 専門につながる読解教育

#### b. 業績

##### <学術論文>

- 1) 三浦香苗・深澤のぞみ：「留学生の口頭発表に対する評価を探る—本当に伝えたいことが伝わるために何が必要か」，『金沢大学留学生センター紀要第1号』，1-16，1998
- 2) 三浦香苗・古本裕子「日本語研修生の試験結果からみたコース評価」『金沢大学留学生センター紀要第1号』，17-26，1998
- 3) 三浦香苗・早川幸子ほか：「専門教育における留学生の口頭発表（1）指導について」，『金沢大学留学生センター紀要第2号』，1-27，1999
- 4) 三浦香苗・古本祐子ほか：「専門教育における留学生の口頭発表（2）使用言語について」，『金沢大学留学生センター紀要第2号』，29-47，1999
- 5) 三浦香苗・山口実千代：「ハイブリッド・ドラマプロジェクト2000—読解,日本事情を経て,ドラマを含んだ研究発表に至る」，『金沢大学留学生センター紀要第3号』，31-64，2000
- 6) 三浦香苗・古本裕子：「日本語研修コース（大学院予備教育）同窓会出席者によるコース評価」『金沢大学留学生センター紀要第5号』，57-68，2002
- 7) 早川幸子・島弘子・三浦香苗：「日本語研修コース修了生の研究活動における日本語使用」『金沢大学留学生センター紀要第5号』，39-56，2002

##### <報告書等>

- 1) 三浦香苗ほか：『日本語研修コース第1期報告書』，金沢大学留学生センター，1996
- 2) 三浦香苗ほか：『日本語研修コース平成8年度報告書（第2期・第3期）』，金沢大学留学生センター，1997
- 3) 三浦香苗ほか：『日本語研修コース平成9年度報告書（第4期・第5期）』，金沢大学留学生センター，1998
- 4) 長野ゆり・三浦香苗：「日本語研修コース平成10・11年度報告書（第6期～第9期）」，『金沢大学留学生センター紀要第3号』，99-126，2000
- 5) 三浦香苗：「大学・大学院入学後,留学生に求められる日本語能力と現状」，『平成14年度留学生交流研究協議会報告書（中部・近畿地区）』，文部科学省，65-71，229-233，2002

＜教科書・教材＞

- 1) 三浦香苗・岡澤孝雄・深澤のぞみ：『5ヶ月で口頭発表（試作版）』金沢大学留学生センター, 1997
- 2) 三浦香苗：「教養的課目としての日本事情授業例」『中・上級日本事情テキストバンク』、東京外国語大学, (印刷中)

c. 研究発表等

＜口頭発表＞

- 1) 「初級段階の口頭発表プロジェクトー受信から発信へー」, 平成10(1998)年度日本語教育学会秋季大会(於北海道大学), 1998年10月3日
- 2) 「留学生と日本人ボランティア・チューターの能動的共同活動『日本・世界事情』」, 日本語教育方法研究会(於金沢リファーレビル), 1999年9月25日
- 3) 「初級集中コースのドラマプロジェクトは有効か-漫画読解、日本事情を経て、ドラマを含んだ研究発表に至る-」, 平成12(2000)年度日本語教育学会秋季大会(於名古屋外国語大学), 2000年10月8日
- 4) 「大学・大学院入学後、留学生に求められる日本語能力と現状」, 文部科学省主催、平成14年度留学生交流研究協議会(中部・近畿地区), 2002年6月27日

＜講 演＞

- 1) 「初級段階からの『専門への橋渡し』をより効果的に行うために-受信から発信へ-」, 於中華人民共和国吉林省長春市, 東北師範大学赴日本国留学生予備学校, 2000年6月23日

＜派 遣＞

- 1) 中国吉林省長春市東北師範大学 中国赴日本留学生予備学校(2000年3月～7月)文部省派遣

5.1.3 八重澤美知子

a. 現在の研究テーマ

- 1) 異文化間交流促進に関する実践研究
- 2) 異文化適応の問題
- 3) ego-identity の形成・発達過程

## b. 業 績

### <著 書>

- 1) 『人間生活学』(共著) 北大路書房 1998
- 2) 『女性の生涯発達とアイデンティティ』(共著) 北大路書房 1999
- 3) 『青年心理学辞典』(共著) 福村出版 2000
- 4) 「児童心理」,『母親の心理ハンドブック』所収 金子書房 2001
- 5) 『新女性のためのライフサイクル心理学』(編著) 福村出版 2002

### <学術論文>

- 1) 「進路の選択と決定に関する研究(3) —女子青年の場合—」,『日本教育心理学会第37回総会発表論文集』597, 1995
- 2) 「進路の選択と決定に関する研究(4) —女子学生との比較—」,『日本教育心理学会第37回総会発表論文集』588, 1995
- 3) 「女性をめぐる現代情勢」,『金沢大学大学教育開放センター紀要』(共著) 75-88, 1995
- 4) 「進路の選択と決定に関する研究(5) —女子青年の場合—」,『日本教育心理学会第38回総会発表論文集』292, 1996
- 5) 「進路の選択と決定に関する研究(6) —事例から見る職業的アイデンティティ形成の過程—」,『日本教育心理学会第39回総会発表論文集』316, 1997
- 6) 「進路の選択と決定に関する研究(7) —レポートから見る女子大学生の職業的アイデンティティ形成の過程—」,『日本教育心理学会第39回総会発表論文集』317, 1997
- 7) 「比較文化的に見た成人女性の発達」,『日本教育心理学会第39回総会発表論文集』S40-41, 1997
- 8) 「外国人留学生の受入れに関する研究(1) —日本人の側の異文化理解について—」,『異文化間教育学会18回大会発表抄録』(共著) 22-23, 1997
- 9) 「外国人留学生の受入れに関する研究(2) —日本語使用に関する問題—」,『異文化間教育学会18回大会発表抄録』(共著) 122-123, 1997
- 10) 『異文化理解・異文化間交流促進のための実践的研究』(平成7~8年度科学研究費補助金) 研究成果報告書 1997
- 11) 「外国人留学生の受入れに関する研究(3) —日本人学生と留学生の交流をめぐって—」,『異文化間教育学会19回大会発表抄録』(共著) 42-43, 1998
- 12) 「外国人留学生の受入れに関する研究(4) —やさしい日本語に対する留学生・日本人の意識の相違—」,『異文化間教育学会19回大会発表抄録』(共著) 44-45, 1998
- 13) 「外国人留学生の受入れに関する心理学的研究」,『金沢大学留学生センター紀要』(共著) vol.1, 67-83, 1998
- 14) 「「やさしい日本語」に関する日本人の意識」,『金沢大学留学生センター紀要』(共著) vol.1, 27-47, 1998

- 15) 「工学部における留学生教育、研究者指導の実態と今後の課題」、『金沢大学留学生センター紀要』(共著) vol.1, 107-116, 1998
- 16) 「アイデンティティ研究の方法論的検討：それぞれの研究法の有効性と限界」(指定討論者)『日本教育心理学会第40回総会発表論文集』, S 32-33, 1998
- 17) 「外国人留学生の受入れに関する研究(5)－チューターの異文化理解－」、『異文化間教育学会20回大会発表抄録』(共著), 1999
- 18) 「進路の選択と決定に関する研究(8)－理系における教職志望者の職業意識の形成－」、『日本教育心理学会第42回総会発表論文集』 16, 2000
- 19) 「進路の選択と決定に関する研究(8)－教職課程履修者の職業意識－」、『日本教育心理学会第42回総会発表論文集』 17, 2000
- 20) 「外国人留学生の受入れに関する研究(6)－帰国留学生の調査より－」、『異文化間教育学会21回大会発表抄録』(共著) 20-21, 2000
- 21) 「外国人留学生の受入れに関する研究(7)－ジェンダー意識・ジェンダー観の文化差について－」、『異文化間教育学会21回大会発表抄録』(共著) 22-23, 2000
- 22) 「帰国留学生の調査」、『金沢大学留学生センター紀要』(共著) vol.3, 85-98, 2000
- 23) 「チューターの異文化理解とチューター制度について」、『金沢大学留学生センター紀要』(共著) vol.3, 77-84, 2000
- 24) 「進路の選択と決定に関する研究(10)－ジェンダーの視点から－」、『日本教育心理学会第43回総会発表論文集』 203, 2001
- 25) 「進路の選択と決定に関する研究(11)－主体的な進路変更の事例について－」、『日本教育心理学会第43回総会発表論文集』 204, 2001
- 26) 「外国人留学生の受入れに関する研究(8)－ジェンダー・フリーに向けてのパンフレット作成の試み－」、『異文化間教育学会22回大会発表抄録』(共著) 130-131, 2001
- 27) 「外国人留学生の受入れに関する研究(9)－個別事例報告－」、『異文化間教育学会22回大会発表抄録』(共著) 132-133, 2001
- 28) 「外国人留学生の受入れに関する研究(10)－日本の保育園における異文化接触と多文化理解教育－」、『異文化間教育学会23回大会発表抄録』(共著) 66-67, 2002
- 29) 「女性と仕事－女性の多様なライフスタイルの背景にあるジェンダー－」、(研究委員会企画シンポジウム)『日本青年心理学会第10回大会発表論文集』, 24-25, 2002
- 30) 「異文化から見た日本のジェンダー」、『金沢大学留学生センター紀要』(共著) vol.5, 97-109, 2002

〈報告書〉

- 1) 『男女共同参画社会づくりに関する意識調査結果報告書』(共著) 金沢市総務課 1997
- 2) 『男女共同参画社会づくりに関する意識調査結果報告書』(共著) 金沢市総務課 1998
- 3) 『小・中学生の生活意識調査報告書』(共著) 金沢市教育委員会 1998
- 4) 『男女共同参画社会づくりに関する意識調査結果報告書』(共著) 金沢市総務課 1999

- 5) 「各国のジェンダー事情について」、『留学生等合同セミナー報告書』(財内外学生センター 2000)
- 6) 『男女共同参画社会づくりに関する意識調査結果報告書』(共著) 金沢市男女共同参画室 2000
- 7) 「男女共同参画社会における男の立場」、『平成12年度文部科学省委託事業「青年男女の共同参画セミナー」報告書』(共著) 2000
- 8) 「ひととひと 共に自分らしい生き方を!ーはじめてジェンダーを学ぶ人のためのジェンダー学入門講座ー」、『金沢大学サテライト・プラザ「ミニ講演」講演録集 平成12年度』 2001
- 9) 『平成13年度 留学生交流研究協議会報告書(中部・近畿地区)』(共著) 文部科学省・独立行政法人教員研修センター・大阪大学 2001
- 10) 『児童・生徒のジェンダー意識調査報告書』(共著) 財団法人いしかわ女性基金・金沢大学留学生センター 2002

＜その他＞

- 1) 『異文化から見たジェンダー』(共著) 金沢大学留学生センター・異文化間研究会 2001
- 2) 『ふくらまそう夢風船ー男女共同参画社会の実現に向けてー』(共著) 石川県県民文化局 2002

c. 研究発表等

＜招待・基調講演＞

- 1) 「高齢少子化社会における女性の生きがいと心の発達」日本発達心理学会 1998
- 2) 基調講演「ジェンダーの形成」留学生等合同セミナー (財内外学生センター 2000)
- 3) 基調講演「帰国留学生の調査より」平成13年度 留学生交流研究協議会(中部・近畿地区) 文部科学省・独立行政法人教員研修センター・大阪大学 2001

＜シンポジスト・コーディネーター＞

- 1) 「これからの大図書館を考える」第1回金沢大学付属図書館シンポジウム 1995
- 2) 「アジア女性フォーラム」石川県県民文化局 1996
- 3) 「世界に開かれた共生社会 金沢の実現について」外務省・金沢市 2001
- 4) 「21世紀に生きる子どもたちを育むために」石川県教育委員会中堅後期教職員研修 2001
- 5) 「国際的な視野から石川の教育を考える」石川県教育委員会中堅後期教職員研修 2002
- 6) 「石川の学校教育振興フォーラム」石川県教育委員会 2002
- 7) 「男女共同参画基本法を聞く会」男女共同参画社会基本法・今後の課題 (財いしかわ女性基金 1999)
- 8) 「男女共同参画推進条例を聞く会」金沢市 2001

- 9) 「男女共同参画ワークショップ」金沢市 2002
- 10) 「男女共同参画社会を考えるシンポジウム」金沢市 2002

#### 5.1.4 長野ゆり

##### a. 現在の研究テーマ

- 1) 現代日本語における人称の表現
- 2) 日本語初中級（総合日本語コースC1レベル）の教材開発

##### b. 業績

###### <学術論文>

- 1) 「仮定を表す『～てみろ』の用法について」、『日本語教育』96号：143-153、日本語教育学会、1998

###### <著書>

- 1) 「カットスルとカットナルー感情表現の動詞の主体の人称ー」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上）』：99-108、くろしお出版、1995（分担執筆）
- 2) 「シロとシテミロー命令形が仮定を表す場合ー」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）』：655-661、くろしお出版、1995（分担執筆）

###### <報告>

- 1) 「日本語研修コース 聴解試験改訂プロジェクト報告」『金沢大学留学生センター紀要』第4号：27-39、2001（篠田倫子、若原幸子との共著）

##### c. 研究発表等

- 1) 「仮定を表す『～てみろ』の用法について」、日本語文法談話会、1996

#### 5.1.5 峯 正志

##### a. 現在の研究テーマ

- 1) シュメール語統語論
- 2) 日本語文法
- 3) 日本語C A I教材開発

## b. 業 績

### <学術論文>

- 1) 「現代日本語における漢字の音読み・訓読みについて 一楔形文字法との比較ー」『金沢大学留学生センター紀要』第1号：49-59, 1998
- 2) 「日本語C A I教材の開発に向けて 一金沢大学留学生に対するニーズ調査ー」(鎌田倫子, 能波由佳, 深澤のぞみとの共著), 『金沢大学留学生センター紀要』第1号：85-106, 1998
- 3) 「金沢大学留学生センター開発の活用練習C A Iソフトについて」(鎌田倫子, 深澤のぞみ, 笹原幸子, 芳浦恵, 深川美帆との共著), 『金沢大学留学生センター紀要』第2号：83-94, 1999
- 4) 「オノマトペと時を表す副詞に見られる類似性について」, 『金沢大学留学生センター紀要』第3号：23-29, 2000
- 5) 「日本語C A Iソフト再検討」(鎌田倫子, 笹原幸子との共著), 『金沢大学留学生センター紀要』第4号：17-26, 2001
- 6) 「イシン・ラルサ期の行政経済文書におけるシュメール語の接頭辞 ba- と preradical-n-」, 『古浦敏生先生御退官記念言語学論集』：465-478, 古浦敏生先生御退官記念論文集編集委員会編, 溪水社, 2002
- 7) 「シュメール楔形文字における改行」, 『金沢大学留学生センター紀要』第5号：25-32, 2002

### <報 告>

- 1) 「活用練習ソフト試用報告」(鎌田倫子, 笹原幸子との共著), 『金沢大学留学生センター紀要』第3号：65-75, 2000

### <辞書・辞典項目>

- 1) 「シュメール文字」(吉川守との共同執筆), 『言語学大辞典別巻世界文字辞典』, 三省堂

## c. 研究発表等

### <口頭発表>

- 1) 「現代日本語の漢字の音読み・訓読みについて 一楔形文字法との比較ー」, 日本語教育学会平成9年度第9回研究集会ー金沢ー (於リファーレビル)  
(発表要旨は日本語教育学会誌『日本語教育』 No.96, p.231に掲載)
- 2) 「C A I教材動詞活用練習ソフトの試用調査報告」, 日本語教育方法研究会平成11年度第2回研究集会ー金沢ー (於リファーレビル)  
(発表要旨は日本語教育方法研究会誌『J L E M (Japanese Language Education Methods)』 Vol. 6, No.2, p.22-23に掲載)

<招待講演>

1) 珠洲市(平成10年10月3日(土), 珠洲市立正院公民館)

金沢大学共催公開講座・統一テーマ「こころの問題あれこれ、はじめの一歩」

第2回講演「国際化の中の地域社会～このまちに暮らし続けるために～」

2) 松任市(平成11年11月12日(金), 松任市一木公民館)

金沢大学共催公開講座・統一テーマ「21世紀の暮らし」

第2回講演「国際化と暮らし」

<在外研究>

1) 文部科学省長期在外研究員として平成14年9月1日から平成15年2月28日まで、ペンシルベニア大学(アメリカ合衆国ペンシルベニア州フィラデルフィア市)アジア中近

東学科でシュメール語の調査研究

### 5.1.6 太田 亨

a. 現在の研究テーマ

1) 指示語体系に関する日本語とスペイン語の対照研究

2) 直前に起こった出来事を表す完了表現をめぐる日本語とポルトガル語の対照研究

3) 上級漢字教材の開発

b. 業績

<著書>

1) 「日本語とポルトガル語の先行性アспектをめぐる考察」、『日本語と外国語との対照研究Ⅶ 日本語とポルトガル語(2)』：93-126、国立国語研究所編、くろしお出版、2000

2) 「対照研究と日本語教育のより良い関係を目指して—日本語・ポルトガル語ー」、『日本語と外国語との対照研究X 対照研究と日本語教育』：49-63、国立国語研究所編、くろしお出版、2002

<学術論文>

1) 「スペイン語を母語とする日本語学習者の指示空間認識に関する基礎的研究」、『金沢大学留学生センター紀要』第3号：1-21、2000

2) 「上級漢字教材プロジェクトについて」、『金沢大学留学生センター紀要』第5号：69-95、2002(共著)

<総説・解説・報告書>

1) 「総合日本語コース」の創設と今後の展望」、『金沢大学留学生センター紀要』第3号：141-150、2000

- 2) 「スペイン語とポルトガル語の言語接触」、リレー・エッセー「スペイン語学の楽しみ⑫」、『NHK テレビ・スペイン語会話』：92-95、2000年3月号
- 3) 「金沢大学における日韓共同理工系学部留学生受け入れ事業の取り組み」、『金沢大学留学生センター紀要』第4号：53-80、2001

c. 研究発表等

〈口頭発表・シンポジウム〉

- 1) 「上級漢字教材用データベース作成について」(共同研究発表)、日本語教育学会平成12年度第7回研究集会、於：富山国際会議場、2000.11.3
- 2) 「日韓共同理工系学部留学生受入れ事業—計画時点と現時点の比較」、富山大学留学生センター教育・研究フォーラム「日韓共同理工系学部留学生プログラムの現状と課題」、於：富山大学黒田講堂会議室 2000.12.11
- 3) 「金沢大学における日韓共同理工系学部留学生プログラムの取り組みについて」、琉球大学留学生センターフォーラム「日韓共同理工系学部留学生プログラムの課題」、於：琉球大学留学生センター会議室 2001.2.26

〈講演・セミナー〉

- 1) 「日本語教育におけるコンピュータの利用・活用を考える」、国際交流基金主催・日本語教育西欧巡回セミナー(マドリード、ブリュッセル、ベルン、バルセロナ)講義 2001.2.28 - 3.20
- 2) 「日ポ対照研究の成果を日本語教育にいかす試み」、国立国語研究所・平成13年度日本語教育短期研修(第4回)「対照研究と日本語教育」、2001.12.1

### 5.1.7 ルチラ パリハワダナ (Ruchira Palihawadana)

a. 現在の研究テーマ

- 1) 日本語のテンス・アспект
- 2) 日本語の否定文
- 3) 日本語の副詞的表現

b. 研究業績

〈学術論文〉

- 1) 「否定文のテンス・アспект」(博士論文、東京外国語大学大学院地域文化研究科)、：1-295、1997
- 2) 「(～たり,)～たりする」文の意味・用法について」『金沢大学留学生センター紀要』第5号：1-24、2002

<翻訳>

- 1) 『みんなの日本語初級Ⅰ翻訳・文法解説冊』のシンハラ語への語彙訳（スリーエーネットワーク発行, 2003)

<報告書>

- 1) 「日本語・日本文化研修コース 第5期の歩み ——更なる充実を目指して——」『金沢大学留学生センター紀要』第3号：127-139, 2002
- 2) 「日本語・日本文化研修コース 新たな試みと今後の課題」『金沢大学留学生センター紀要』第4号：41-51, 2001

c. 研究発表等

<口頭発表>

- 1) 「副詞『しばらく』による出来事時の局限」, 平成14年度第8回日本語教育学会研究集会 (2002.11.9)

<講演>

- 1) 「国際舞台としての日本の職場」早稲田大学国際教育センター, トランスナショナルプログラム講演, 2003.2

5.1.8 ビットマン ハイコ (Heiko BITTMANN)

a. 現在の研究テーマ

- 1) 日本武道における思想史
- 2) 空手道の歴史や教え
- 3) 日独比較文化論

b. 業績

<著書>

- 1) Karatedō – Der Weg der Leeren Hand. Meister der vier großen Schulrichtungen und ihre Lehre. Heiko Bittmann (1999.6), 422
- 2) Die Lehre des Karatedō. Heiko Bittmann (2000.12), 209

<学術論文・雑誌等>

- 1) 「空手道の歴史と「教え」について」, 『東北アジア体育・スポーツ史学会組織委員会, 東北アジア体育・スポーツ史学会第2回大会抄録集』 : 439-450, 東北アジア体育・スポーツ史学会組織委員会, 1997
- 2) 「居合道への思い」, 『石川県剣道連盟・剣風春秋』第6号 : 2-3, 石川県剣道連盟, 2000

- 3) About the origin, development and naming of the 'Way of the Empty Hand' - Karatedō. 1st World Congress on Fighting Sports and Martial Arts (2000.3), CD-ROM
- 4) Buchbesprechung: Möller, Jorg. Sumō. NOAG 167-170, Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens. OAG (2001), 430-440
- 5) 「日本武道における「道」の一考察」,『金沢大学留学生センター紀要』第5号:33-38, 2002

〈翻訳〉

- 1) Grupe, Ommo (著), ビットマン ハイコ (訳) : Olympic values - Quo Vadis? 「オリンピックの価値・今いずこ?」, 筑波大学体育科学『近代オリンピックの教育的意義に関する研究』(課題番号11480006) : 172-181, 2002

〈主な競技歴〉

- |             |         |  |
|-------------|---------|--|
| 1) 平成13年4月  | 石川県剣道連盟 | 第38回石川県居合道大会・五段の部優勝                        |
| 2) 平成13年9月  |         | 第7回凌雲館居合道演武大会・五段の部3位                       |
| 3) 平成13年10月 | 全日本剣道連盟 | 第28回全日本杖道大会・参段の部出場(石川県代表)                  |
| 4) 平成13年10月 | 全日本剣道連盟 | 第36回全日本県居合道大会・都道府県対抗優勝<br>試合・五段の部出場(石川県代表) |
| 5) 平成14年4月  | 石川県剣道連盟 | 第39回石川県居合道大会・五段の部優勝                        |
| 6) 平成14年6月  |         | 第27回東北日本居合道大会・五段の部3位                       |
| 7) 平成14年10月 | 全日本剣道連盟 | 第29回全日本杖道大会・四段の部出場(石川県代表)                  |
| 8) 平成14年11月 |         | 第6回びわこ居合道大会・五段の部3位                         |

c. 研究発表等

- 1) Bittmann, Heiko. About the origin, development and naming of the 'Way of the Empty Hand' - Karatedō. 1st World Congress on Fighting Sports and Martial Arts (2000.3), Amiens (France)
- 2) ビットマン ハイコ:「日本武道の『教書』の成立過程と内容について」, 第6回2002 ISHPES 金沢セミナー(2002.7)  
Bittmann, Heiko. General Outline of the Development and the Contents of Teaching-Texts in the Japanese Ways of the Martial Arts. 6 th International ISHPES Seminar 2002, Kanazawa  
(2002. 7 )

## 5.2 外部資金の導入状況

八重澤美知子

- 1) 科学研究費補助金 基盤研究（C） 平成7～8年度 研究代表者  
研究課題名 「異文化理解・異文化間交流促進のための実践的研究」
- 2) 科学研究費補助金 基盤研究（C）(1) 平成12～14年度 研究分担者  
研究課題名 「大学関係保育所に見る異文化接触と留学生の子育て支援方策に関する基礎的研究」
- 4) 同研究：財いしかわ女性基金との共同研究 平成13～14年度  
研究課題名 「児童・生徒のジェンダー意識調査」

## 5.3 研究活動の評価

平成7年に留学センターが設置されて以来7年間に、印刷物としてセンター全体で研究論文71編、報告21篇、著書14冊、教材2冊、翻訳2冊が出された。また口頭研究発表は17回、講演は18回なされた。

特筆されることは、金沢大学留学センターで現在実施されているコースやプログラムの教育面の研究、実際に使われる教材開発にかかわる研究、報告、留学生指導相談にかかわる調査・研究が継続的に行われてきたことである。これらの成果は常日頃の授業の中に早速生かされ、教育の質の向上に貢献してきた。また、相談指導の面でも、学内でより効率的できめの細かい指導ができる体制の整備に結実した。教官個々のテーマについての研究も同時に行われてきた。

問題点としては2点が挙げられる。第一点は、公表された論文数が少ないので、研究の量的拡大を目指す必要があること、第二に、センターとして進めなければならない研究をどのように進めていくか考えなければならないことである。

## 6 地域・社会貢献

### 6.1 金沢大学公開講座

平成7年度大学公開講座 「留学生から見た日本・金沢」(計8回)

受講者は20~70歳代の 男性13人 女性12人 合計25人

月 日	題 目	講 演 者
2月24日(土)	金沢大学で学ぶ留学生 I 金沢大学留学生センターの発足と役割 II 異文化適応の問題	広瀬幸雄(留学生センター長) 八重澤美知子
2月25日(日)	留学生のための日本語 中国における日本語教育	三浦香苗 李永連
3月3日(日)	留学生から見た日本と金沢(1)	韓国からの留学生グループ
3月9日(土)	留学生から見た日本と金沢(2)	中国からの留学生グループ
3月16日(土)	留学生から見た日本と金沢(3)	韓国、中国以外の国からの留学生グループ
3月23日(土)	国際化時代における地域と大学	石原多賀子 平野俊彦
3月24日(日)	シンポジウム	留学生センター長・留学生センター教官他

### 6.2 教育委員会主催講演会(講師:相談・指導部門 八重澤美知子)

- a. 「女性の生涯発達—男女共生を考えるー」, 金沢市地域婦人指導者研修会, 金沢市教育委員会生涯学習課, 1999
- b. 「女性の生涯発達心理学」, 人権教育, 石川県教育委員会生涯学習課, 1999
- c. 「男女共同参画社会と家庭教育」, 平成11年度家庭教育支援ネットワーク研究会, 石川県教育委員会生涯学習課, 1999
- d. 「女性の生涯発達心理学」, 人権教育, 石川県教育委員会生涯学習課, 2000
- e. 「女(ひと)と男(ひと)とを考えよう!」, 男女共生セミナー, 金沢市教育委員会, 2000
- f. 「21世紀に生きる子どもたちを育むために」, (パネルディスカッション/コーディネーター) 平成13年度中堅後期教職員研修講座, 石川県教育委員会, 2001
- g. 「国際的な視野から石川の教育を考える」, (パネルディスカッション/コーディネーター) 平成14年度中堅後期教職員研修講座, 石川県教育委員会, 2002
- h. 石川の学校教育振興フォーラム, (シンポジスト), 石川県教育委員会, 2002

### 6.3 地域との交流

#### 6.3.1 国際理解教育への留学生派遣

金沢大学では、石川県内の小・中学校及び高等学校における国際理解教育への留学生派遣事業を実施しており、留学生センターが設置された平成7年度から平成14年度前半までの期

間に、小学校8校、中学校3校及び高等学校15校の計26校に延べ175人を派遣してきている。このうち、留学生センターでは、平成10年度に小学校2校、中学校1校の計3校に延べ13人の留学生を派遣した。派遣した日時と学校は以下の通りである。

平成10年7月23日 金沢市立緑中学校 5名  
平成10年11月26日 金沢市立大浦小学校 4名  
平成10年12月2日 金沢市立緑小学校 4名

大学と隣接する地域にある小・中・高校の側から、留学生を招聘し、留学生の出身国の文化風習について語ってもらおうとする試みは早くからあった。キャンパス内に小学生達が出向いて来て、留学生達に、例えば小学校の開校記念日などの招待状を手渡しする光景はしばしば目撃されている。

その後、児童生徒の国際理解教育の一環として、留学生達に学校へ来てもらいたいという要望が大学側に、個々の学校別、時期を問わず多く寄せられたため、それに答えるべく何らかのシステム作りが求められた。そのスムーズな運用を目指し、まずは本学が位置する金沢市教育委員会との話し合いの結果、組織的な留学生の小・中学校への派遣事業が整備され平成10年（1998年）度にスタートした。開始直後は、各学校の先生方は熱心に取り組み、事前の打ち合わせはもちろん、事後の感想や報告書まで作り、大学側に送ってきた学校もあった。（なお次年度から金沢市教育委員会での取り組みがなされず、平成10年度限り）

#### 6.3.2 田上地区との懇談会

留学生交流をめぐる地域住民との意見交換会

（金沢大学の留学生の里親やホームビジットで留学生を受け入れている地域住民の方と懇談）

実施日：平成13年9月16日（日）

於：石川県留学生交流会館研修室

出席者：田上の会（中川外司、上田誠一、関戸正彦、泉 成子、高松真由美、米倉福治）、医王山公民館（山口信行、古 登、中島隆志、大瀬弘之、木下章子）、金沢大学留学生センター・留学生課（堀林 巧、岡澤孝雄、三浦香苗、ルチラ パリハワダナ、西影憲二、岡田ほなみ、白木一成）

#### 6.3.3 学校訪問

小学校訪問：

日本語研修コースでは、地域の小中学校訪問をプログラムの中に取り入れている。学校訪問は、教員研修留学生のいる後期に行っている。午前中に授業参観・参加し、昼の給食を生徒と一緒に食べて、一緒に遊ぶのが主な活動である。この訪問の後、小中学校の先生や生徒達と個人的な交流が続くことが多い。

実績：

第5期	1998年1月30日	金沢市立高尾台中学校
第7期	1998年1月	錦紫台中学校
第9期	2000年1月26日	金沢市立田上小学校
第11期	2001年1月25日	金沢市立田上小学校
第13期	2002年1月24日	金沢市立田上小学校

#### 6.3.4 地域の行事への積極的参加

##### a. 百万石祭り参加

1999年度から金沢大学教職員と共に留学生も百万石祭りに参加するようになった。現在までの留学生参加者は約60名に上る。

実施日	留学生参加者数
1999年6月14日（月曜日）	約22名
2000年6月10日（土曜日）	約6名
2001年6月9日（土曜日）	約19名
2002年6月8日（土曜日）	約12名

百万石祭り参加は留学生にとり日本の行事に参加する機会であり、キリコを担ぎながら、町を練り歩くことによって町の一員となる機会である。また、参加する大学の職員や日本人学生とも一体感が生まれ、交流のきっかけとなっている。キリコを担いでいる間では留学生はお客様としての特別扱いを全く受けないので、数時間の間は本当の意味で大学の一員となるのではないかと思われる。

上述の点を考慮すると留学生にとって百万石祭りに参加することは大変意味のあることと考えられるが、その反面留学生は見世物扱いされているきらいがあり、参加に関しても無理を強いられている部分が見られる。その結果、祭り当日の遅刻や欠席が目立つ。本当に参加したい学生を募るために時間的な余裕を持って全留学生に通知徹底し、自主的参加を促すよう心掛けなければならない。

##### b. 財内外学生センター主催行事への参加

「杜の里国際交流フェスティバル」 1999～2002

「留学生と家主との交流会」 1998～2002

## 6.4 招待講演

### a. 三浦香苗

- i) 富山県国際交流協会主催 「日本語教育ボランティア講座」  
演題：「留学生への日本語教育」  
富山市：1998年～1999年

### b. 八重澤美知子

- i) 市民講座：金沢市中央公民館 「身近な国際理解」  
演題：「金沢での留学生活」  
金沢市：1998年
- ii) 金沢ボランティア大学校（国際コース）  
演題：「金沢にいる外国人」  
金沢市：1998～2000年
- iii) 石川県地域交流推進会議研修会  
演題：「留学生相談の方法」  
羽咋市：2000年
- iv) 金沢市立保育所職員研修・主査研修会  
演題：「ジェンダーにとらわれない保育について」  
金沢市：2000～2002年
- v) 金沢ボランティア大学校（国際コース）  
演題：「金沢で学ぶ留学生」  
金沢市：2001～2002年
- vi) 平成13年度 北陸農政局職員行政実務研修  
演題：「男女共同参画社会の実現」  
金沢市：2001年
- vi) 市民講座：金沢市味噌蔵公民館  
演題：「留学生の見た日本・金沢」  
金沢市：2001年
- vii) 平成13年度 石川工業高等専門学校セクシャル・ハラスメント防止委員会研修会  
演題：「快適な職場環境のために」  
石川県河北郡津幡町：2002年
- viii) 石川県地域交流推進会議研修会  
演題：「留学生相談の方法と実践」  
金沢市：2002年

ix) 平成14年度 北陸農政局職員行政実務研修

演 題：「男女共同参画社会の実現」

金沢市：2002年

x) 平成14年度 北陸財務局職員研修

演 題：「快適な職場環境のために」

金沢市：2002年

c. 峯正志

i) 金沢大学共催公開講座 「こころの問題あれこれ、はじめの一歩」

演 題：「国際化の中の地域社会 ～のまちに暮らし続けるために～」

珠洲市：1998年10月3日

ii) 金沢大学共催公開講座 「21世紀の暮らし」

演 題：「国際化と暮らし」

松任市：1999年11月12日

d. ビットマン ハイコ

i) 第29回2002アジアフォーラム in 石川 「どこから生まれる日本の魅力」

演 題：「武道論から見た日本文化の道について」

金沢市：2002年7月28日

## 6.5 JAPAN TENT

日本全国で学ぶ世界各国から留学生を石川県に招き、県下全域で交流を図る「JAPAN TENT」（主催：JAPAN TENT 開催委員会）が昭和63年から行われている。金沢大学留学生センター所属の教官や留学生課職員が平成13年度と14年度の2回に渡って「JAPAN TENT 夏期大学金沢職人大学校」の一環として「日本武道の体験・杖道」を実施した。日本文化をよりよく理解し体得するためには、武道を体験させることが良い手段であると確信しているからである。

a. 第14回 JAPAN TENT 世界留学生交流・いしかわ2001

(2001年7月27日～8月3日)

「日本武道の体験・杖道」

日 時：2001年8月1日

講 師：ビットマン ハイコ金沢大学留学生センター助教授

- b. 第15回 JAPAN TENT 世界留学生交流・いしかわ2002  
(2002年7月26日～8月2日)  
「日本武道の体験・杖道」  
日 時：2002年7月31日  
講 師：ピットマン ハイコ金沢大学留学生センター助教授

## 7 講演・討論会・その他の活動

### 7.1 講演・討論会

#### 7.1.1 外部講師招待講演会

- a. 1997.2.8 中村芳久（金沢大学文学部助教授）  
「ことばと認知」
- b. 1997.3.25 田窪行則（九州大学文学部教授）  
「視点と人称表現」  
「日本語条件文と認知的写像」
- c. 1997.9.27 木村政康（拓殖大学外国語学部教授）  
「ペルボトナル法による音声教育」
- d. 1998.7.4 大川英明（関西外国語大学留学生別科教授）  
「CAI教育のためのハイパーカードプログラミング入門」
- e. 2001.1.15 李 若柏（中国東北師範大学教授）  
「東北師範大学における日本語教育」

#### 7.1.2 国立大学日韓PML課題検討会

期 日：平成14年2月15日(金)・16日(土)

場 所：ラポート兼六

- 検討課題：
- (1) 「韓国予備教育との連携検討」
  - (2) 「韓国における合同説明会の検討」
  - (3) 「日本人講師の韓国派遣」
  - (4) 「専門分野データベースの作成」
  - (5) 「専門用語集の作成」

○2月15日(金)

- a) アンケート結果・データ分析結果報告
- b) 現状課題の整理
- c) 全体討論1 「韓国予備教育との連携」

(サブテーマ：「韓国における合同説明会の検討」「日本人講師の韓国派遣」)

○2月16日（土）

a) グループ検討会2（分科会）

- (1)「専門用語集作成」
- (2)「専門日本語年間シラバス」
- (3)「ホームページ開設とその運営方法」（専門分野情報提供について）

b) 全体討論2および全体総括

「現状課題の整理」では、①受入れ体制（渡日の遅れ、奨学金の遅れ）、②教育内容（学部生対象授業の活用）、③情報提供（配置試験から配置過程、ミスマッチを防ぐには？転学科問題）、④生活態度、⑤学部入学後の状況、⑥その他（保証人問題、高校での習得科目）などについて話し合われた。

続いて、「全体討論1：韓国予備教育との連携」では、①日本人講師の韓国派遣について、②韓国における合同説明会について、③教育内容（出身校の習得科目情報、学部入学後の日本語での読み・書き能力、韓国側予備教育での日本語教育の比重問題、配置試験から配置までの手続きの透明性、試験の作成や出題言語を始めから日本語にするなど試験そのものの改善点）などについて討議された。

2日目は、分科会での検討を受けて、「全体討論2：韓国予備教育との連携」として、グループ1：専門用語集、グループ2：専門日本語年間シラバス、グループ3：ホームページ開設とその運営方法についての検討内容が発表され、最後に2日間にわたる検討会の総括が行われた。

なお、本課題検討会の詳しい記録は、「日韓PML課題検討会記録」として残されている。

参加大学（28校より29名参加＋金沢大学2名）

北海道大学	東京外国语大学	新潟大学	大阪大学	長崎大学
東北大学	東京農工大学	静岡大学	神戸大学	熊本大学
群馬大学	横浜国立大学	名古屋大学	岡山大学	鹿児島大学
筑波大学	電気通信大学	岐阜大学	広島大学	琉球大学
千葉大学	富山大学	三重大学	九州大学	金沢大学（主催）
東京工業大学	信州大学	京都大学	佐賀大学	

分科会

分科会課題名	用語集	シラバス	H P
人 数	9	13	9

### 7.1.3 日研生教育改善研究会

日研生教育改善研究会は金沢大学の主催の下、2002年度から始められた。この研究会の目的は、各大学の日本語・日本文化研修コースに関する具体的な情報交換を行い、プログラム

の教育内容、及び課題について検討することである。

大阪外国語大学、京都大学、名古屋大学、北海道大学、及び金沢大学の参加の下、2002年2月28日に第一回目の研究会が金沢大学で開かれた。第一回目の検討課題は以下の通りである。

1. 「日本文化教育の内容、及び方法」
2. 「次につながるプログラム作り」

「文化」の捉え方、日本文化教育の扱うべき範囲、日本文化教育と日本事情教育との相違点などについて、各大学で実施している教育内容を例に話し合われた。また、日研生の大学院への進学を含む将来の活躍の場についても検討した。「日本のかぎ理解者を育てる」ために各大学でどのような工夫がなされているのかについて紹介され、討議された。

検討課題が抽象的過ぎたため、期待していたほどは議論が深まらなかった。次年度は検討課題を決め、それを検討する具体的な切り口を定め、参加者に事前に意見を記入していただき、その回答を下に討議を行いたいと考えている。また、討議された内容を報告書として小冊子にまとめ、日研生コースを実施している他大学に配布することも検討している。

#### 7.1.4 討論会「短期留学プログラムの実施と留学生センターの役割」

開催日 平成10年2月6日（金）14：00－18：00

場所 金沢大学本部2階 第4会議室

参加大学 広島大学、大阪大学、名古屋大学、北海道大学 それぞれ2名 計8名

金沢大学 (留学生センター) 5名 (広瀬、岡澤、八重澤、三浦、峯)  
(留学生専門委員会) 4名 (中山、志村、斎木、他)

金沢大学では平成10年10月から短期留学プログラムを開設した。その開設に先立ち、短期プログラムの円滑な実施するにはどうしたらよいのか、先行4大学を招いて、開設前、開設後生じた諸問題について討議した。さらに爾後の留学生センターの活動に生かすべく、短期プログラムを含めた留学生センターの役割・留学生支援体制についても議論した。

#### 7.1.5 短期留学プログラム生との意見交換会及びアンケートの実施

金沢大学短期留学生プログラムの第Ⅰ期（平成10年度）から留学生との意見交換会が行われている。期末に短期留学プログラム生の1年を振り返っての感想や問題点等の意見を求めて、平成13年度から「1年間の留学経験のアンケート」も実施している。結果については『金沢大学留学生センター紀要第6号』（印刷中）参照。

出席者：短期留学プログラム生、留学生委員会短期留学プログラム、小委員会委員長及び委員、授業担当コーディネーター、留学生センター長、留学生センター教官及び非常勤講師、留学生課長及び課員、学生部各課

#### 7.1.6 国立大学留学生指導研究協議会等への参加

「国立大学における留学生指導に関する諸問題について、情報・意見交換を行うと共に、留学生に関する研究を推進し、もって国立大学における留学生指導の質的向上を図る」ことを目的に、1996年5月に設立された「国立大学留学生指導研究協議会」には発足時から参加し、留学生に関する教育と研究に関する多くの知見を得ている。

本協議会の構成メンバーの多くは、国立大学留学生センター留学生指導担当教官及び国立大学で留学生指導に携わる者であり、国立大学に共通する留学生問題全般について意見を交換し、検討し、理解を深めている。発足当初から現在まで、毎年5月に東京大学が主催する協議会と12月に大阪大学で開催される協議会はほぼ定例化しており、2002年8月の時点で46国立大学に設置されている留学生センター相談・指導部門の教官が一同に会する良い機会となっており、各大学の近況報告を踏まえた貴重な学習の場となっている。このような年に2回のほぼ定例化した協議会とは別に、必要に応じて各大学で開催される会議ももちろんある。各大学のセンターが主催する協議会に参加することにより、大学間での連係によって留学生教育がスムーズに行われている部分が予想以上に大きい。さらに、マーリングリストによる呼び掛けや問題提起・質問などは、特に本学のセンター設立当時には極めて信頼すべき大きな情報源であった。なお、金沢大学相談・指導部門の教官は1997年5月から2001年4月まで、中部地区幹事として本協議会に協力した。

#### 7.1.7 金沢大学留学生国際シンポジウム2001開催実行委員会への参加

テーマ：「金沢がはぐくむ国際教育交流－元留学生の提言－」

2001年11月17日

金沢シティモンドホテル

金沢大学は国内外に在住する本学の元留学生を招いた、市民公開の国際シンポジウムを実施した。その目的は、以下の通りである。

「かつて金沢大学で学び、現在出身地をはじめ世界各地で活躍している元留学生と、終了後も日本に残って活躍している元留学生を招聘し、留学交流国際シンポジウムを開催する。金沢大学及び伝統的な文化都市金沢への留学の意義や効果について討議することによって金沢における国際教育交流の発展に寄与する。」また、具体的な問題提起とディスカッションは、「金沢大学の受け入れ体制や教育制度・環境について」「金沢の地域性、市民との交流経験について」「帰国後あるいは日本国内での就職後に金沢での経験がどう生かされているか」「国際教育交流の発展に向けて評価すべき点、改善すべき点」について行われた。

シンポジストとして元留学生6名が参加し、その出身国は、中国・韓国・タイ・ブルガリア・イギリス・アイルランドであり、半数が現在日本に在住であった。

なお、シンポジウムに先立つ特別講演は、「グローバル時代の人材育成－コマツの事例と大学への期待」と題して、コマツ人事部長；筆谷欣五郎氏が行った。(報告書を参照)

留学生センターは開催実行委員会の中心メンバーとして積極的に開催を支えた。

### 7.1.8 国立大学留学生教育懇話会

2001年3月19日 2階 第二会議室

金沢大学事務局

懇話会テーマ 「留学生教育における現状と展望」

1. 海外派遣の促進の方略（電気通信大学 小山直人教授）
2. 石川地区での留学生住宅連帯人支援事業について（内外学生センター所長 有家伸宜）
3. 留学生交流研究協議会の課題と展望（大阪大学 古城 紀雄教授）

上記テーマに対する3名の話題提供者の発言を踏まえて、討論に移り、これからの留学生センターの取り組むべき課題を確認した。

## 7.2 遠隔教育

アメリカ合衆国との協定校ウィリアム・アンド・メアリー大学とのテレビ会議

2001年と2002年に、異なるメンバーで、日本人学部学生とアメリカ人学部学生のテレビ会議（ディスカッション）を日本語で行った。日本側のコーディネーターは三浦香苗である。

メールのやりとりでテーマを選び、前もってアメリカと日本の学生達が同じ資料読解と準備のディスカッションをそれぞれで行い、日本人学生を司会者として、インターネットを通じて約1時間のテレビ会議を行った。2001年、2002年ともに、大テーマは「日本人のYesはNoか？」というもので、学生達の興味に従って小テーマが選ばれた。

i) 2001年3月16日、金沢大学日本人学生5人、W&Mアメリカ人学生4人

於外国語教育センター共同図書室

ii) 2002年2月22日、金沢大学日本人学生4人、W&Mアメリカ人学生1人

於三浦研究室

### 会議の次第：

- a. 簡単な自己紹介
- b. ビデオ会議の進め方の説明資料（読み物）についての確認や質問
- c. そこから発展した話し合い
- d. 司会者によるまとめ

### 会議のトピック：

- e. 日本人の考え方「yes, but, if...」について
- f. 謝ることについて
- g. 「男はしゃべらない」について

### 7.3 日本人ボランティア学生チューター制度

留学生と日本人学生が共に活動する組織が3つある。それぞれ異なった経緯で生まれたものであり、当初は留学生センター教官、あるいは留学生課主導であったが、次第に学生が自主的に運営するようになってきた。

#### a. VOTAK (Volunteer Tutors Association of Kanazawa University)

研修コース留学生と共に活動する。水曜日4限目の授業を「日本・世界事情」の授業とし、日本人学生と留学生が発表、ディスカッション、ゲーム、自由会話などを行う。授業外でも、日本人学生は留学生のボランティアチューターとして日本語の勉強の手伝いをする。

#### b. りゅうとも（日本語・日本文化研修生に対するチューター制度）

1999年(第5期)から始まった「りゅうとも」は日本語・日本文化研修生を対象に国際交流活動を行っている日本人学生のチューター組織である。初年度である1999年度には5期生11名のチューターとして法学部、文学部、教育学部、経済学部、医学部から19人の日本人学生が参加した。他学部の教官を通して日本人学生に呼びかけを行ったり、ポスターの掲示による募集活動を行ったりして学生集めをする形でスタートした。しかし、2000年度に参加学生の意向によってこの制度は「りゅうとも」という日本語・日本文化研修生向けの国際交流サークルとして再スタートを切ることになった。

2000年度秋学期(第6期)から日本語・日本文化研修生の教育課程の一環として「調査実習」という新科目を開講した。日本研究のために必要な研究方法論を教える場を設けるためである。その授業に日本人学生にも出席してもらい、日本語・日本文化研修生と共に日本社会・文化について合同調査・研究を行っている。調査実習に出席し、日本語・日本文化研修生と共に日本社会・文化について学ぶことが「りゅうとも」の主活動になっていった。

2000年度後期に「りゅうとも」と、日本語研修コースを対象にチューター活動を行っている「VOTAK」が合流する形で「ともだち」という新組織が結成した。「ともだち」グループは留学生寮である国際交流会館のコモンルームを借用し、毎週金曜日にミーティングを行う。また、クッキングパーティーや金沢市内巡り、花見、七夕などの様々な交流イベントを企画し、日本語・日本文化研修生や日本語研修生のみならず、国際交流会館居住の全留学生を対象とする幅広い国際交流活動の実現を目指している。

#### c. KISS (Kanazawa University International Student Station)

主として短期プログラムの留学生と学部留学生の日本語のチューターをし、来日する留学生の出迎えやアパート探しの手伝いなどの生活支援も行う。月に1度はパーティーや遠足などの活動を行う。

## 7.4 日本語能力追跡調査・同窓会

### a. 調査・同窓会の目的

大学院予備教育日本語研修コースでは、1997年以来、毎年3月にコース修了生を集めて、日本語に関する調査を、同窓会を兼ねて行ってきた。調査結果は、論文として報告した。(三浦2002, a,b 参照)

調査の目的は、以下のことを知って、コースの点検評価を行い改善に役立てることである。

①修了生の修了後の日本語使用状況、②修了後、研修コースでの日本語学習がどのように役立ったか、③修了後、研修コースに対する評価が変化したか、どう変化したか、④修了生のその後の日本語力の発達。また、この集まりは、他の機能も果たしている。すなわち、新旧修了生の出会いの場、教師、クラスメート、先輩、後輩、日本人学生との旧交をあたためる場、情報交換の場でもある。

### b. 調査・同窓会の構成

調査・同窓会の構成と方法は、年々改良を試みたため、年度によって多少の差がある。毎年必ず行ったことは、①メンバーの自己紹介と全体会議(テーマに沿った話:「将来の夢」「専門」「コース修了後の生活の問題点」等)、②金大留学生センターで受けた日本語集中コースを振り返って、同窓会の時点で行うコース評価(アンケート用紙に記入)、③個人面談による聞き取り調査、④懇親会、である。

### c. 出席者

以下にこれまで行った調査・同窓会への出席者数とその内訳を記す。進学先大学の名称は以下の短縮形を使用した。

金=金沢大学、福井=福井大学、富山=富山大学、富山医薬=富山医科大学、福井医=福井医科大学、新潟国際=新潟国際大学、先端=北陸先端大学院大学、上越=上越教育大学、美=金沢美術工芸大学、東京=東京大学、東工=東京工業大学

#### 調査・同窓会への出席者

回	年月	出席数	出席者内訳(進学大学別)	出席者内訳(期別)
1	1997年3月	14	金6、福井6、富山2	1期生5、2期生9
2	1998年3月	23	金6、福井9、富山3、富山医薬2、新潟国際1、先端1、上越1	1期生1、2期生8、3期生9、4期生5
3	1999年3月	13	金3、福井5、富山1、富山医薬1、新潟国際1、先端1、上越1	2期生2、3期生2、4期生5、5期生3、6期生1
4	2000年3月	35	金14、福井10、富山1、富山医薬3、先端2、上越1、美2、福井医1、無職1	1期生2、2期生4、3期生3、4期生3、5期生1、6期生4、7期生8、8期生10
5	2001年3月	28	金5、福井12、富山2、富山医薬1、先端3、上越1、福井医1、東京1、東工1、企業1	2期生3、3期生2、4期生3、5期生1、6期生2、7期生2、8期生5、9期生7、10期生3

当該年の3月に修了したばかりの留学生も出席したが、数に含めていない。

## 7.5 日本語・日本文化研修コース 合宿

日本語・日本文化研修コース合宿は第5期（2000年度）から実施されている。コース設計の大幅な改善を図った第5期からは、日本語・日本文化研修生の口頭発表を公開研究発表会として行うことになった。それに伴い、日本語・日本文化研修生の研究指導体制の充実を図り、年間の研究スケジュールの一環として合宿を取り入れた。2学期目の始まる4月上旬に国立能登青年の家に2泊3日の合宿を行い、中間発表会、及び研修などを行うことにした。

しかし、合宿は休み中に行うものであり、真面目な研究指導だけでは学生に対する負担が多すぎる。少しでも楽しい合宿を実現することを目的に、日本語・日本文化研修生と交流活動を実施している日本人学生の交流サークル「りゅうとも」のメンバー数名にも参加してもらっている。共に作業を行うことによって相互理解を深める機会を与え、金沢大学日本人学生と交流する場を提供することが狙いである。合宿中は、日本語・日本文化研修生と日本人学生は混在する形の班に分かれて、諸活動を担当する。

また、合宿の研修内容としていくつかの日本文化体験も取り入れている。陶芸体験、七宝焼き体験、てん刻、和太鼓体験などであり、日本人学生にとっても伝統文化を体験する貴重な機会となっているのではないかと思われる。更に、サイクリングや体育館を利用したスポーツの時間などは日頃スポーツをする機会の少ない日本語・日本文化研修生にとってストレス解消の機会となっているようである。

合宿の主たる目的である中間発表に関しては、「中間発表」といえる段階に至っていない場合が少なくない。しかし、熱心に研究に励んでいる学生の中間発表を聞くことは他の学生にとってよい刺激となっていると思われる。合宿内容の充実のためにもコースの年間スケジュール通りに学生に研究を進めてもらうように工夫を凝らさなければならない。

合宿の第二目的である国際交流に関しては、活動を共にし、宿泊を共にすることは交流の促進に大いに役に立っていると思われる。しかしながら、参加する日本人学生は固定しており、日本語・日本文化研修生と同様に毎年入れ替わらない。交流の輪が広がっていくように、日本人学生との交流プログラムを見直し、改善を図っていかなければならない。

なお、合宿の現在までの実施時期、参加人数などは以下のとおりである。

実施年度/期間	参加人数		実施内容
	日研生	日本人学生	
2000 年度 4月3日～5日 (2泊3日)	10	5	中間発表、研究指導
			七宝焼き、大社焼
			日本のゲーム、日本の歌
2001 年度 4月2日～4日 (2泊3日)	14	8	中間発表、研究指導
			和太鼓体験、大社焼、てん刻体験
			スポーツ、サイクリング、日本の歌
2002 年度 4月3日～5日 (2泊3日)	12	6	中間発表、研究指導
			和太鼓体験、七宝焼き、大社焼
			スポーツ、サイクリング

## 7.6 ホームビジット及び里親制度

### a. ホームビジット

1996年から留学生を地域の日本人家庭に1泊、乃至2泊寄宿させるホームビジットが実施されている。このホームビジットの目的は留学生に日常的な日本人の家庭生活を体験する機会を与えることである。その実施内容は、ホームビジットのみという場合と寺院、工場などの見学や寄宿先のお祭り参加を含む場合等と様々である。

記録に残っている範囲内でホームビジットの実施概要を以下に挙げる。

実施年月日	参加人数	寄宿先	実施内容
1996年	—	—	—
1997年5月15日-17日 (2泊3日)	23	1泊目：コマツ製作所粟津工場社宅 2泊目：小松市内のホストファミリー宅	コマツ製作所粟津工場見学、航空プラザ、ゆのくにの森見学、那谷寺見学、茶道体験、石川第二整肢学園入園者との交流、お旅祭り見学、ホームビジット
1998年5月16日-17日 (1泊2日)	19	小松市、辰口町、山中町のホストファミリー宅(18世帯)	大太鼓試鳴、茶道体験、那谷寺見学、小松療育園の入園者との交流、お旅祭り見学、ホームビジット
1998年8月1日-2日 (1泊2日)	22	志雄町ホストファミリー宅	ホームステイ、地引き網、海水浴、昼食(バーベキュー)、ぶどう狩り
1999年5月15日-16日 (1泊2日)	25	小松市、辰口町のホストファミリー宅	那谷寺見学、茶道体験、お旅祭り参加(曳山体験)、ホームビジット
2000年1月29日-30日 (1泊2泊)	8	医王山ホームビジット宅	スキー、ホームビジット
2000年5月13日-14日 (1泊2日)	16	小松市ホストファミリー宅	那谷寺見学、茶道体験、お旅祭り参加(曳山体験)、ホームビジット
2000年12月2日	7	二俣のホストファミリー宅	ホームビジット
2001年12月8日-9日 (1泊2日)	8	二俣のホストファミリー宅	紙すき体験、ホームビジット
2002年5月11日-12日 (1泊2日)	22	小松市、根上町、加賀市のホストファミリー宅	那谷寺見学、茶道体験、お旅祭り参加(曳山体験)、ホームビジット

ホームビジットの実施は留学生課国際交流係が中心となって行っている。このホームビジットは、特に角間キャンパス内の国際交流会館で生活を送っている留学生にとっては日本の家庭を直に知り、学外の地域の方と交流できる貴重な機会となっている。ホームビジットがきっかけとなって滞在期間中に幾度もその家庭を訪問し、帰国後も交流を続けているケースも見られる。また、ホストファミリーとして農業を営んでいる家族も参加しており、農村へ

の訪問は留学生にとって石川県の農村文化を知る貴重な機会となっているのではないかと思われる。

このホームビジットの実施に関して問題点として挙げられるのは、受け入れ家族が限られており、交流の輪がなかなか広がっていない点である。石川県、及び金沢市のホームビジット先、またはジャパン・テントのホームステイ先として既に登録している家族の協力を得るのは困難であり、ホームビジット先を増やすことは容易ではない。しかし、金沢の様々な地域の家族に参加を呼びかけ、付属的に行う地域交流プログラムの充実を図ることにより、参加者日本人家族のプールを拡大するために努めなければならないと思われる。

#### b. 日本語・日本文化研修コース里親制度

里親制度は1999年10月に田上公民館の協力の下、金沢大学日本語・日本文化研修コースの一環として発足した。この制度の目的は角間キャンパス内の国際交流会館で生活を送る日本語・日本文化研修生に、一般的な日本人の家庭生活を直に体験してもらい、地域に溶け込むきっかけを与えることである。無論、自国文化や生活習慣などについて里親家族に理解してもらうことも一つの狙いであり、双方向的な国際交流の実現を目指している。また、里親家族と良い関係を築くことによって、学生にとって金沢はいつでも帰って来られる第二の故郷となってほしいという願いも込められている。

1999年には11家族、2000年には18家族、2001年には12家族を紹介した。また、2002年度の8期生を対象に14家族が参加している（6家族に学生2名ずつお願いしている）。

実施内容としては、10月中旬に対面式を行い、1泊のホームステイを行う。3月に里親のための各国料理大会を開く。また、年度の最後に、日本語・日本文化研修生の口頭研究発表会に里親を招待し、懇談会を実施する。更に、田上公民館の主催の下、12月に里親との日本料理教室を開く。田上公民館の文化祭、及び内川公民館主催の雪祭りなども里親と出会う機会となる。

1年間に渡る交流の形態は学生本人と里親家族に任せられている。「日本の家族」と言えるほどの日常的な付き合いが実現する場合もあれば、3、4回程度の訪問で終わってしまう場合もある。しかし、この制度を通して、教室では決して見せられない日本の一面を学生に紹介することが可能になっている。歳月をかけてプログラムを育てていきたい。

### 7.7 スキー講習会

#### a. 平成7年度金沢大学外国人留学生スキー講習会・実地見学旅行

1996年2月17日～18日

吉田科学館、埋没林博物館見学

スキー講習 富山県宇奈月町 宇奈月温泉スキー場

参加留学生28人　日本人学生6名

b. 平成8年度金沢大学外国人留学生スキー講習会・実地見学旅行

1997年2月7日～8日

パーク獅子吼、花ゆうゆう見学

スキー講習 石川県石川郡尾口村 白山一里野温泉スキー場

参加留学生32人　日本人学生5名

c. 平成9年度金沢大学外国人留学生スキー講習会・交流事業

1998年2月13日～14日

尾口中学校との交流

東二口歴史民俗資料館にて重要無形民俗文化財「文弥人形淨瑠璃」鑑賞と交流

スキー講習 石川県石川郡尾口村 白山一里野温泉スキー場

参加留学生44人　日本人学生3名

d. 平成10年度金沢大学外国人留学生スキー講習会・交流事業

1999年2月19日～20日

尾口中学校との交流

東二口歴史民俗資料館にて重要無形民俗文化財「文弥人形淨瑠璃」鑑賞と交流

スキー講習 石川県石川郡尾口村 白山一里野温泉スキー場

参加留学生43人　日本人学生3名

e. 平成11年度金沢大学外国人留学生スキー講習会・交流事業

2000年2月18日～19日

尾口中学校との交流

東二口歴史民俗資料館にて重要無形民俗文化財「文弥人形淨瑠璃」鑑賞と交流

スキー講習 石川県石川郡尾口村 白山一里野温泉スキー場

参加留学生42人　日本人学生4名

f. 平成12年度金沢大学外国人留学生スキー講習会・交流事業

2001年2月16日～17日

東二口歴史民俗資料館にて重要無形民俗文化財「文弥人形淨瑠璃」鑑賞と交流

スキー講習 石川県石川郡尾口村 白山一里野温泉スキー場

参加留学生43人　日本人学生5名

g. 平成13年度金沢大学外国人留学生スキー講習会・交流事業

2002年2月15日～16日

東二口歴史民俗資料館にて重要無形民俗文化財「文弥人形淨瑠璃」鑑賞と交流

スキー講習 石川県石川郡尾口村 白山一里野温泉スキー場

参加留学生48人 日本人学生5名

## 7.8 実地見学旅行

### a. 平成7年度外国人留学生実地見学旅行

外国人留学生を参加対象として、東京首都圏を実際に旅行し、日本の文化、地理及び歴史を学習する機会を提供することにより、日本理解の一助とする。

1996年3月18日（月）～20日（水）

東京都内

外国人留学生41名

### b. 平成8年度外国人留学生実地見学旅行

教育の一環として、日本の文化・地理及び歴史を学び、実地見学旅行会を通じ異文化理解を深める。

1997年3月12日（水）～15日（土）

九州（長崎県、佐賀県、福岡県）

外国人留学生44名

### c. 平成9年度外国人留学生実地見学旅行

教育の一環として、日本の文化・地理及び歴史を学び、実地に見学会を通じ、異文化理解を深める。

1997年11月6日（木）～11月8日（土）

関西（大阪府、京都府）

外国人留学生32名

### d. 平成10年度外国人留学生実地見学旅行

教育の一環として、日本の文化・地理及び歴史を学び、実地に見学会を通じ、異文化理解を深める。

1999年2月26日（金）～2月27日（土）

京都市

外国人留学生44名

### e. 平成11年度留学生センター外国人留学生実地見学旅行

教育の一環として、日本の文化・地理及び歴史を学び、実地に見学することを通して、異文化理解を深める。

1999年11月4日（木）～5日（金）  
伊勢神宮、二見浦、伊勢戦国時代村、賢島、鳥羽水族館  
外国人留学生45名

f. 平成11年度外国人留学生実地見学旅行

教育の一環として、日本の文化・地理及び歴史を学び、実地に見学することを通して、異文化理解を深める。

2000年3月15日（水）～17日（金）  
震災メモリアルパーク、旧居留地、南京町、姫路城、好古園  
外国人留学生14名

g. 平成12年度外国人留学生実地見学旅行

外国人留学生を対象として日本の伝統文化見学と、現代日本文化を概観することにより、日本文化の理解を深める。

2000年11月7日（火）～8日（水）  
奈良公園、法隆寺、大阪市内、京都市内  
外国人留学生55名　日本人学生6名

h. 平成12年度外国人留学生実地見学旅行

外国人留学生を対象として日本の代表都市東京の伝統・近代文を見学し、日本文化の変遷について概観する。

2001年3月23日（金）～24日（土）  
東京　浅草・隅田川周辺・東京タワー・皇居周辺  
外国人留学生30名

i. 平成13年度外国人留学生実地見学旅行

外国人留学生を対象として日本の伝統文化見学と異文化を体験する。

2001年5月13日（日）  
那谷寺（小松市）、世界ガラス館（加賀市）、茶道裏千家師範　越田宗智様邸（小松市）、  
「お旅まつり」会場「子供歌舞伎」鑑賞 及び「曳山」体験  
外国人留学生25名

j. 平成13年度外国人留学生実地見学旅行

外国人留学生を対象として日本の伝統文化施設の見学と、現代日本のコンピュータを駆使した最新ハイテク映像技術の見学と体験をすることにより、日本の伝統文化及び最先端のハイテク映像産業の理解を深める。

2001年11月6日（火）～7日（水）

京都（金閣寺、清水寺、三十三間堂）、大阪（ユニバーサル・スタジオ・ジャパン）

外国人留学生52名　日本人学生2名

k. 平成13年度外国人留学生実地見学旅行

ユネスコ世界遺産として登録されている奈良の史跡を見学し、日本の歴史と大陸文化の伝来により形成された古代文化について学ぶ。

2002年3月5日（火）～6日（水）

東大寺、法隆寺、中宮寺、薬師寺、唐招提寺、平城宮跡

外国人留学生21名

## 7.9 広報活動

### 7.9.1 日本留学フェア等への参加

留学生センターが平成5年4月に設置されて以来、AIEJ主催の日本留学フェア及び進学説明会に年に最低でも1回は参加し、大学の広報活動に寄与している。

#### 日本留学フェア参加者一覧

年 度	開 催 地	期 間	留学生センター参加者
1994（平5）	タイ、マレーシア、インドネシア	H6.1	太田留学生センター長
1995（平6）	フィリピン、台湾	H7.2	廣瀬留学生センター長
1996（平8）	タイ、インドネシア、マレーシア	H8.6	廣瀬留学生センター長
1997（平9）	台湾、韓国	H9.10	八重澤留学生センター教授
1998（平10）	タイ、マレーシア	H10.6	大橋留学生センター長
1999（平11）	北 米	H11.5	三浦留学生センター教授
	韓 国	H11.6	岡澤留学生センター教授
2000（平12）	北米(サンディエゴ)	H12.5.30～6.2	岡澤留学生センター教授
	インドネシア、マレーシア	H12.7.22～27	太田留学生センター助教授
	タイ	H12.10.25～26	津川留学生センター講師
2001（平13）	インドネシア	H13.6.25～26	パリハダナ留学生センター助教授
	韓 国	H13.9.15～17	八重澤留学生センター教授
2002（平14）	台 湾	H14.7.6～7	長野留学生センター助教授
	中 国	H14.11	三浦留学生センター教授

## 進学説明会参加者一覧

年 度	開催地	期 間	参 加 者	
1998 (平 10)	東京	1998.09.05	留学生センター教授	八重澤 美知子
1999 (平 11)	大阪	1998.09.05	留学生センター助教授	長野 ゆり
			留学生センター助教授	パリハタナ ルチラ
	東京	1999.09.12	留学生センター助教授	太田 亨
2000 (平 12)	大阪	2000.09.03	留学生センター教授	三浦 香苗
	東京	2000.09.10	留学生センター教授	八重澤 美知子

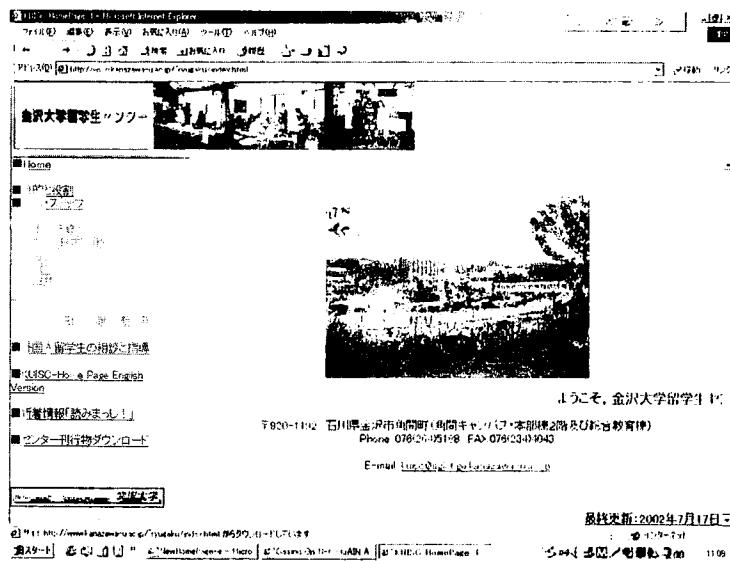
### 7.9.2 ホームページ

#### a. ~平成12年7月

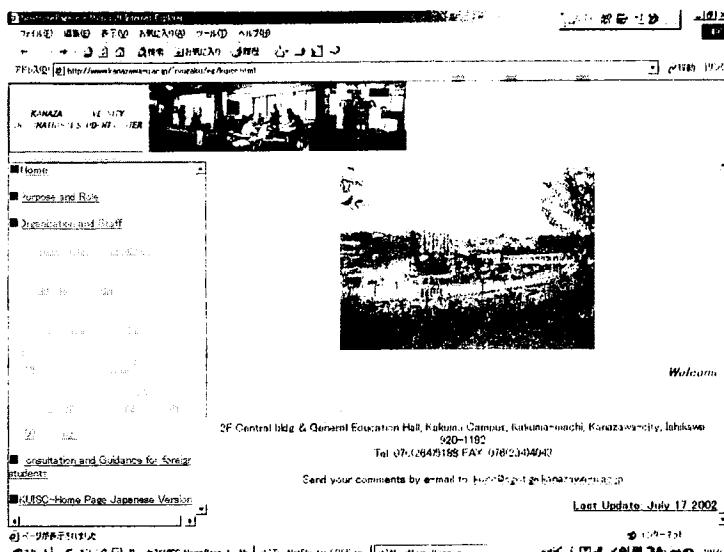
現在の管理者が着任した時点（平成10年4月）すでに存在していたが、作成された当時の詳細については不明。日本語版・英語版ともにトップページにすべての情報が盛り込まれていたが、作成されて以来一度も情報が更新されていなかった。

#### b. 平成12年7月～現在

##### 1) 日本語版トップページ (<http://www.kanazawa-u.ac.jp/~ryugaku/>)

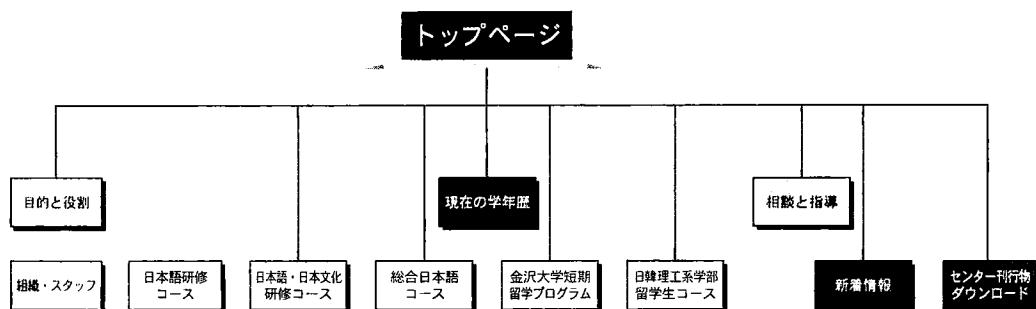


## 2) 英語版トップページ(<http://www.kanazawa-u.ac.jp/~ryugaku/eg/kuisc.html>)



### c. 掲載情報

掲載内容については日本語版と英語版をほぼ同内容にし、以下の階層を設けている。



各階層のトップページからは授業の時間割・学年歴・コース概要などの最新情報が得られるようになっている。また、センター刊行物ダウンロードのページからは、「センター紀要」(第3号以降)、「センターニュース」、「留学生必携・金沢生活ガイドブック」のPDF版がダウンロードできるようになっている。

### d. 管理者及び管理方法

平成12年7月～現在までの管理者は太田である。管理は総合情報処理センターのサーバー(トップページ及び各階層のページ管理、htmlファイルのみ)及び留学生センター独自のサーバー(容量の大きいファイル用フォルダの管理、pdfファイルや画像など)の2台で行っている。

### e. 更新頻度

新規情報が入り次第適宜行っている。その他にも、センター・サーバーの保守点検のため、1ヶ月に1度メンテナンスを行っている。

## 8. 施設と環境

### 8.1 施設の現状

留学生センターは施設の新設を概算要求してきたが、いまだ実現していない。現在のところ専任教官の研究室は総合教育棟に確保されているが、留学生センターの各コース・プログラムに関わる授業は、総合教育棟や大学教育開放センターの施設を使用して実施されている。留学生センターの確保面積（総合教育棟内の研究室のみ）は160m<sup>2</sup>であり、2001年（平成13年）度現在において、留学生センターを持つ国立大学37大学のうち、31位という低い位置に属する。

留学生の居住施設としては、国際交流会館がある。鉄筋コンクリート5階建てで、延べ面積2,035m<sup>2</sup>、建築面積514m<sup>2</sup>であり、居室数は留学生（単身者）用が68室、研究者ほか（単身者）用が11室である。なお、家族室や夫婦室は備わっていない。

なお、入居には以下のとおり優先順位があり、常時満室状態である。

第1順位：日本語研修生〈日韓共同理工系学部留学生を含む〉（6ヶ月）

第2順位：短期留学生（1年以内）

- (1) 短期留学推進制度による短期留学生（短プロ、一般短期）
- (2) 日本語・日本文化研修留学生
- (3) 協定校からの私費による短期留学生

第3順位：国費留学生（6ヶ月間）

- (1) 大使館推薦
- (2) 大学推薦
  - ① 協定校からの留学生
  - ② 協定校以外からの留学生

第4順位：私費留学生（6ヶ月間）

- (1) 協定校からの留学生（短期留学生を除く）
- (2) 協定校以外からの留学生

### 8.2 施設の将来計画

引き続き留学生センター独自の建物の確保を求めていく予定である。留学生の宿泊施設についても、大学移転との関連で、平成19年度までに新たな施設の建設を計画しているが、その宿泊施設は、日本人と留学生及び外国人研究者が共に居住するための施設となる予定である。それに加えて、地域住民と留学生との交流を促進する環境整備のため新居住施設も含めた「国際交流ゾーン」の設置を計画している。

## 9. 管理運営

### 9.1 管理運営組織

本学の留学生センターの現行の運営は、主として「留学生センター教官会議（以下、「教官会議」という。）及び「留学生センター委員会」（以下、「センター委員会」という。）の議を経てなされる。「金沢大学留学生センター規程」は、「教官会議」と「センター委員会」を留学生センターの教授会と規定しており、それぞれの審議事項と構成員を定めている。なお「短期留学プログラム」の実施に関しては、センター専任教官がその運営に関与しているが、教育課程編成等を審議するのは、留学生委員会（全学委員会）である（9.2で後述）。

#### 9.1.1 留学生センター教官会議

教官会議は、センター長とセンターの専任教官で構成される。センターの予算に関する事項や教育、研究に関する事項を審議する。この教官会議は定例的に開催されており、センター運営を直接担う教員の意思決定の場となっている。センター長が教官会議の議長である。なお、前述のように（2.3）、センター教官の選考にあたっては構成員の異なる別の「教官会議」が設けられている。

センター運営を円滑に行うため、教官会議の下に、将来構想委員会、予算委員会、教務委員会、広報・涉外委員会、点検評価委員会が設けられている。また、同じ趣旨でセンター専任教官は定期的に「打ち合わせ会議」を行っている。

#### 9.1.2 留学生センター委員会

センター委員会は、センター長、センターの教授、センターの助教授及び講師若干名、各学部、医学系研究科、社会環境科学研究科、自然科学研究科、及びがん研究所から選出された教官各1名、附属図書館長、保健管理センター所長、学生部長、その他委員会が必要と認めた者で構成される。2002年9月現在の委員数は21名であり、そのうち留学生センター専任教官は5名である。議長はセンター長である。

センター委員会では、センターの教育課程編成、授業計画と授業時間割、外国人留学生や外国留学を希望する学生に対する修学上及び生活上の指導・助言、センターの概算要求、短期留学生プログラムに関する事項及びその他センターの教育又は研究に関する重要事項が審議される。このセンター委員会も定例的に開催されており、センター専任教官と本学の各部局の代表がセンターの教育、研究、運営を共同で考え、意思決定する場となっている。

また、留学生センターの教育・指導助言などの活動を円滑に行うために、留学生センター委員会の下に、日本語教育専門委員会、日研生・短期研修留学生専門委員会、留学生相談・指導専門委員会などの専門委員会が設けられている。

## 9.2 留学生委員会

留学生センターの運営に直接関与するものではないが、学生の国際交流に関わる点で留学生センターとも関連の深い委員会として本学には留学生委員会が設けられている。教育担当の副学長が委員長である。各部局で選出された委員等の他、留学生センターからは留学生センター長と専任教官2名が構成員となっている。なお、留学生センターの専任教官が関わっている短期留学プログラムの教育課程の編成その他教育に関する事項はこの委員会で審議されている。

## 9.3 留学生センター長の選出方法

センター長及びその選出方法については、「センター規程」及び「金沢大学留学生センター長選考内規」で規定されている。「センター規程」によれば、センター長については本学の専任教授をもって充て、その任期は2年であり（2.1.1.aも併せて参照）、再任を妨げないとされている。

また、選考内規では、センター長の選考については、学長が関連部局長にセンター長候補者の推薦を求め、推薦された候補者のうちから本学の部局長会議の議に基づき選考するとされている。

## 9.4 学内管理運営への参加状況

留学生センター長は「将来計画委員会」、「教育委員会」という全学の基幹委員会、及び国際交流委員会の構成員である。また、留学生センター専任教官の中から、前述の「留学生委員会」、「国際学術交流委員会」（この2つの委員会は国際交流委員会の下部委員会である）及び広報委員会の委員として、さらにセクシャル・ハラスメント苦情相談員として学内の管理運営に参加している

## 9.5 事務組織

留学生委員会、留学生センター委員会、留学生センター教官会議に関わる事務など、留学生及び国際学生交流に関わる事務は学生部留学生課が行っている（2.1.2も併せて参照）。

## 9.6 自己点検評価の実施状況

留学生センター創設以来、今回が初めての本格的な自己点検の試みであるが、これまでにも『金沢大学50年史一部局編』、『金沢大学の課題と取り組み』の作成など全学的取り組みの際に、留学生センターのこれまでの活動を総括し、将来の課題を明らかにする作業を行ってきてている。また、2001年（平成13年）度以降は、留学生センターの将来計画に関して教官会議やセンター委員会での議論を積み重ね、今日に至っている。

科 目・事 項	平成7年度 予 算 額	平成8年度 予 算 額	平成9年度 予 算 額	平成10年度 予 算 額	平成11年度 予 算 額	平成12年度 予 算 額	平成13年度 予 算 額	平成14年度 予 算 額	執 行 計 画
諸謝金	0	104	104	104	96	96	96	85	
附属施設経費	0	104	104	104	96	96	96	85	
非常勤職員手当	13,945	12,376	15,282	16,980	19,414	22,300	19,776	22,266	講師等経費
職員旅費	430	430	430	594	549	632	632	820	
教官研究等旅費	430	430	430	594	549	632	632	820	共通 センター長会議、留学生スキ－実習引率 実地見学引率等、個人研究旅費
講師等旅費	23	776	776	776	776	776	776	776	附属施設経費 各種研究会等
校 費	2,922	13,123	12,726	11,896	11,775	11,670	11,109	10,941	厅費等、教育研究基盤校費、附属施設経費、学生当 積算校費
教官研究費等	1,400	3,640	2,814	2,170	2,590	3,080	2,680	2,400	研究費
運営費	1,022	8,483	7,573	7,000	6,985	6,290	6,329	6,791	授業用図書購入費、消耗品、複写費、センター紀要 センター概要、レポート等印刷費
人件費	0	0	0	1,000	1,100	1,200	1,100	750	パート職員
事務管理費	500	1,000	1,500	1,000	1,100	1,100	1,000	1,000	事務用品等購入費、施設等使用料（総合教育棟、教 育学部等）
予備費	0	0	839	726	0	0	0	0	節約費
合 計	17,320	26,809	29,318	30,350	32,610	35,474	32,389	34,888	

## 10.2 概算要求

### 10.2.1 予算要求の手順

- a) センター各教官に確認
- b) 予算担当教官の取りまとめ
- c) 予算担当教官とセンター長と留学生課を交えた調整
- d) センター教官会議で論議の上承認

### 10.2.2 予算要求時の留意点

- a) 緊急性の有無
- b) 中長期的観点
- c) センター共同利用への適合性

### 10.2.3 概算要求実績

#### a. 昭和59年度要求（提出部局：教養部）

- ・目的 外国人留学生の日本語教育の向上を図るため「学科目の整備（一般教育）」。
  - ・要求人員 教授 1人
  - ・措置人員 教授 1人
- ※総合科目 日本語・日本事情

#### b. 平成6年度要求（提出部局：学生部）

- ・目的 外国人留学生に対する日本語教育を効果的・集中的に実施するため、留学生センターの設置を要求
- ・要求人員 教授 4人, 助教授 2人 計 6人
- ・措置人員 教授 1人

#### c. 平成7年度要求

- ・目的 前年度に引き続き、留学生センターの設置を要求
- |                          |     |
|--------------------------|-----|
| △1人                      | △1人 |
| ・要求人員 教授 4人, 助教授 2人 計 6人 |     |
| △2人                      | △2人 |
| ・措置人員 教授 4人, 助教授 1人 計 5人 |     |
- △2人 △2人
- ※1 日本語・日本事情担当 教授 2人 計 2人  
※2 留学生指導担当 教授 1人 計 1人  
※3 大学院入学前予備教育 教授 1人, 助教授 1人 計 2人

d. 平成10年度要求（要求部局：留学生センター）

- ・目的 大学間（部局間）交流協定校からの留学生を対象に、主として英語による「短期留学プログラム」を開設し、学生交流の促進、優秀な人材育成及び国際社会への貢献を図るため。

・要求人員 教授 1人、助教授 2人 計 3人

・措置人員 教授 1人、助教授 1人 計 2人

※1 プログラムの教育・研究指導を担当 教授 1人

※2 協定校との調整等、プログラム全般の調整 助教授 1人

計 2人

e. 平成12年度要求（要求部局：留学生センター）

- ・目的 複雑化、細分化する多様なニーズへの対応への日本語教育部門教官及び教育指導と修学上・生活上における相談・指導をきめ細かに対応できる相談・指導担当部門教官の整備を図るため。

・要求人員 教授 1人、助教授 2人 計 3人

・措置人員 教授 1人（日本語・日本事情担当教官）

## 11. 刊行物

### 11.1 研究論文集（紀要）

『金沢大学留学生センター紀要』を1998年3月以来現在まで、原則として年に1回発行している。

以下に、第1号から第5号までの著者名と題目を示す。

#### 11.1.1 第1号（1998年3月）

##### a. 原著

- 三浦香苗・深沢のぞみ 留学生の口頭発表に対する評価を探る  
—本当に伝えたいことが伝わるために何が必要か—  
三浦香苗・古本裕子 日本語研修生の試験結果からみたコースの評価  
島 弘子・八重澤美知子・桜田千采・岡沢孝雄「やさしい日本語」に関する日本人の意識  
峯 正志 現代日本語における漢字の音読み・訓読みについて—楔形文字との比較—  
李 永連 中国における日本語教育  
八重澤美知子・桜田千采・島 弘子 外国人留学生の受け入れに関する心理学的研究  
峯 正志・鎌田倫子・能波由佳・深沢のぞみ 日本語C A I教材の開発にむけて  
—金沢大学留学生に対するニーズ調査—  
馬 志強・八重澤美知子・岡部佐規一・広瀬幸雄 工学部における留学生教育、研究者  
指導の実態と今後の課題

##### b. 資料

- 日本語研修コース  
日本語・日本文化研修コース  
王 勇江・桜田千采 日本語補講コース

#### 11.1.2 第2号（1999年3月）

##### a. 原著

- 三浦香苗・島 弘子・古本裕子・早川幸子 専門教育における留学生の口頭発表  
(1)指導について  
古本裕子・早川幸子・島 弘子・三浦香苗 専門教育における留学生の口頭発表  
(2)指導言語について  
深沢のぞみ・岡沢孝雄 日本人ボランティア・チューターの意識調査  
太田 亨 ブラジルの公教育における日本語

峯 正志・鎌田倫子・深沢のぞみ・笹原幸子・芳浦 恵・深川美帆  
金沢大学留学生センター開発の活用練習C A I ソフトについて

11.1.3 第3号（2000年3月）

a. 原 著

- 太田 亨 スペイン語を母語とする日本語学習者の指示空間認識に関する基礎的研究  
峯 正志 オノマトペと時を表す副詞に見られる類似性について  
三浦香苗・山口実千代 ハイブリッド・ドラマプロジェクト2000—読解、日本事情を  
経て、ドラマを含んだ研究発表にいたる一  
峯 正志・鎌田倫子・笹原幸子 活用練習ソフト試用報告  
桜田千采・島 弘子・松下（八重澤）美知子 帰国留学生の調査—外国人留学生受入  
の改善を目指す基礎的調査

b. 資 料

- 長野ゆり・三浦香苗 日本語研修コース 平成10・11年度（第6期～第9期）報告書  
ルチラ パリハワダナ 日本語・日本文化研修コース 第5期の歩み—更なる充実を目  
指して—  
太田 亨 「総合日本語コース」の創設と今後の展望  
岡沢孝雄 金沢大学短期留学プログラム第1期（1998年10月から1999年9月）の報告

11.1.4 第4号（2001年3月）

a. 原 著

- ヒルマン小林恭子 中・上級レベルの日本語学習者の長い発話行動の研究  
峯 正志・鎌田倫子・笹原幸子 日本語C A I ソフト再検討  
長野ゆり・鎌田倫子・笹原幸子 日本語研修コース聴解試験問題改訂プロジェクト報告

b. 資 料

- ルチラ パリハワダナ 日本語・日本文化研修コース 新たな試みと今後の課題  
太田 亨 金沢大学における日韓共同理工系学部留学生受入れ事業の取り組みについて  
ヒルマン小林恭子 海外日本語教育事情 アメリカの協定校から

11.1.5 第5号（2002年3月）

a. 原 著

- ルチラ パリハワダナ 「（～たり,）～たりする」文の意味・用法について

- 峯 正志 シュメール楔形文字における改行
- ビットマン ハイコ 日本武道における「道」の一考察
- 早川幸子・島 弘子・三浦香苗 日本語研修コース修了生の研究活動における日本語使用
- 三浦香苗・古本裕子 日本語研修コース（大学院予備教育）同窓会出席者によるコース評価
- 太田 亨・藤田佐和子・中村朱美 上級漢字教材作成プロジェクトについて
- 桜田千采・松下美知子・島 弘子・小西光子 異文化から見た日本のジェンダー  
－主として留学生の面接調査より－
- ヒルマン小林恭子 海外大学協定校交流の意義とその問題点：金沢大学の場合

## 11.2 学生文集

### 11.2.1 日本語研修コース文集

研修コースの修了までの授業の中で学生による文集作りを行っている。文集の内容は、留学生が口頭発表した研究や思い思いの作文と思い出の写真などである。過去14期の文集があるが、12期からは文集の他にCDも作っている。

### 11.2.2 日本語・日本文化研修コース 研究レポート集

日本語・日本文化研修コースの受講者は日本に関するテーマについて研究し、レポートを執筆することが義務付けられている。コースが開設された第一期から受講者が作成する研究レポートを編集し、「日本語・日本文化研修留学生 研究レポート集」として発行している。このレポート集を受講者、文部科学省高等教育局留学生課、日本語・日本文化研修コースを開設している他大学留学生センター、学内関係教官、及び日本語非常勤講師、里親に配布している。

レポート集は日研生の研究の成果を表現する場としてのみならず、彼らの関心を持つテーマや彼らの学力のレベルなどを把握するための貴重な資料としても役に立つと思われる。レポート集を通して目に見えない形で他大学との交流が行われているといっても過言ではない。

## 11.3 日本語教材

### 11.3.1 上級漢字教材（試作版）

本教材は、金沢大学留学生センター・総合日本語コースの漢字E及びFクラス用の漢字教材を作成する「上級漢字教材作成プロジェクト」により開発中の漢字教材である。

まず、本教材で扱う上級漢字を324字と熟字訓56語と認定し、五十音順に並べてほぼ真ん中の167字／168字間で区切って、暫定的に前半をEクラス、後半をFクラスに振り分けた。

それを授業で扱う必要から各13課分に配置した。

次に、各漢字に対して様々な情報や問題等を盛り込みたいと考え、情報や問題の種類ごとに「ページ」という形で独立したユニットを立てた。漢字情報源としての「予習ページ」を階層の最も上に置き、「問題ページ」「文章ページ」「小テストページ」の3つを統括する形にデザインした。(図1)

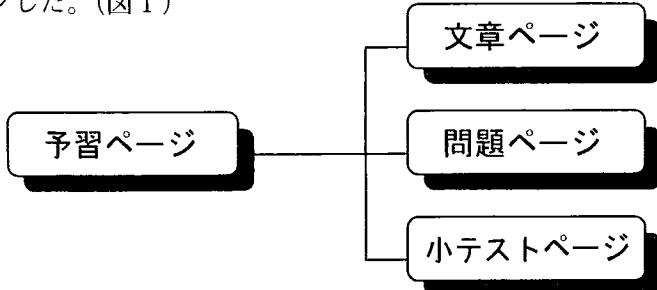


図1 ページ間の構成

さらに、これらのページをデータベース(DB)化して管理し、将来的にWeb上で公開することを目指す予定である。平成13年末現在、「予習ページ」のDB化がひとまず完了したところである。(図2)

日本語能力試験出題基準・漢字

漢字 漢 読み カン

出題基準 3 級

自動入力

漢

部首: さんずい  
日本語能力試験

カソ  
カソ  
カソ  
カソ  
カソ

意味

（漢）を書いてみよう

漢

用例

漢字 漢語

図2 データベースによるリレーション概略

### 11.3.2 日韓プログラム用理工系専門日本語教育視聴覚 DVD 教材（試作版）

本教材は、『科学技術基礎日本語 留学生・技術研修生のための使える日本語—読解編一』（札野寛子・深澤のぞみ・能波由佳共著、金沢工業大学刊、紀伊国屋書店発行、2000）の中から11のテーマを抜粋し（最終講義の「ボールを遠くに飛ばすには」を除く）、理工系学部予備教育生に対して行われた講義スタイルの聴解授業をビデオ・クリップ化したものである。

本教材の特徴は、理工系学部留学を目指す予備教育生を対象に、専門科目の講義を日本語で聞く力を増進するために、理工系テーマに関する講義を専門教官が講義スタイルで緩急2種類の講義を行っている点である。

「タイム1」は実際の講義にかなり近い速さで話されるのに対して、「タイム2」は内容理解を重視してゆっくり目に講義が行われている。（一部、「タイム2」のほうが速くなっているテーマのものや、タイム2がないものもある。）また、最終テーマ「ボールを遠くに飛ばすには」は、実際の講義を想定して行われたものである。

実際の講義を担当したのは金沢工业大学教授の深澤塔一氏、また撮影を担当したのは、本ビデオ制作者の太田亨である。

タイトル	タイム1	タイム2	Clip Title
ゾウの時間・ネズミの時間	10:35;27		Elephant-Mouse.Time
液晶のしくみ	5:59;29	6:08;25	Liquid-Crystal
ビル風	4:01;29	5:05;08	Building-Wind
バーチャル・リアリティ	3:22;08	4:30;28	VirtualReality
橋はどれだけ長くできるか	13:18;01	8:39;12	Bridge-Length
磁気を取り込む石ころ	3:17;13	3:48;23	MagneticStone
電線の鳥は感電しないのか	5:32;27	6:11;04	BirdsOnElectricWire
使い捨てカイロ	4:13;09	5:28;24	Disposal-Kairo
阪神大震災の教訓	3:46;19	3:41;26	Hanshin-Awaji
振動と応答	3:00;20	3:07;18	Vibration&Response
ロボット	6:42;21	6:06;11	Robot
ボールを遠くへ飛ばすには	22:04;24		FinalExam. Throw-a-Ball

### 11.3.3 C A I 教材

工学部の学生が学期途中で多く脱落するという問題をコンピュータ教材の使用で解決できないかという問題意識から、日本語補講担当者で日本語C A I教材を開発してはどうかということになり、1997年度からプロジェクトが始まった。

初年度は、どのようなソフトを学生は望んでいるのかということを調べるニーズ調査から始まった。次年度（1998年度）は実際に試作を試み、さらに1999年度は、そのソフトを実際に試用して効果を確かめた。それらの結果は主に紀要で発表している。実際に試作したC A I教材は、日本語動詞の活用を覚えるための活用練習ソフトであったが、ソフトのプラットフォームがウィンドウズでなくマックO Sであったこと、（コンピュータに詳しくない日本語教師でも比較的楽にカスタマイズできるという利点があるものの、）オーソドックスな形態のものであったため、市販のソフトで類似のものが発売されたこと（例えば、神戸システムプロダクツ『K S P 日本語 まなびや 一動詞活用編一』など）などから、それ以上の進展は見ていない。2000年度以降は、同様のシステムを他の文法項目の習得に応用できなか、その可能性を探っているところである。

### 11.3.4 初級日本語を使った口頭発表プロジェクト用教科書

『5ヶ月で口頭発表』三浦香苗・岡沢孝雄・深澤のぞみ、金沢大学留学生センター、1997年4月試作版

初級コースでの通常の日本語授業と並行して行う、日本語による口頭研究発表プロジェクト用の教科書。研究留学生のための専門への橋渡しとして、初級コースの半ばから使う。

#### 内 容：

- 1) 口頭発表のための基礎練習（「私の国」発表、発表に必要な数の読み方、割合を表す言葉、比較の表現、引用の表現など）
- 2) インタビュー練習、インタビュー（アンケート）調査の方法・練習、データ入力とデータ分析の方法
- 3) 発表の準備（アウトライン、発表原稿、図表の説明）
- 4) 発表の練習（発音練習、上手な発表のポイント、リハーサル）

#### 改 良：

以上の内容の教科書試作版を日本語研修コースで試用しているが、構成内容とも大きく改良した教科書として出版する予定である。（富山大学との共同研究）

### 11.3.5 初中級のための読解を中心とした総合教材

『私を話そう-読解から作文へ 試作版』三浦香苗・鎌田倫子・古本裕子・深澤のぞみ、1998初級後半レベルの日本語力をもつ学生を対象とする。客観的で意味のある情報を得ることができるような形の読み物を読み、それをリソースとして学生が話したり作文を書いたりできるような形の、読解を中心とした総合教材。

読み物の内容は、日本のさまざまな側面を扱ったもので、内容によって、書き下ろしや生の素材（多少の書き直しを含む）を用いている。読解の後、読んだことを発展させて、学生が自分自身をめぐる事柄について話し、それを文章にするというタスクも含まれる。

トピック：

- 1) 私のふるさと金沢
- 2) 日本の地理
- 3) 日本の人口
- 4) 日本の食事
- 5) 日本の教育制度
- 6) 日本の貿易
- 7) 若者の価値観
- 8) 日本人の結婚
- 9) 仕事をもつ女性
- 10) 日本人の健康
- 11) 日本の環境問題

改 良：

総合日本語コースの初中級レベルで試用しているが、トピックを増やし、各課の練習内容を改良中である。（富山大学、富山医科薬科大学との共同研究）

### 11.3.6 日本の歌教材

『ふるさと日本のうた』 金沢大学留学生センター, 1996

日本のわらべうたや小学唱歌から10曲を選び、歌いやすい音程に直した楽譜、日本語の歌詞、英訳、イラストをつけたもの。歌テープつき。教育学部の三井徹教授、宮下孝晴教授の協力を得て作成した。日本語研修コースで使っている。

### 11.4 報告書（留学生センター刊行のもの）

#### 11.4.1 研修コース報告書

- 1) 『日本語研修コース第1期報告書』、金沢大学留学生センター, 1996年3月
- 2) 『日本語研修コース平成8年度報告書（第2期・第3期）』、金沢大学留学生センター, 1997年4月
- 3) 『日本語研修コース平成9年度報告書（第4期・第5期）』、金沢大学留学生センター, 1998年3月
- 4) 「日本語研修コース平成10・11年度報告書（第6期～第9期）」、『金沢大学留学生センター紀要第3号』、99-126頁、2000年3月

## 11.5 留学生センター ニュース

『留学生センターニュース』を1997年3月以来、原則として年に1回発行している。以下に各号の目次を示す。

### 11.5.1 第1号（1997年12月）

学長挨拶 p. 1, 留学生センター長の巻頭言 p. 2, 留学生センターの活動紹介 p. 3, 留学生センター・留学生課スタッフ紹介 p. 5, 編集後記 p. 7

### 11.5.2 第2号（1999年3月）

留学生の皆さんへ p. 1, 金沢大学短期留学プログラム (KUSEP) の開設にあたって p. 2, 補講が変わった! p. 4, 日本に来て思ったこと p. 5, 金沢で参加した国際的な活動について p. 6, 留学生に教えられる「異文化を学ぶ姿勢」 p. 7, 留学生, 春夏秋冬 p. 8, 留学生との一時 p. 9, A Taste of Tea Ceremony p. 10, ボランティア・チューターの会に参加して p. 11, 情報コーナー p. 13, 新任スタッフ紹介 p. 15

### 11.5.3 第3号（2000年3月）

留学生の皆さんへ p. 1, プログラム紹介 p. 3, 平成12年度定期健康診断日程表 p. 12, 留学生的入国在留審査の簡素化について p. 13, スタッフ紹介 p. 14

### 11.5.4 第4号（2001年3月）

留学生の皆さんへ p. 1, プログラム紹介 p. 3, 日本語研修コース：ハイブリッド・ドラマプロジェクト p. 9, 短期留学生プログラム：杖を使う武道「杖道」について p. 10, スタッフ紹介 p. 14

### 11.5.5 第5号（2002年3月）

「創造価値」と大学（表紙巻頭言）、留学生センターのホームページを知っていますか？ p. 1, 学長インタビュー p. 2, VOTAK（ヴォタック）と留学生の「日本・世界事情」 p. 4, 日研生が見た日本 p. 5, 総合日本語コース p. 6, 第3期・短期留学生プログラム：短プロ留学生日本武道を教える！ p. 7, 第2期・日韓共同理工系学部留学生コース p. 9, 相談室からのお知らせ p. 11, 留学生センター組織・留学生課組織 p. 14

## 第Ⅱ編 留学生センターの課題と将来構想

## 第Ⅱ編 留学生センターの課題と将来構想

### 1. 留学生センターの将来構想

#### 1.1 留学生センターの課題

①留学生教育を一層充実させるとともに、本学日本人学生の外国留学を促進する役割を強化すること、②アドバイジングの充実や就学条件整備などによる留学生の修学・生活支援を一層強めること、③日本語教育・国際化・異文化理解などに関する研究の充実とそれを通じた社会貢献、④国際学生教育・交流を踏まえて本学の国際政策形成に積極的に関与していくこと、が今後の主な課題である。

#### 1.2 留学生センターの将来構想—中期的目標

前述の課題を実現するために、①教育、②研究、③教育・研究基盤整備、④国際交流、⑤組織・運営、⑥社会貢献の各テーマにつき中期的目標を設定している。その内容は以下の通りである。

##### ①教育に関する目標

日常語としての日本語を必要とする留学生と、専門研究のための日本語を必要とする留学生など、日本語教育に対する留学生のニーズは多様化しており、また日本文化・日本事情の習得に関してもニーズの多様化が見られる。こうした多様なニーズに応えられるよう、定期的にニーズ調査や追跡調査を行って現状と課題を的確に把握し、現行のコース・プログラムの一層の充実につなげる。

また同時に、留学生と日本人学生がともに学べる環境を整備する。

##### ②研究に関する目標

本センター専任教官の研究の質を向上させることは言うまでもないが、それを担保するための評価の体制を確立する。また、専門日本語・国際化・異文化理解などをテーマとする共同研究の実施を目指す。

##### ③教育・研究基盤整備

本センター専任教官（特に相談・指導担当者）、他の教員組織所属の留学生専門教育教官、及び留学生指導担当者からなるチームを設け、そのチームと各指導教官の連携を強化する。そしてチューター制度の充実などにより、留学生の修学・生活上の問題にきめ細かく対応する。加えて、学内奨学金制度の充実を図るとともに、留学生の教育ニーズを的確に把握するため、協定校等との日常的連絡体制を強化する。

また、留学生教育と教官の研究に不可欠なインフラ整備として、本センターの専用施設等の充実を推進するとともに、総合移転第二期計画事業の一環として「国際交流ゾーン」設置を推進し、留学生と日本人学生の交流を促進する。

本センター教官の教育・研究のための財政的な基盤を強化するため、科学研究費補助金や

各種助成金に積極的に応募するとともに、文部科学省を始め国内外諸機関の事業にも積極的に参与する

#### ④国際交流に関する目標

留学生数はここ数年340～370人台で推移している。ツイニング・プログラム及び単位互換制度を実施し、英語による大学院特別コースなどに関しては全学的合意を得ながら新設・拡充をはかり、留学生数増加の条件を整備する。また、金沢大学の特色を生かした留学生のための「金沢大学プログラム」を全学的に開発し、プログラムを正規・非正規学生に開放することによって、留学生の本学での修学動機を強化する。

他方、本学日本人学生の海外派遣数は、平成13年度で留学生センターが把握している限りでは11名にすぎない。海外留学フェア、留学説明会のほかに、協定校・他留学生センター等との遠隔相互教育・情報交換、外国語教育センターとの連携強化などを通じて、海外派遣数を増加させる。

また、協定校等外国の大学との教育交流で蓄積したデータの活用を通じて、国際的共同プロジェクト企画に貢献する。重点交流協定校との間では遠隔相互教育システムを開発し、相互教育を実施する。

#### ⑤組織・運営に関する目標

本センターとの連携をふまえて、大学本部に「国際室」（仮称）を新設することを構想している。すなわち、国際企画部門、国際学術交流部門、国際教育交流部門からなる組織として「国際室」を設置し、国際担当副学長（または学長補佐）を室長とする。この構想の中では、留学生センターは、固有の教員組織として「国際室」の国際教育部門を担当し、国際交流政策立案にも参加する。「国際室」は、室長、留学生センター代表、他の教員組織からの代表で運営されるものとする。

大学本部事務組織に関しても、国際交流課・留学生課など、現在の国際研究教育関連事務組織を統合し、「国際部」（仮称）とする。

他方で、本センター教員、留学生専門教育教官、留学生を多く担当する教員及び教員組織の間の連携を強化し、有機的に国際教育を担う体制を整備する。また、各センター教官は自らの研究テーマと関わりの深い教育・研究組織との関係を強める。

#### ⑥社会貢献に関する目標

現在実施しているホームビジット、ジャパンテント等を通じた留学生地域交流を一層充実させる。また、異文化理解、国際化等に関する留学生センターの研究成果を地域に還元する。さらに、地域住民、留学生、留学生センター、他の教員組織が共同で取り組める研究課題や教育プログラム（例えば、金沢学講座など）を立案し試行する。

そして、これら留学生センターが行う活動状況を積極的に発信するため、ホームページを一層充実させる。特に、現在の日本語版と英語版のほかに韓国語版を立ち上げる。

また、本センターの教育・研究活動を客観的に評価するため、定期的・継続的に点検評価を行い、公表することにより、教育・研究に反映させる。

## 2. 教育・研究・指導に関する将来構想

### 2.1 教育に関する将来構想

第1編での点検を踏まえて、近い将来の教育活動に関しては、次のような構想をもつていいる。

本センターの教育の目指すところは、日本と日本文化に造詣の深い国際人を養成することであるが、その対象は、留学生のみではなく、日本人学生をも含むことを明確に指向している。

#### 教育内容

教育内容に関しては、留学生に対する授業形態の多様化と教育内容の充実を図り、より質の高い留学生教育を推進する。

ことに、日本語教育部門の需要が多様性を有することをふまえて充実を図る必要がある。すなわち、日本語の習得希望のレベルとして、日常サバイバル程度しか必要のない者、日本語の四技能すべてを高めたい者、専門資料を読む能力だけ身につけたい者、専門分野に直結した高度な日本語が必要な者など、その需要はバラエティーに富んでいるからである。そこで、総合日本語コース各クラスの教育目標・内容を一層鮮明にし、クラスの再編成を検討・実施する。特に日本語レベルが高い留学生向けには新たな科目、また、初中級レベルにも専門につながる日本語教育を導入して、「大学で行う」日本語授業を展開する。

加えて、大学院予備教育（日本語研修コース）、日韓理工系学部予備教育では、専門につながる教育のための目標とそれを達成する方法を更に明確にする。

同時に、留学生と日本人学生の交流を強化し、学生の国際化を推進するために、短期プログラムの科目の中に日本人学生も受講可能なものを増やし、教養的科目として単位化する。また、日本語・日本文化研修コースにおいて、多言語・多文化を有する留学生と日本人学生の合同研究の機会を設ける。留学生に対して、学部・大学院の開講科目情報を提供し、受講を支援する。

他方で、重点交流協定校との間で遠隔相互教育システムを開発し、相互教育を実施するとともに、金沢大学紹介プログラムを開発し発信することによって、留学生の日本留学前準備、協定校との教育内容の情報交換、追跡調査などを可能にする。

#### 教育の実施体制

留学生、日本人学生が共に学べる体制を整備する。センターで実施している教育コース、プログラムにおける科目的単位化を図り、日本人学生も参加できる体制を整備する。

短期プログラムの英語による科目的安定的供給体制を整備する。

日本語予備教育（日本語専任コース）の受講生拡大の可能性について検討する。

## 2.2 研究に関する将来構想

留学生センターは今まで、当センター所属の学生、全学の留学生のために様々なコース、プログラムを運営し、講義や事業を提供してきた。また、留学生の相談指導にも多大な時間を費やしてきた。留学生センターが果たしてきた役割は今後も継続されるが、それぞれについて更により良いものに変えていく不断の努力が必要である。大学は教育機関であり、研究機関でもある。よりよい教育・指導のためには、研究を欠かすことができない。しかし現在、留学生センターの専任教官は教育にほとんどの時間を費やし、研究の時間はきわめて少ない状況にある。今後は、カリキュラム研究、教育方法研究、留学生交流及び自分自身のテーマについての研究にもう少し時間を割くべきである。サバティカル制度の導入、海外での研究・研修の機会を増やすなどの研究環境の整備が重要となる。研究の活性化によって、教育の活性化も期待できる。

センター教員のそれぞれの専門分野の研究、担当しているコース、プログラムの教育に関する研究、センターとして今後取り組む分野の研究等の活性化のために、教員個人の努力とともに共同研究を実施し、研究成果の質的、量的拡大を図らなければならない。自らの専門領域に近い学内の各教員組織と連携し学部・大学院教育に関与することを通じて、共同研究を行い、センター内においても共同研究を積極的に実施する必要がある。センターの教育に関連の深い分野、特に日本語、日本語教育、異文化コミュニケーション、国際化、遠隔教育、地域交流等は、取り組まなければならない研究課題であり、センターにおける教育の質の向上と密接に係わっている。

研究を活性化させ、その成果を確認するために、定期的な自己点検・評価も同時に実施しなければならない。

## 2.3 相談・指導に関する将来構想

留学生センターの前身である「留学生教育センター（学内措置で1990年に設置）」から、留学生に対するアドバイジング・カウンセリングは実施され、留学生の日本での学生生活を充実させまた有意義なものにするための役割が求められてきた。本センターの将来目標においても、留学生に対する「相談・指導」の役割は、ますます重要となろう。多様化する留学生のニーズに対応した相談・指導を展開するための要点は以下に記す通りである。

### （1）アドバイジング・カウンセリングの充実と学内支援体制の確立

前述（Iの4.5）した、「相談員の増員」と「相談する場所」の確保は勿論の事、それに加えた整備として求められる事柄を以下に列挙する。

- ・他部局の協力を得て、多言語によるカウンセリング体制の確立
- ・留学生センター教員と留学生専門教育教員、留学生の指導教員、保健管理センター、法学部教員有志による法律アドバイザー等の有機的な連携を深め、留学生の生活支援・健康管理などに関するネットワークの強化

(その際、各部局に所属する留学生専門教育教員の役割と位置付け、更には留学生センターとの関係の明確化が必要である)

- ・留学生支援のために利用可能な諸制度について、学内関係者への周知の徹底とその効果的運用
- ・チューター制度の継続と整備・充実
- ・帰国留学生のフォローアップや元留学生を招いたシンポジウムを適時開催し、留学生活全般に渡る意見を求め、支援体制の改善を検討
- ・定期的に留学生の実態調査を実施し、支援体制を点検・評価
- ・留学生の相談・指導に必要な情報を関連する委員会に提言

#### (2) 留学生と日本人学生の交流の促進と日本人学生の国際化

留学生と日本人学生が共に学び、活動するための環境を整備するとともに、特に日本人学生を国際人として養成する。

- ・(本学で実施する)留学フェア、留学説明会等の機会を通じて留学情報を日本人学生に提供する。
- ・学生どうしの交流が深まるように、既存の留学生との交流団体やチャータリングを積極的に支援する。
- ・留学生指導から得られた情報をもとに、多文化理解に関連した授業を学部の1年生を対象に開講し、日本人学生の海外に対する動機を喚起する。

#### (3) 地域の交流団体との連携

地域から寄せられる留学生との交流のニーズや支援、及び留学生側からの地域に対するニーズ等をうまく対応させ、留学生の日本での体験を広げるための連携のあり方を検討する。

# 第Ⅲ編 資 料

## 第Ⅲ編 資 料

### 1. 規 程

#### 1.1 留学生センター規程

(趣 旨)

第1条 この規程は、金沢大学留学生センター(以下「センター」という。)に関し必要な事項を定めるものとする。

(目 的)

第2条 センターは、外国人留学生及び海外留学を希望する金沢大学(以下「本学」という。)の学生に、必要な教育及び指導助言等を行うことにより、本学における留学生交流の推進に寄与することを目的とする。

(業 務)

第3条 センターは、学内共同教育研究施設として、次の各号に掲げる業務を行うこととする。

- (1) 外国人留学生に対する日本語、日本文化及び日本事情に関する教育に関すること。
- (2) 外国人留学生に対する修学上及び生活上の指導助言に関すること。
- (3) 外国人留学生に対する予備教育に関すること。
- (4) 海外留学を希望する学生に対する修学上及び生活上の指導助言に関すること。
- (5) 留学生教育の調査研究に関すること。
- (6) 短期留学プログラムの実施に関すること。
- (7) その他センターに関する必要な業務

(職 員)

第4条 センターに次の職員を置く。

(1) センター長

(2) 教 官

2 前項各号に掲げる者のほか、必要に応じ、事務職員及び技術職員を置くことができる。

(センター長)

第5条 センター長は、本学の専任の教授をもって充てる。

2 センター長は、センターの管理及び運営を総括する。

3 センター長の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

4 センター長に欠員が生じた場合の補欠のセンター長の任期は、前任者の残任期間とする。

5 センター長の選考については、別に定める。

(教授会)

第6条 センターに、教授会として、金沢大学留学生センター教官会議(以下「教官会議」という。)及び金沢大学留学生センター委員会(以下「委員会」という。)を置く。

2 教官会議は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) センターの教官の選考に関する事項
- (2) センターの予算に関する事項
- (3) その他センターの教育又は研究に関する重要事項

3 委員会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) センターの教育課程の編成に関する事項
- (2) センターの授業計画及び授業時間割に関する事項
- (3) 外国人留学生及び海外留学を希望する学生に対する修学上及び生活上の指導助言に関する事項
- (4) センターの概算要求に関する事項
- (5) 短期留学プログラムに関する事項(金沢大学留学生委員会の所掌に係る事項を除く。)
- (6) その他センターの教育又は研究に関する重要事項

第7条 教官会議は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
- (2) センターの教官

2 前条第2項第1号の事項を審議する場合は、金沢大学教育委員会が推薦する当該委員会委員若干人を加えるものとし、前項第2号の委員については、助教授及び講師を除くものとする。

第7条の2 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
- (2) センターの教授
- (3) センターの助教授及び講師 若干人
- (4) 各学部、医学系研究科、社会環境科学研究科、自然科学研究科及びがん研究所から選出された教官 各1人
- (5) 附属図書館長
- (6) 保健管理センター所長
- (7) 学生部長
- (8) その他委員会が必要と認めた者

第8条 前条第3号、第4号及び第8号の委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

2 前項の委員に欠員が生じた場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

第9条 教官会議及び委員会に議長を置き、センター長をもって充てる。

2 議長は、教官会議及び委員会を主宰する。

3 センター長に事故があるときは、センター長があらかじめ指名する者が、議長の職務を行う。

第10条 教官会議及び委員会の会議は、原則として毎月定例日に開催するものとする。ただし、必要に応じて臨時に開催することができる。

第11条 教官会議及び委員会は、構成員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決することができない。

2 議事は、出席した構成員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。ただし、特別の必要があると認められるときは、3分の2以上の多数をもって議決することができる。

第12条 教官会議及び委員会に議案を提出しようとする者は、会議の開催日の3日前までにセンター長に申し出なければならない。

第13条 教官会議及び委員会は、必要があると認めたときは、委員以外の者を会議に出席させ、意見を聞くことができる。

第14条 教官会議及び委員会に、専門の事項を審議するため、専門委員会を置くことができる。

(外国人留学生日本語研修コース)

第15条 センターに、外国人留学生日本語研修コースを置く。

2 外国人留学生日本語研修コースに関する事項は、別に定める。

(外国人留学生日本語・日本文化研修コース)

第16条 センターに、外国人留学生日本語・日本文化研修コースを置く。

2 外国人留学生日本語・日本文化研修コースに関する事項は、別に定める。

(科目等履修生等)

第17条 金沢大学外国人留学生規程第3条に定める科目等履修生、特別聴講学生又は日本語研修生としてセンターに入学を志願する者があるときは、選考の上、許可することができる。

(事務)

第18条 センターの事務は、学生部留学生課において処理する。

(雑則)

第19条 この規程に定めるもののほか、センターの運営に関する必要な事項は、センター長が別に定める。

## 附 則

1 この規程は、平成7年4月1日から施行する。

2 この規程施行前に、金沢大学留学生センター設置準備委員会要項に基づき選考されたセンター長は、第5条第1項の規定に基づき選考されたものとみなす。

## 附 則 抄

1 この規程は、平成8年4月1日から施行する。

## 附 則

この規程は、平成10年4月1日から施行する。

附 則 抄

1 この規程は、平成11年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成12年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成13年4月1日から施行する。

## 1.2 留学生センター外国人留学生日本語・日本文化研修コース規程 (趣旨)

第1条 この規程は、金沢大学留学生センター規程第16条第2項の規定に基づき、外国人留学生日本語・日本文化研修コース(以下「研修コース」という。)に関し必要な事項を定めるものとする。

### (入学資格)

第2条 研修コースに入学できる者は、次の各号の一に該当する者とする。

- (1) 国費外国人留学生制度実施要項(昭和29年3月31日文部大臣裁定)に定める日本語・日本文化研修留学生
- (2) 金沢大学と交流協定のある外国の大学からの推薦による外国人留学生
- (3) その他金沢大学留学生センター長(以下「センター長」という。)が適当と認めた外国人留学生

### (入学許可)

第3条 センター長は、研修コースに入学を志願する者について、金沢大学留学生センター委員会(以下「委員会」という。)の議を経て、科目等履修生又は特別聴講学生として入学を許可する。

### (定員)

第4条 研修コースの定員は、20人とする。

### (教育期間)

第5条 研修コースの教育期間は1年以内とし、その始期は10月とする。

### (教育課程)

第6条 研修コースの教育課程は、委員会の議を経て、別に定める。

### (研修コース以外の授業科目の履修)

第7条 研修コースに在学する者が、研修コース以外の授業科目を履修しようとする場合は、所定の手続を経て許可を得なければならない。

### (研修コース在学者以外の者の授業科目の履修)

第8条 研修コースに在学する者以外の者が、研修コースの授業科目を履修しようとする場合は、センター長に願い出て許可を得なければならない。

### (修了)

第9条 センター長は、前条の教育課程を修了した者に対して、修了証書を授与する。

### (雑則)

第10条 この規程に定めるもののほか、研修コースに関し必要な事項は、センター長が、別に定める。

## 附 則

この規程は、平成7年10月16日から施行する。

## 附 則

この規程は、平成10年4月1日から施行する。

## 附 則

この規程は、平成11年4月1日から施行する。

### 1.3 留学生センター外国人留学生日本語研修コース規程

#### (趣旨)

第1条 この規程は、金沢大学留学生センター規程第15条第2項の規定に基づき、外国人留学生日本語研修コース(以下「研修コース」という。)に関し必要な事項を定めるものとする

#### (受講資格)

第2条 研修コースを受講することができる者は、次に掲げる者とする。

(1) 国費外国人留学生制度実施要項(昭和29年3月31日文部大臣裁定)に定める研究留学生(以下「研究留学生」という。)

(2) 日韓共同理工系学部留学生事業実施要項(平成12年8月1日文部省学術国際局長裁定)に定める予備期間中の日韓理工系留学生(以下「日韓理工系留学生」という。)

#### (日本語研修生)

第3条 センター長は、研修コースを受講しようとする者について、金沢大学留学生センター委員会(以下「委員会」という。)の議を経て選考を行い、日本語研修生として許可する。

#### (研修コースの種類及び定員)

第4条 研修コースは、次の各号に掲げる種類に分けるものとし、それぞれの定員は、当該各号に定める数とする。

(1) 研究留学生に対する研修コース 30人

(2) 日韓理工系留学生に対する研修コース 学長が定める人数

#### (教育期間)

第5条 研修コースの教育期間は6か月とし、その始期は4月及び10月とする。

#### (教育課程)

第6条 研修コースの教育課程は、委員会の議を経て、別に定める。

#### (修了)

第7条 センター長は、前条の教育課程を修了した者に対して、修了証書を授与する。

#### (雑則)

第8条 この規程に定めるもののほか、研修コースに関し必要な事項は、センター長が、別に定める。

#### 附 則

この規程は、平成7年10月16日から施行する。

#### 附 則

この規程は、平成11年4月1日から施行する。

#### 附 則

この規程は、平成12年10月1日から施行する。

## 1.4 金沢大学短期留学プログラム規程

### (設 置)

第1条 金沢大学(以下「本学」という。)に、1年間の特別の教育課程を編成し、主として英語による教育を行う金沢大学短期留学プログラム(以下「短期プログラム」という。)を置く。

### (目 的)

第2条 短期プログラムは、外国の大学等に在学する学生を受け入れて、大学間等の協力及び提携の強化を図るとともに、当該学生が専門分野の知識及び我が国への理解を深めることを目的とする。

### (入学資格)

第3条 短期プログラムの学生(以下「短プロ学生」という。)として入学することのできる者は、大学間交流協定又は部局間交流協定を締結している外国の大学等(協定の締結について協議中である大学等を含む。以下「協定校」という。)の学部の3年次以上又は大学院の修士課程に在学している学生とする。

### (在学期間)

第4条 短プロ学生の在学期間は、1年以内とする。

### (受入れ人数)

第5条 短プロ学生の受入れ人数は、25人程度とする。

### (入学時期)

第6条 短プロ学生の入学時期は、原則として10月又は4月とする。

### (学 期)

第7条 学期は、次の2学期とする。

秋学期 10月1日から翌年3月31日まで

春学期 4月1日から9月30日まで

### (身 分)

第8条 短プロ学生は、第3条に規定する学部学生にあっては金沢大学留学生センター(以下「留学生センター」という。)に、同条に規定する大学院修士課程の学生にあっては各研究科(修士課程及び博士前期課程に限る。以下同じ。)に所属するものとする。

2 短プロ学生は、科目等履修生、特別聴講学生又は特別研究学生として取り扱うものとする。

### (出願手続)

第9条 短プロ学生として入学を志願する者は、所定の期日までに、協定校を経て学長に願い出なければならない。

### (入学者の選考)

第10条 入学者の選考は、金沢大学留学生委員会(以下「委員会」という。)が行う。

(入学許可)

第11条 学長は、前条の結果に基づく合格者のうち、所定の期日までに、所定の手続を完了した者に入学を許可する。

(授業科目、履修方法等)

第12条 短期プログラムの授業科目、履修方法等は、別に定める。

(履修手続)

第13条 短プロ学生は、履修を希望する授業科目を、所定の期日までに、金沢大学留学生センター長(以下「センター長」という。)に願い出て承認を受けなければならない。

(成績の評価)

第14条 授業科目の成績の評価は、試験、論文、報告書、平素の学習状況等により授業担当教官が行う。

2 授業科目の成績は、優(80点以上)、良(79~70点)、可(69~60点)及び不可(59点以下)の評語をもって表し、優、良及び可を合格とし、不可を不合格とする。

(成績証明書)

第15条 センター長は、授業担当教官からの報告に基づき、短プロ学生に成績証明書を交付する。

(修了証書)

第16条 学長は、各学期10単位以上、かつ、1年で20単位以上を修得した短プロ学生に対し、委員会の議を経て修了証書を授与する。

(学部学生等の履修)

第17条 本学の学部学生等は、短プロ学生の履修に支障のない限り、所定の手続を経て短期プログラムの授業科目を履修することができる。

2 前項の規定により修得した単位を学位取得に必要な単位数に算入することについては、各学部又は各研究科の定めるところによるものとする。

(実施体制)

第18条 短期プログラムの教育課程の編成その他教育に関する重要な事項は、委員会が審議するものとする。

2 短期プログラムの実施は、各学部及び各研究科の協力を得て、留学生センターが当たるものとする。

(事務)

第19条 短期プログラムに関する事務は、学生部留学生課において処理する。

(雑則)

第20条 この規程に定めるもののほか、短期プログラムに関し必要な事項は、委員会が別に定める。

**附 則**

この規程は、平成10年4月1日から施行する。

**附 則 抄**

1 この規程は、平成11年4月1日から施行する。

**附 則**

この規程は、平成12年4月1日から施行する。

## 2. 学生交流の推移

### 2.1 協定校との学生の相互交流の推移

表 2.1-1 学生交流の状況

(単位：人)

		H 4	H 5	H 6	H 7	H 8	H 9	H 10	H 11	H 12	H 13
国名・ 地域名	大学名	受 入	派 遣								
中国	蘇州大学							2	1	3	3
	華西医科大学						2	1	2		2
	ハルビン医科大学								1		
	北京師範大学								1	1	1
	北京工業大学										2
	大連大学										
	※東北師範大学社会学部						1		1	1	
	※中国科学院化学研究所特殊材料研究センター								1	1	
	※蘇州医学院生物技術研究所					1				1	
	※北京大学中国語言文学系										
	※北京大学薬学院										
インド	※東華大学材料学院										
	※第一軍医大学										
	インド プネー大学							1	1	1	
	インドネシア ※バンドン工科大学							1	1	2	1
	シンガポール ※国立シンガポール大学								2		
	フィリピン ※フィリピン大学ディリマン校									1	2
	大韓民国 東亜大学校								2	2	2
	釜山国立大学校										2
	※韓国科学技術研究院遺伝子工学研究所										
	※国立釜慶大学校自然大学校								2	2	1
タイ	※湖西大学校工科大学								2	2	2
	※翰林大学校国際学大学院								2		
	チュラロンコン大学									3	3
	モンクット王工科大学トンブリ校					1		2	2	2	1
	※チェンマイ大学理学部								1	2	1
オーストラリア	オーストラリア国立大学							1	2	3	1
	グリフィス大学										
	ロイヤル・メルボルン工科大学										1
	※南オーストラリア大学情報工学・環境工学学群								2	1	

		H 4	H 5	H 6	H 7	H 8	H 9	H 10	H 11	H 12	H 13
国名・ 地域名	大学名	受 派 入 遣									
エジプト	アシュート大学									2	
フランス	ナンシー第一大学			1	1	2	1		2	1	1
	ナンシー第二大学	1	1		1		1				
	※サヴォア大学										
ドイツ	ジーゲン総合大学			1	1	1		2	1	1	1
	レーベンスブルク大学								2	1	2
フィンランド	ユバスキュラ大学								2	2	1
	ヘルシンキ工科大学										
アイルランド	ダブリンシティ大学	5	5	2	1	2	1	2	2	2	1
イギリス	リバプール ジョン モアズ大学	1	1	2	1	2	2	1	4	1	3
	シェフィールド大学		1	2	1	2	1	1	4	2	5
	※オックスフォード大学ペンブロッ クカレッジ					1	1	2	1	1	
ポーランド	ルブリン工科大学	1	1		1			1	2	1	1
ロシア	カザン国立大学				1		1		2	2	2
	ロシア科学アカデミー極東支部										
	※イルクーツク経済アカデミー	2		2		1	1	1			
	※極東国立総合大学附属東洋大学	2	1	1	2	2	1		1	1	1
	※国立クラスノヤルスク医科大学										
	※理論実験物理学研究所										
	※国立イルクーツク大学										
スロバキア	スロバキア工科大学										1
台湾	国立台湾師範大学										1
アメリカ	ペンシルバニア大学	2	1	1	1	2		1	1	1	
	ニューヨーク州立大学バッファロー校	1	1	1	1	1	2	1	1	2	2
	ウイリアム アンド メアリー大学	3	1	2	5	1	2	2	2	2	1
	タフツ大学							2	5	1	4
	ニューヨーク州立大学ニューポルツ校	1	1	1	1	1	2	1	2	2	3
	※プリンストン大学東洋学部										1
計		18	6	16	6	19	6	14	10	13	14
								23	5	33	15
									51	15	55
									12	46	11

※印は部局間交流協定校。受け入れ欄留学生数は、金沢大学短期留学制度、大学推薦による国費外国人留学生制度（研究留学生、日本語・日本文化研修留学生）及び奨学財団招致留学生奨学制度により受け入れられた留学生数を示す。

## 2.2 金沢大学における外国人留学生数の推移

表2.2-1 外国人留学生数の推移：奨学金受給状況別（5月1日現在）

	H 1	H 2	H 3	H 4	H 5	H 6	H 7	H 8	H 9	H 10	H 11	H 12	H 13	H 14
国費	27	30	30	47	66	65	63	72	78	82	89	92	97	92
私費	44	63	65	84	125	144	166	177	183	208	213	227	240	232
外国政府	7	10	15	19	19	19	16	18	15	16	16	15	16	16
計	78	103	110	150	210	228	245	267	276	306	318	334	353	340

図2.2-1 外国人留学生数の推移：奨学金受給状況別（5月1日現在）

外国人留学生数の推移

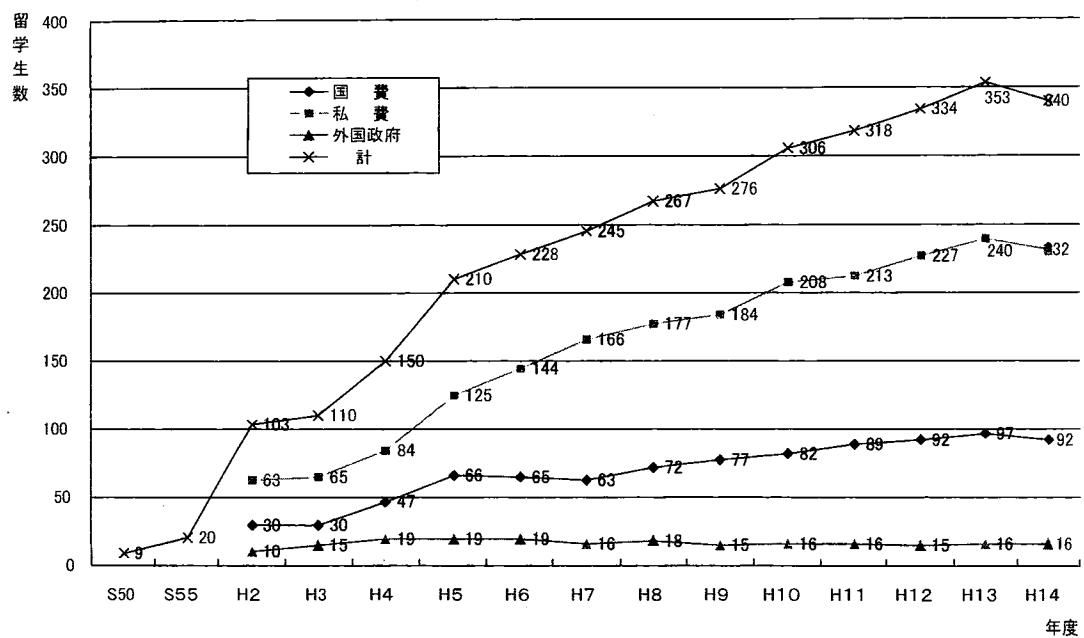


表2.2-2 外国人留学生数の推移：地域別（5月1日現在）

	H 1	H 2	H 3	H 4	H 5	H 6	H 7	H 8	H 9	H 10	H 11	H 12	H 13	H 14
アジア	68	94	101	135	176	193	204	219	227	244	255	268	270	279
オセアニア			1	2	1	1	2	3	2	2	2	5	7	6
アフリカ		2	2	2	4	6	5	10	14	13	11	12	14	13
ヨーロッパ	6	4	3	7	18	15	20	24	22	35	34	38	40	26
北米	3	1	1	2	9	8	11	7	6	6	11	8	16	10
中南米	1	2	2	2	2	5	3	4	5	6	5	3	6	6
計	国数	18	19	17	22	31	32	31	34	31	38	41	45	48
計	人数	78	103	110	150	210	228	245	267	276	306	318	334	353
														340

# **金大キャンパスの国際化を考える**

## **『金沢大学留学生センター自己点検評価』**

### **追 加 資 料**

**2002. 10～2003. 9**

**金沢大学留学生センター**

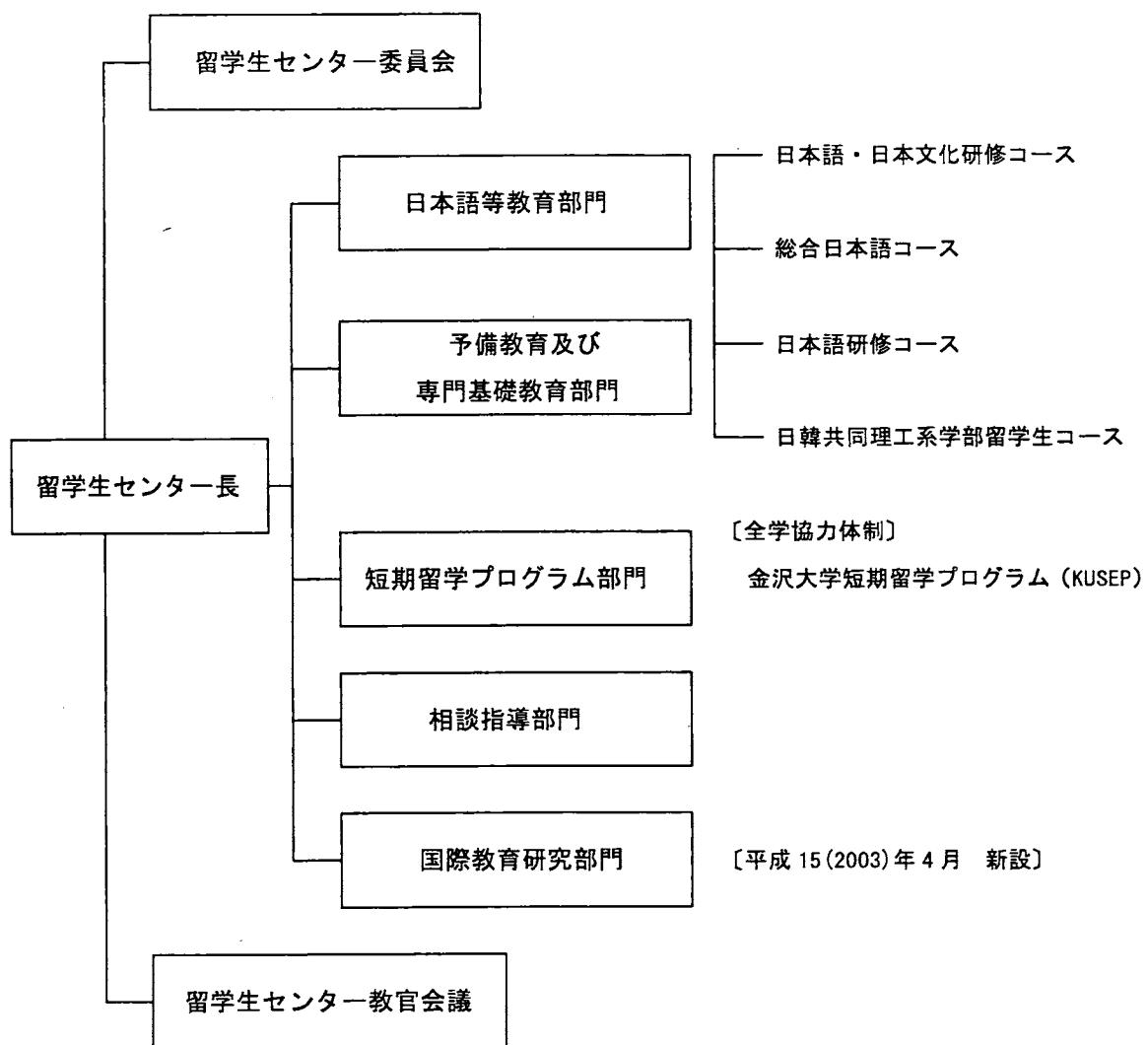
**2003**

\* 本文中のセクション番号は、『金沢大学留学生センター自己点検評価』(2002) 中のセクション番号に相当します。また、括弧内のページ表示は、同報告書中のページ番号を表します。なお、ページ番号が付記されていないセクションは、当該資料をもって新たに設定したものです。

## 第Ⅰ編 留学生センターの現在 (p. 3)

### 2. 留学生センター組織 (p. 3)

#### 2.1 組織図 (p. 3)



#### 2.1.1 教員組織 (p. 3)

##### a. センター長 (p. 3)

センター長氏名	所属・官職	在任期間
中山 謙二	工学部・教授	平成 15 年 4 月～現在

b. 専任教官 (p. 4)

2003年4月には、専任教官1名が増員された。これに伴い留学生センター組織内に国際教育研究部門が設置され、留学生の英語学習支援、留学生と日本人学生の交流促進、日本人学生の留学支援等の業務を担当することとなった。

役職・部門・コース	現員	専任/兼任	役職内訳
国際教育研究部門	1	専任	助教授

2.2 教員のプロフィール (p. 5)

八重澤（松下）美知子

学歴・職歴：広島大学留学生センター客員研究員（1998.4～2004.3（予定））

峯 正志 MINE Masashi

学歴・職歴：広島大学留学生センター客員研究員（1998.4～2004.3（予定））

斎木 麻利子 SAIKI Mariko

生 年：1959年

官職・学位：助教授・Ph.D. (Linguistics)

学歴・職歴：上智大学外国語学部英語学科卒業（1982.3），スタンフォード大学大学院  
言語学科 Ph.D.コース修了（1987.6），金沢大学教養部助教授（1987.4），金沢  
大学教育学部助教授（1996.4），金沢大学留学生センター助教授（2003.4）

専門分野：理論言語学，日本語学，韓国語学，中国語学

部 門：国際教育研究部門

3 教育部門の活動 (p. 8)

3.1 プログラム別カリキュラム等 (p. 8)

3.1.5 総合日本語コース（一般日本語）(p. 73)

3.1.5.2 カリキュラム (p. 74)

c. クラスの種類とレベル (p. 74)

iii) 技能別クラス

平成15年度前期に、従来の6クラスの他に「中級読解」「上級読解」の2クラスを新たに設けることになり（「中級読解」は、担当教官が在外研修中のため15年度後期から開講），それに伴って、従来の「読解」は「初級読解」となった。これら技能別8クラスのうち、「初

級読解」と「コンピューターを使った論文作成」を除く 6 クラスは、同じく平成 15 年度前期から、教養的科目的言語科目（「日本語 B」）としても開講されている。

**g. 総合日本語コースのクラス活動に参加する学生のメーリングリスト**

留学生の日本語力向上の手助けだけではなく、留学生・日本人学生双方に出会いと交流の機会を提供することを目的とし、平成 15 年度前期に「総合コースの授業に参加可能な日本人学生のメーリングリスト」を作り、日本人学生への授業参加の呼びかけのシステム化をスタートした。現在このメーリングリストには 24 人の日本人学生が登録している。

**3.1.6 全学的貢献 (p. 98)**

**3.1.6.4 関連科目：教育学部の教員養成 (p. 100)**

平成 15 年度前期

- 日本語教育学概論 B (峯)
- 日本語教育学各論 B (長野)
- 日本語教育実習 (三浦)
- 言語学特殊講義 B (斎木)
- 言語学演習 A (斎木)

**3.1.6.5 その他： (p. 101)**

**c. 教養的科目担当**

- 総合科目「多文化共生の時代を生きる」
- 総合科目「ジェンダー学入門」への参加
- 言語科目「ギリシャ語 B」(平成 13 年度)
- 言語科目「英語 B」(平成 15 年度)
- テーマ別・一般科目 人間 「心理学」(平成 7-15 年度)

**d. 文学部の科目担当**

- 「特殊語学（シュメール語）」(平成 10 年度)
- 「言語学特殊講義（アッカド語）」(平成 11 年度)
- 「特殊語学（ワラニー語）」(平成 12 年度)

**e. 教育学部の科目担当**

- 「英文法 A」(平成 15 年度)
- 「英語学演習」(平成 15 年度)
- 「英語学研究」(平成 15 年度)
- 「総合演習 c」(平成 15 年度)

**f. 教育学研究科の科目担当**

- 「英語学特論 I」（平成 15 年度）
- 「英語学演習 I」（平成 15 年度）

**g. 工学部の科目担当**

- 「職業指導 I」（平成 7-15 年度）
- 「職業指導 II」（平成 7-15 年度）

**h. 医学部の科目担当**

- 「医学入門（基礎）」（平成 13-15 年度）

**i. 保健管理センター**

- カウンセラー（平成 13-15 年度）

**5 研究活動 (p. 113)**

**5.1. 各教官の研究 (p. 113)**

**5.1.1 岡沢孝雄 (p. 113)**

**b. 業績 (p. 113)**

<報告>

- 1) 学生による金沢大学短期留学プログラムの評価と評価に関与する要因. 金沢大学留学生センター紀要 6 : 67-82. (岡沢孝雄, ビットマン ハイコ), 2003

**c. 口頭発表等 (p. 114)**

<研究発表>

- 5) 沖縄におけるカニアナヤブカ *Ochlerotatus bisisasi* の生態 III-成虫の日周活動－(衛生動物学会 2003 年 4 月 大分市)

**d. 学会・社会的活動**

日本衛生動物学会, 日本昆虫学会, 日本寄生虫学会, 日本生態学会, 日本公衆衛生学会, 日本衛生学会, 日本民族衛生学会, 北陸公衆衛生学会, American Mosquito Control Association, Vector Ecology

### 5.1.2 三浦香苗 (p. 115)

#### b. 業績 (p. 115)

<学術論文>

- 8) 三浦香苗：「教養教育の『日本事情：多文化交流ディスカッション』授業研究」，『金沢大学留学生センター紀要第 6 号』，31-47，2003

#### d. 学会・社会的活動

日本語教育学会（研究集会北陸地区委員 1999.5～2003.4，評議員 2003.5～現在），日本語教育方法研究会，専門日本語研究会

### 5.1.3 八重澤（松下）美知子 (p. 116)

#### b. 業績 (p. 117)

<著書>

- 6) 「親・教師の子供観を見直す—「良い子期待」から「個性・多様性」の尊重へ—」  
『児童心理 3』（共著）金子書房 2003

<学術論文>

- 31) 「帰国を控えた短期滞在留学生の面接調査—先行研究との比較による検討—」『金沢大学留学生センター紀要』（共著）vol.6, 55-65, 2003  
32) 「外国人留学生の受入れに関する研究」，『異文化間教育学会 24 回大会発表抄録』（共著）56-57, 2003  
33) 「留学満足度に関する事例研究」，『異文化間教育学会 24 回大会発表抄録』（共著）54-55, 2003  
34) 進路の選択と決定に関する研究（12）－職業観の発達；ジェンダーの視点から－，『日本教育心理学会第 44 回総会発表論文集』（共著）688, 2003  
35) 「進路の選択と決定に関する研究（13）－キャリア教育の視点から－」，『日本教育心理学会第 44 回総会発表論文集』（共著）689, 2003

<報告書>

- 11) セクシャル・ハラスメント アンケート調査結果報告書，金沢大学セクハラ実態調査小委員会（共著）2002  
12) 金沢大学 2002 年金沢大学留学生生活実態調査報告書，留学相談・指導専門委員会/金沢大学留学生センター（共著）2003

<その他>

- 3) 金沢大学セクシャル・ハラスメント アンケートから、金沢大学セクハラ実態調査小委員会 2001

c. 研究発表等 (p. 119)

<シンポジスト・コーディネーター>

- 11) 「日越国際交流フォーラム'03」(財)アイ・社会文化推進事業団主催、北陸ベトナム友好協会共催、2003
- 12) 「男女共同参画出前講座」(石川県人権擁護委員連合会／男女共同参画社会推進委員会対象)、金沢市男女共同参画室 2003
- 13) 「男女共同参画「まちかど参画トーク」」(大学生部門)、石川県県民文化局男女共同参画課 2003
- 14) 「男女共同参画「まちかど参画トーク」」(中学・高校生部門)、石川県県民文化局男女共同参画課 2003
- 15) 「留学生国際シンポジウム「日本海交流の試み」」第16回 JAPAN TENT 2003
- 16) 「女性のライフサイクル心理学」金沢大学教育開放センター 出前講座(七尾市生涯学習課 平成15年度主事研修会) 2003

d. 学会・社会的活動

日本教育心理学会、日本青年心理学会(編集委員1995.4)、日本カウンセリング学会、異文化間教育学会、日本心理学会、北陸心理学会、国立大学留学生指導研究協議会(幹事1997～2001、編集委員1999)、石川工業高等専門学校セクシャル・ハラスメント防止委員会委員(2001.10～現在)、石川県教育委員(1998.10～現在)、石川県教育委員女性の生涯学習研究委員会委員(1998.7～1998.3)、石川県教育委員生涯学習課男女共同参画学習部委員(1998.7～2002.3)、石川県男女共同参画審議会委員(2002.4～現在)、石川県農業系大学基本構想策定委員(1999.8～2000.7)、石川県男女共同参画啓発副読本編集委員(2001.12～2002.3)、いしかわ自然学校アドバイザー会議委員(2001.7～2003.3)、(財)いしかわ女性基金・理事会(1996.5～現在)、金沢市女性センター運営委員(1998.5～2002.3)、金沢市社会教育委員(2002.4～現在)、金沢市男女共同参画推進懇話会委員(1999.7～現在)、金沢市男女共同参画審議会委員(2002.4～現在)

5.1.4 長野ゆり (p. 120)

b. 業績 (p. 120)

<学術論文>

- 2) 「総合日本語コース C1(初中級)クラスの開設と活動・教材開発」(笹原幸子・寺下優子との共著)『金沢大学留学生センター紀要』第6号: 13-30, 2003

**d. 学会・社会的活動**

国語学会, 日本語教育学会, 日本語文法学会

**5.1.5 峯正志 (p. 120)**

**b. 業績 (p. 121)**

<辞書・辞典項目>

2) 「シュメール語」, 『古代オリエント事典』, 岩波書店 (印刷中)

**d. 学会・社会的活動**

日本言語学会, 日本オリエント学会, 日本語教育学会 (北陸地区研究集会委員2003~),

日本教育工学会, 西日本言語学会 (運営委員1996~現在), 日本ギリシア語ギリシア文学会 (運営委員1989~現在)

**5.1.6 太田亭 (p. 122)**

**b. 業績 (p. 122)**

<学術論文>

3) 「『講義の聽解』を目指す理解促進のための基本目標と授業活動について」『金沢大学留学生センター紀要』第6号, 1-12, 2003

**c. 研究発表等 (p. 123)**

<在外研究>

1) 文部科学省在外研究 (決定番号: 15-短-55)

日墨文化学院を中心とするメキシコ市内及び周辺地域の日本語教育機関13校延べ16機関の協力を得て, メキシコ人日本語学習者の指示語習得に関する実証的研究調査を行った。

**d. 学会・社会的活動**

日本語教育学会, 日本言語学会, 東京スペイン語学研究会, 国立国語研究所日本語教育センター第二研究室客員研究員 (1998.4~2001.3), 日本ブラジル・ポルトガル学会, Asociacion de Linguistica y Filologia de la America Latina (ラテンアメリカ言語学文献学会)

**5.1.7 ルチラ パリハウダナ (Ruchira Palihawadana) (p. 123)**

**b. 研究業績 (p. 123)**

<学術論文>

3) 「副詞『しばらく』による出来事時の局限」『日本語教育』118号: 67-76, 2003

c. 研究発表等 (p. 124)

<口頭発表>

- 2) Linguistic Expression of Event Actualization in Japanese : An Analysis of Adverb "yatto", Prof. Bernd Heine Seminar 2003 in Noto (2003.9.9)

d. 学会・社会的活動

日本語教育学会, 国語学会, 日本文法学会, 日研生教育改善研究会(議長 2002.2, 2003.3),  
金沢市教育委員会・小中一貫英語教育実施検討委員会委員(2000.7~現在)

5.1.8 ビットマン ハイコ (Bittmann Heiko) (p. 124)

b. 業績 (p. 124)

<学術論文・雑誌等>

- 6) 「日本武道に見られる思想の研究(その2) - 日本武道における「空」の一考察」, 『金沢大学留学生センター紀要』第6号, 49-54, 2003  
7) 「私から見た日本武道」, 『月刊武道』9月特大号(通巻442号), 18-19, (財)日本武道館, 2003

<報告>

- 1) 学生による金沢大学短期留学プログラムの評価と評価に関与する要因. 金沢大学留学生センター紀要 6: 67-82 (岡沢孝雄, ビットマン ハイコ), 2003

<主な競技歴>

- 9) 平成15年6月 金沢市剣道連盟 金沢市剣道連盟設立50周年記念剣道・居合道大会・居合道五段の部最優秀賞  
10) 平成15年10月 全日本剣道連盟 第38回全日本県居合道大会・都道府県対抗優勝試合五段の部出場(石川県代表)

d. 学会・社会的活動

日本武道学会, 空手研究会, 東北アジア体育・スポーツ史学会, 琉球唐手術国際研究会 (International Ryukyu Karate Research Society), International Society for the History of Physical Education and Sport

### **5.1.9 斎木麻利子**

#### **a. 現在の研究テーマ**

- 1) 語彙機能文法理論(Theory of Lexical-Functional Grammar)に基づく受身構文とタフ構文の研究
- 2) 与格の類型論的研究
- 3) 言語と音楽のインターフェイス

#### **c. 研究発表等**

<招待講演>

- 1) "Preservation of Lexical Prominence in Vocative Chant," Young-mee Yu Cho (Rutgers University) and Mariko Saiki (Kanazawa University), Invited Presentation at the 13th Japanese/Korean Linguistics Conference, Michigan State University, August 2, 2003.

#### **d. 学会・社会的活動**

International Lexical-Functional Grammar Association, 日本アイスランド学会, 上智大学言語学会, 日本英文学会中部支部, 日本英文学会中国四国支部, 石川県教育委員会・学習指導カウンセラー (2003.5~2004.3), 石川県教育委員会・基礎学力調査研究委員会委員 (2003.7~2004.3)

### **5.2. 外部資金の導入状況 (p. 126)**

#### **岡沢孝雄**

- 1) 科学研究費補助金 基礎研究 (B) (2) 平成 11~12 年度 研究分担者  
研究題目 「ラオスにおける蚊媒介性感染症の疫学的調査研究」

## 6 地域・社会貢献 (p. 127)

### 6.1 金沢大学公開講座 (p. 127)

平成 15 年度大学公開講座 「留学生教育への扉」(計 4 回)

受講者は 30-60 歳代の 男性 3 人 女性 4 人 合計 7 人

月日	題目	講演者
5月 24 日(土)	留学生教育- 日本語で教える日本語 - 日本語は特殊か- 世界の言語における日本語 -	三浦香苗 峯正志
5月 30 日(土)	ドイツ人から見た日本武道の魅力- 日本武道 体験：杖道-	ビットマン ハイコ
6月 7 日 (土)	日本語文法はおもしろい つまづかない『国際交流』を目指して	長野ゆり ルチラ パリハワダナ
6月 14 日(土)	日本で学んだ留学生達のその後-日本に留学したことはどうな意味や意義があったのだろうか?- 留学生教育の意義	八重澤美知子 岡沢孝雄

### 6.4 招待講演 (p. 130)

#### b. 八重澤（松下）美知子 (p. 130)

xi) 平成 15 年度 北陸農政局職員行政実務研修

演 題：「男女共同参画社会の実現」

金沢市：2003 年

xii) 金沢市味噌蔵公民館

演 題：「金沢で学んだ留学生たちのその後」

金沢市：2003 年

xiii) 平成 15 年度 看護師・中堅保育士研修会 (石川県)

演 題：「子どもの権利と保育-多文化共生の視点よりー」

金沢市：2003 年

## 6.5 JAPAN TENT (p. 131)

### c. 第16回 JAPAN TENT 世界留学生交流・いしかわ2003

(2003年8月1日-8月8日)

「日本武道の体験・杖道」

日時：2003年8月6日

講師：ビットマン ハイコ 金沢大学留学生センター助教授

## 6.6 「金沢学」への招待

平成14年度から開始された文部科学省地域貢献特別支援事業に応募し、「『金沢学』への招待」を企画・実施した。

金沢大学では、「総合大学であることの特徴を生かし、蓄積された研究成果と教育実績を踏まえた知識・技術等を地域に還元し、もって地域の知の向上に貢献すること」を目標としている。この目標の下、留学生センターは、「留学生教育」、「日本文化理解カリキュラムの開発」、「地域との連携」をはじめとするセンター設立以降の活動実績を生かし、地域貢献プログラムを企画した。これが「『金沢学』への招待」である。

「『金沢学』への招待」は、平成15年3月9日～3月15日までの6泊7日で行われた。参加者は、全国大都市圏の大学（国立大11校・私立大10校）で学ぶ留学生43名と1名の日本人学生であり、日本を含む15の国と地域の学生たちであった。これら44名の学生たちは、本学学生に加えて、金沢美術工芸大学・金沢工業大学の学生たちが行動を共にした。体験学習には、本学の学生たちがサークル単位で参加した。またこれは市民ボランティアの活動に負うところが大きかった。（『「金沢学への招待」報告書』参照。）

「『金沢学』への招待」は、平成15年度も地域貢献事業として、継続して実施されることが決まっている。

また、「『金沢学』への招待」の講義部分は、「いしかわシティカレッジ」の開講科目である「金沢学II」に継承されることとなっている（コーディネーター：木越治・文学部 八重澤（松下）美知子・留学生センター）。

## 7 講演・討論会・その他の活動 (p. 132)

### 7.1.3 日研生教育改善研究会 (p. 133)

前年度に引き続き平成 14 年度日研生教育改善研究会を開催した。

開催日 : 2003 年 3 月 4 日

場所 : 金沢大学総合教育棟 2 階大会議室

参加者 : 細川英雄 (早稲田大学), 浮葉正親 (名古屋大学), 森真理子 (京都大学),  
岸田泰浩 (大阪外国語大学), 五之治昌比呂 (大阪外国語大学), 奥村訓代  
(高知大学), 岡沢孝雄 (金沢大学), ルチラ パリハワダナ (金沢大学)

検討課題 : 1. 「日本人学生との合同授業の可能性」  
2. 「日研生教育の課題」

## 7.6 ホームビジット及び里親制度 (p. 140)

### a. ホームビジット (p. 140)

実施年月日	参加人数	寄宿先	実施内容
2003 年 5 月 17 日-18 日 (1 泊 2 日)	21	小松市, 加賀市, 根上町	那谷寺見学, 茶道体験, お旅祭り参加 (曳山体験), ホームビジット

### b. 日本語・日本文化研修コース里親制度 (p. 141)

当該制度の趣旨に対する里親の理解を一層深めるための試みとして、留学生が里親のために料理を作る内容の、「里親との各国料理大会」を実施した。

行事名 : 「里親との各国料理大会」

実施日 : 2003 年 3 月 1 日

場所 : ニュー三久キッチンハウス

参加者 : 里親家族, 日本語・日本文化研修生, 田上の関係者

## 7.8 実地見学旅行 (p. 143)

### 1. 平成 14 年度外国人留学生実地見学旅行

世界遺産の白川郷及び飛騨・高山等の史跡見学

2002 年 11 月

外国人留学生 54 名

m. 平成 14 年度外国人留学生実地見学旅行  
岡山・倉敷・姫路・神戸の史跡見学  
2003 年 3 月  
岡山城、後楽園、倉敷美観地区、姫路城、神戸異人館街  
外国人留学生33名

## 11 刊行物 (p. 155)

### 11.1 研究論文集（紀要）(p. 155)

#### 11.1.6 第 5 号 (2003 年 3 月)

##### a. 原著

- 太田亨 「講義の聴解」の目指す理解促進のための基本目標と授業活動  
長野ゆり・笹原幸子・寺下優子 総合日本語コース C1 (初中級) クラスの開設と  
活動・教材開発  
三浦香苗 教養教育の「日本事情：多文化交流ディスカッション」授業研究  
ビットマン ハイコ 日本武道に見られる思想の研究（その 2）—日本武道における  
「空」の一考察—

##### b. 報告

- 岡沢孝雄・ビットマン ハイコ 学生による金沢大学短期留学プログラムの評価と評  
価に関与する要因

### 11.3 日本語教材 (p. 157)

#### 11.3.7 総合日本語コース C1 (初中級) クラス使用教科書

『ともだちと話そう-初級から中級へ-』長野ゆり・笹原幸子・寺下優子, 2002  
総合コースで定めた C1 (初中級) レベルの到達目標は、既成のテキストで実現することが困難であったため、独自の教材を開発し、平成 14 (2002) 年度後期から C1 クラスでメインテキストとして使用している。また、毎学期、担当教師の声や学生の反応を参考にして改良作業を行っている。

##### <基本方針>

留学生が興味を持つようなトピックを通して、現代日本社会について理解を深めたり自己について再考したりできるようにする。さまざまな活動を行うことによって四技能の総合的な向上を図る。初級文法の復習をし、中級へスムーズに進むための足場を作る。

##### <構成と内容>

一つの課は原則として会話と読解から成り立っており、「食生活」「教育」「仕事」「住宅事情」「女性の生き方」「宗教観」「ネット時代の人間関係」の七つのトピックを扱っている。

各会話と読解には、本文の他、プリワーク、語彙リスト、表現、文型、フォローアップ・ワークなどが付けられている。

**金大キャンパスの国際化を考える**

**金沢大学留学生センター自己点検評価**

**1995.4～2002.9**

**2003年3月31日発行**

**発 行 金沢大学留学生センター**

**〒920-1192 金沢市角間町**

**T E L (076) 264-5188**

**F A X (076) 234-4043**

**印 刷 株式会社 ハクイ印刷**



金沢大学留学生センター  
〒920-1192 石川県金沢市角間町  
<http://isc.ge.kanazawa-u.ac.jp/>